

に於て阿育王の精神を吹き込まるるに至れり、即佛教は其冷淡なる毘那耶以外に熱意なる人情を輸入し、修道院以外に活潑の生命を得るに至りしは全く阿育王の感化に出でしなり。

蓋し戒律出世間の佛法は其形態を換えず永く其感化を保続し難き者、佛陀の佛教は其教祖の死を去るに従て、一部は冷淡となり、一部は煩瑣的に傾きて、其當初の精神は年を経るに従ひて消磨しつつありしなり、其活氣と其傳道とを振起するには人道の活世界に向て一轉せざるべからず、阿育王は恰も佛教に於て自己の信仰を涵養し、而して其人情に厚き精神に依りて茲に佛教の一大刷新振興をなせしなり、佛教が眞に宇內的宗教として布教傳播の新局面を開くに至りしは全く阿育の功なり、釋迦に其形式を萌芽せし宇內的宗教は阿育に至りて其精神と活氣を得たり、阿育は實に佛教の大成者にして又印度に於ける人道的宇內宗教の鼻祖と稱するも決して不可なし、王は王の教法即人道教の開祖にして、而して佛教は之と結托して其新面目を開きしなり。

其始王か特に慈悲心を發揮し特に佛教を尊崇するに至りしは、其が東方印度を征

佛敎と宇內的宗教

王の殺生禁業

服せしに當りて羯磨伽を平げし時、戦鬪の殘忍に心動きしに出づといふ、第十三法令、蓋し彼が仁慈惻愍の性情は殺戮殘忍の事を好まざりしなるべく、此を以て婆羅門が行ふ犠牲に血を流すが如き殘忍の事は王の甚だ忍びずとなせし所ならん、恰も好し佛の教は特に婆羅門が供犠苦行を以て痴にして又酷なりとして、人類并に獸類に對して柔和忍辱の行を勧めしかば、王は恰も其性情と其感動に適當したるの教法を佛教に發見して特に之に歸せしなり。

此を以て王が婦佛（フツブツ）の後正法を天下に宣布し徳風を萬民に鼓吹せんとするや先づ令を發して、獸類を虐待殺戮するを禁じたり、（第一法令）然れども祭祀供犠の爲に畜類を殺戮するは婆羅門古來の風習、戯遊娛樂の爲に獵狩生類を殘害するは刹帝利の最も好みし所、王の一法令は俄に此等の習俗を禁じ得べきにあらず、王は種々の方便を以て之を實行せんとせしも、（第四法令）其實は無効なりき。

然れども王が博愛の慈心は此に止まず、相次で正法を宣布し、國中に醫藥の業を昌にし、諸處に藥草を植えしめて人畜の病苦を救はんとし、又路傍に井泉を作りて人畜の養をなし、（第二法令）或は鄉黨の集會、Anusamyānaを開きて徳教を布かしめ、親

王の博愛事業

子兄弟朋友相愛し、道を行ふ者に法施し、殺生を矯め、人々柔和の謙徳を守るを教へ、又精神の教導者たる者をして人心を化せしめんと勉めたり(第三法令)。

王は尙此等の徳教を洽く國中に傳播せんが爲、即位の十三年に法臣 Dharmamahamata なる官吏を任命して國中諸處に派遣し、上下貴賤一切人民の間に入りて、徳教を説き又人民の徳行を監視せしめ、大に博愛の教を行へり(第六法令)。

又王は其始婆羅門の犠牲儀式を非とし、其が社會上特殊の位置を占むるを好まず之を平民平等の地に下だし、爲に後世の佛徒をして阿育王婆羅門を刑罰せりと訛傳せしむるに至りしも、又彼は特に佛教と相投合したるも、彼は決して宗派に偏せず、黨派の情を去り、一切の人民一切の修業者に平等に人道人情の教を布き、又婆羅門沙門の別なく同じく之に布施惠與したり、性情を柔和にし、言語を温順にして、仁慈の心を有する者には少しも其信仰宗派の別を眼中に置かざりしなり、此を以て諸派諸人和合して正法に従ふは王の最も熱心に勉めし所なり(第十二法令)然れども王の信仰の傾向は始より佛教的にして、始は只法を傳播するをのみ勉めしが、終には明に佛法僧に歸命するを宣示して、特に佛教の爲に力を盡し其經典を結集せ

阿育王の歸佛

阿育王と婆羅門教

むるに至れり、王は正法を四方衆民に宣布するを以て最大の快樂とし、又最大の善事と信し、四方を教法に感化するは最上の勝利なりと信せしかば(第九法令)政治上の組織に依りて教法を傳播するの外に尙大に宣教師を派せり、其即位十八年に佛教の經典を整理記録する爲に千人の上座を其都城に會す、即是れ有名の結集にして合誦に依りて傳へられし佛典は此に初めて其成形を得、佛教の有形的根底始めて成りしなり。

阿育王の結集事業

傳ふる所に依れば此結集には帝須 Tissa 之に座長として九ヶ月の永きに亘り左の七部を編成したりと。

- 一 Vinaya-samukase 戒律の要點
- 二 Aliya-vasāni 聖果
- 三 Anāgata-bhayāni 未來の恐怖
- 四 Muni-gāthā 牟尼の頌
- 五 Moneya-suta 賢者の行狀
- 六 Upatissa-paṭha 舍利弗の問答

七 詐僞に附きて佛の羅喉羅に對する説法 (パイラート刻文)

即是れ佛教經典の大本にして、後のパーリ三藏の如きは此に基きて編輯せられしなり。

阿育王の
布教

此と同時に王は特に四方に宣教師を派する事を決し、百五十六人の宣教師 *Vinaya* を任命して、國中國外に派遣したり、其地方の主なる者西北にありては遠くバクトリアの希臘人より迦濕彌羅、パンジャブの邊より、北は雪山、南はデツカン高原の一部錫崙島より東南緬甸に及びたり。

錫崙島の
佛

就中錫崙の布教は實に南方佛教の緒を開きし者にして、最重要の事たり、王の子摩訶。Mahinda は此より先既に佛に歸して比丘たり、大結集の翌年發して經典を携へ錫崙島に入り、其國王に迎へられ、先づ佛塔を建て寺院を創めて島中佛教の根本地となせり、後婦人にして法に入る者あるに及びて摩訶。Mahinda は其妹にして比丘尼たる僧伽。Sangha-mitta を招き、二人力を協せて島中に佛教を布きたり、彼等が島に將來せし處の經典は即パーリ語なりしかば此語は後來南方佛教の聖語となり、後緬甸、暹羅等佛教を此地より輸入せしに依り、此語は一般の聖語となり、摩訶。Mahinda は

其他の南
方佛教

南方佛教の開祖となれり、而して其三藏が今日の體裁に編成せられしは、摩訶。Mahinda 島の後百六十年なりき。

縮句へは阿育王の時に此く宣教したるも、當時は成績擧らず、後紀元後四百五十年佛。Buddhaghosha なる高僧錫崙より此地に來りて今の佛教の基を開けり、暹羅は此より尙後六百三十八年に至りて佛教あり、其南島ジャワの地に入りしも亦此頃にあり。

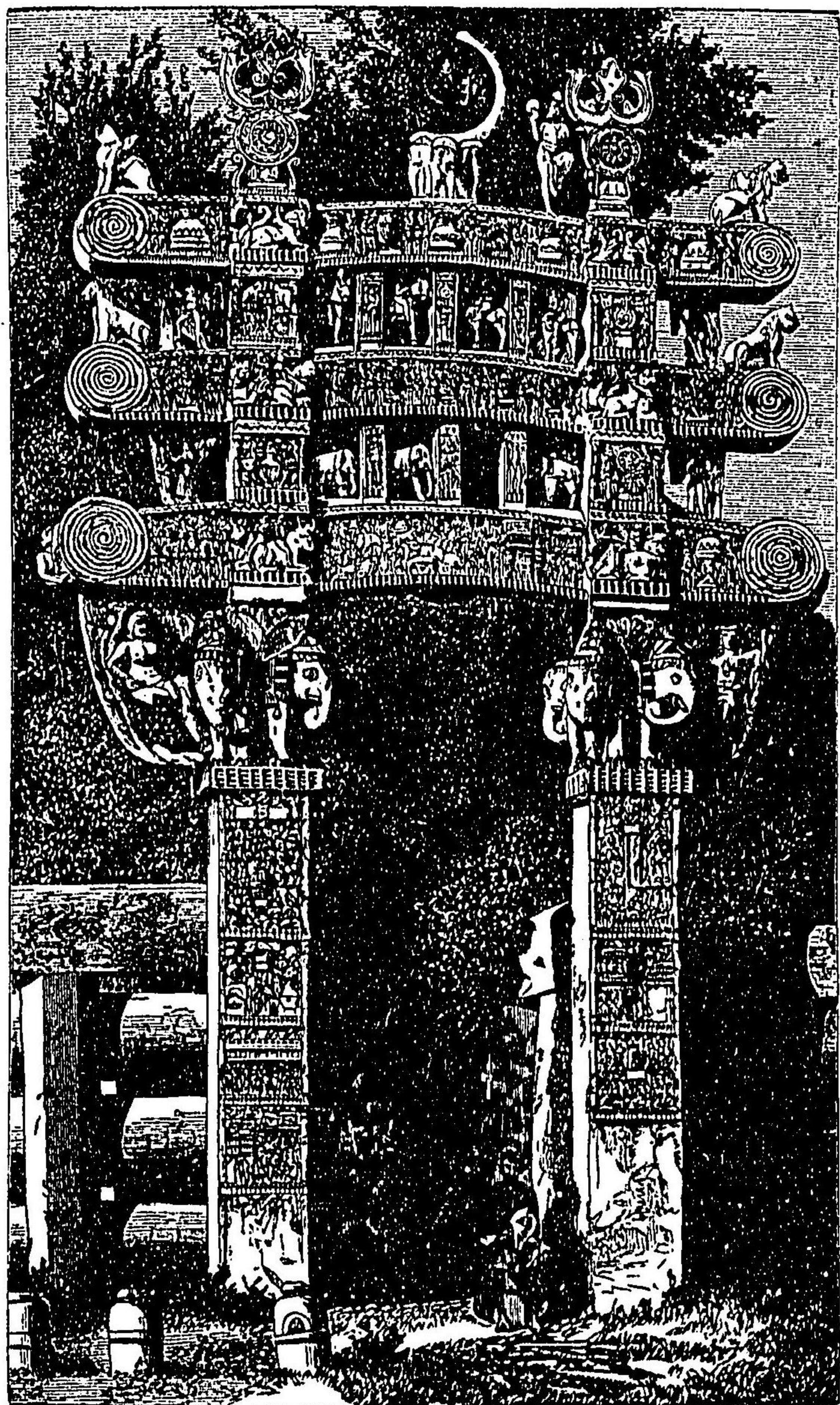
北方の佛
教

阿育王が西北迦濕彌羅の布教は即後來北方佛教の基にして後に詳述する所あらん。

阿育王の
事業進歩
及其晩年

此の如くにして今日は佛教の諸方に存するは殆ど全く阿育王の布教ありしに依る、王の偉績亦不朽なりといふべし。

王は尙此を以て満足せず、第二十六年には種々の法令を發し(柱面刻文)て、諸官司に命じて益教法を振起せしめ、政治、法律、進歩、安全皆教法に依るべきを示し(第一)或は善行を勸めて惡事を禁じ人に徳性を養はしめ(第二、第三)、又新にラージカ Rajuka なる司教を任命して民間に置きて信者を教化せしめ、又死刑者には刑の執行前三日



サチン佛塔の門

(本標好の築建教佛作の世後門てしに立建の王育阿は塔)

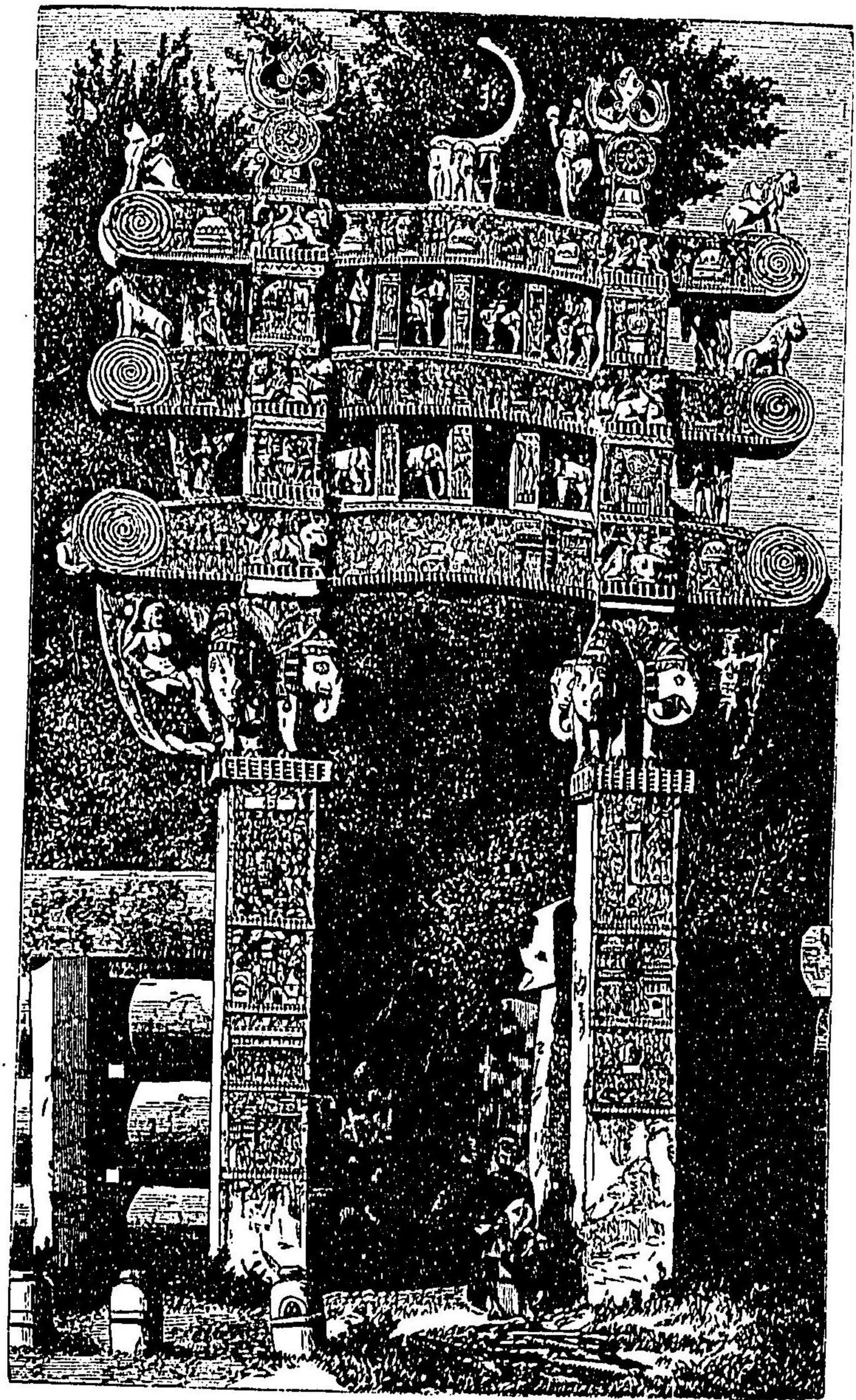


阿育王時代の窟内殿堂

の猶豫を興へて教法に浴せしめ(第四)再び殺生を禁じ慈悲淨意を勸め一切人民に教法を宣布せり。

阿育王の晩年は其宗教上の熱心奮の如くならざりしか、特に記すべき事實傳らず、且其皇后の死、再婚等の事情は王の一身上に不幸不快の事多かりしと見へ、王は其結集事業の後二十年にして遁世し、後二年にして死せり、王の死後は國勢甚しく衰微に赴きし者の如し、王の孫なるダサラトハの刻文は今日尙ナーガールジュニに傳れり。

第九節 佛教の分派と阿毘達磨



門の塔佛チンサ
 (本標好の築建教佛作の世後は門てしに立建の王育阿は塔)



堂殿内窟の代時王育阿

第九節 佛教の分派と阿毘達磨

の猶豫を與へて教法に浴せしめ(第四)再び殺生を禁じ、慈悲淨意を勸め、一切人民に教法を宣布せり。

一六六

阿育王の晩年は其宗教上の熱心奮の如くならざりしか、特に記すべき事實傳らず、且其皇后の死、再婚等の事情は王の一身上に不幸不快の事多かりしと見へ、王は其結集事業の後二十年にして遁世し、後二年にして死せり、王の死後は國勢甚しく衰微に赴きし者の如し、王の孫なるダサラトハの刻文は今日尙ナーガールジュニに傳れり。

一方には阿育の如く寛仁包容人の心情に訴へて普通の教法を唱導獎勵するありと雖も他方佛教の中には吠舍利會議の頃より既に部内分派の兆候を呈し、上座と大衆とは自ら對立分派の形勢をなすに至れり。

勢此の如くなれば始は修道教團の單純なりし戒律的佛教も、其中に爭議議論を生じ來り、議論は理論を生み、此理論的傾向は佛の所説教法に就きて哲學的解釋を試み、此に依りて佛教の中に阿毘達磨 *Abhidhamma* を生ずるに至れり。

抑阿毘達磨とは對法若くは副法の義にして、佛の達磨に附着して之が明細の叙述をなせるなり、此故に阿毘達磨の權輿と稱せらるる大目犍連の阿毘達磨法蘊足論の如きは、佛が舍衛國の逝多林に在りし時の説法を集めし者にして、全く佛生時の教法を集めたる阿含 *Agama* と異ならず、其内容も五怖罪、沙門果等戒律修行乃至正念、正思惟の事を教へし者にして、特に空漠弘大の議論を弄せし事なし、之に次で舍利弗の著作と稱せらるる阿毘曇論、解脱道論の如きも、佛陀の説法を敷衍せし者にして、其内容は阿含の所説に同じく、只解剖分拆の一層詳密なる者あるのみ、即阿毘達磨は始より論難の風調を帯びて起りし者にあらず、蓋し阿毘達磨は佛の滅後

に佛徒之中が説法教法を敷衍せし者ありしより起りしなり、若し阿育結集の時の優波提沙問答なる者は即今日の法蘊足論の類にして其聖果賢者の行狀なる者が今日に傳はれる諸衆生の果を説ける施設論、正道の行狀を叙せる解脫道論の類なりしとすれば、此頃には尙未だ阿毘達磨なる名は一般に行はれしにはあらざるなり、阿毘達磨法蘊足論の名稱が後世の命名に係る事は玄奘の譯條が記する所にも明なるより推せば、最古の教法叙述は必しも阿毘達磨の特目を立てざりしならん、滅後阿育王前後の頃に至る二百年の間には此種の叙述講説即毘婆娑 Vibhāṣā は諸上座宿徳の手に成りて漸次増殖し來れり、特に阿育王の前に文字の輸入ありて印度人が書記の言語を有し得るに及びては此等の述作は利益を得て、益多く試みられしなり。

而して佛教が年所を経るに従て、諸地方の精舍教團の中自ら意見習慣の異同を生じ、分派獨立の形勢を呈するに及びては、各其派の長老が述作せし所説を奉じて佛説を解釋會得するに至れり、此に於て此等の述作は諸分派宗義の根底となり、各其派の所説を此に寫し即其派の毘婆娑として、教法、戒律に次ぎて缺くべからざる重

分派と宗

要の位置を占むるに至れり、依て之を對法阿毘達磨として經律と相對するに至れり、此より古來傳ふる所の此種の述作も盡く阿毘達磨の名に攝せられ、其間亦其體裁を齊一にする爲に本文に變更を生せし事もあるべく、又其間に阿毘達磨に就きて種々の述作を生じ、各派其相承の阿毘達磨を結集したり、例せば迦旃延の作なりと傳ふる阿毘達磨毘婆娑論は説一切有部の根本毘婆娑となり、婆跋摩 Vasuvarma の四諦論を作りて之が梗概を著せしが如き是なり。

此時に當りて佛教教團分派の形勢を按ずるに、毘舍利の會議に正統と異流の分裂ありしより以後、分派の形勢は徐に進みつつありしなるべきも、其後に寛容包括なる阿育王の出でて其偉大の精神を以て教法を統轄し、外護の力に依りて之をして甚しき分裂反目をなさざらしめき、然れども佛教の隆盛は到底其間に諸種の異分子を含み、異傾向を孕み來らざるべからず、傳説に依れば、摩阿提婆 Mahadeva なる一僧の異見は終に佛教をして分裂せしめたりと、蓋し保守の正統派なる上座と進取圓轉の大衆とは到底永久に相和する能はず、其が一時縫合の姿を呈せしも、此に摩訶提婆の新運動に依りて再び其破綻を明にしたりしなり、此破裂の何れの時に

分派と尼

然れども二派相對するに當りては、其性質甚しく相距れる者は却て相敵する事なきも、相近くして少しく異なる者に至りては相競ふの勢を呈す、闍伊那は佛教と同じく婆羅門に反對すれども、彼に對するは却て冷淡にして、相近しくして而も差異ある二者は相争ふ事を免れざりき、故に佛の生時にありても既に二派は相敵視するの傾向を呈し、互に外道異論を以て目し、佛の生時佛教の教團に仇せしは多く此徒なりき。

佛教の哲學的見解は數論派よりも一步を進めて萬法無我を主張せり、然れども闍伊那の立脚地は殆ど數論の物心對立論の外に出でず、有生。Jivaと無生。Ajivaは相混すべからざる根本的對立にして、有生なる精神は現世界にありては無生なる物質的關係に繫縛せられて惡の生を營む繫縛精神。Baddhātmanたり、故に吾人の最上理想をする所は一切の道德を修し、苦行禁欲に依りて吾人の精神。Ātmanを物質より解脱せしめ、之を解脱精神。Muktātmanとなし、一切智に依りて常滿精神。Nitya-siddhaとなすにあり、此に於て闍伊那は佛教に反して酷烈なる禁欲苦行を勵行し同じき不殺の禁に於ても極端に之を行ふ、其極に至りては、後世の闍伊那は生物を

慈むか爲に養蟲院を立て、人間を以て蟲を養ふに至れり。

我を常住と計し、苦行を勵行するの二點に於て、闍伊那は佛教と相容るべからず、是に於て闍伊那の徒は佛教を空見とし、特に其實行的方法に於ては、佛者の甚しく苦行せざるを見て疎懶安逸なる快樂主義となせり。

闍伊那は佛教を罵倒せり、然れども佛教の盛大なる到底之に敵すべくもあらず、小なる者は頻に大なる者に向て罵詈を放てども、大なる者は之を放任せり、此故に二者が併て發達する間に互に相影響せし事少なからざるべく、特に闍伊那は大に佛教の感化を受け、終には自ら之に同化せんとし、常に其下風に立ちつつ發達し來れり。

開祖若提子。Jñatiputra 又 Nātaputra の運動は佛に先て、既に毘舍利邊に多くの信隨者を得ぬ、其教團は一萬四千の沙門と三萬六千の比丘尼を有したりと傳ふ。彼には十一人の最勝弟子ありしが、其二人のみ彼の死後に生存して彼の運動を續けたり、其後此派も徐々として其教勢を進めし者の如く、開祖を去る二百年、旃多羅笈多王の頃、北方摩揭陀にある信徒と南方なるカルナータ地方の教徒との間に異議

白衣派と
空衣派と

佛敎の感
化

耆那敎と
印度敎と

を生じ、北方の教徒は白衣を着し、南方は敎祖の敎に従て裸體なるべきを主張したり、此に於て闍伊那の中に白衣派 Gvāmbāra と空衣派 Digāmbāra の二派を生じ、二者各其經典を編輯するに至れり。

耆那教徒にして白衣を着する者あるに至りしは、既に佛敎の感化を受けたる徴證にして、此より以後其影響は益進み來り、耆那敎の敎理傳説は着々として佛敎の影響を傳へ、後世をして二者の相似たるに驚かしむる者あるに至れり、耆那婆陁摩那が一生に關する傳説は殆ど佛傳と異なるなし、耆那教徒は佛敎が佛陁と其弟子を尊崇崇拜すると同じく、耆那并に其高弟等 Ganadhara を崇拜し、佛の遺物聖地を崇拜すると同じく耆那の聖地を崇拜せり。

而して其が過去二十四耆那を數へたるは、佛敎の過去佛に似て其名同じきもあり、耆那敎には佛敎の三寶に相當して正信 Samyagdharma 正知 Samyagjñāna 正行 Sa-myakcaritra を三寶とせり、闍伊那の五戒は佛敎の五戒に同じ、耆那敎は佛敎と同じき材料を以て異なる組形細工をなせし者といふべし。

此の如くにして耆那敎は一方にては佛敎と親近しぬ、されど他の一方にては彼は印

耆那敎經
典の成立

耆那敎の
膨脹

度敎に近き者あり、其根本敎理の我を主張し苦行を奨勵するは云ふに及ばず、婆羅門敎の諸神をも拒まず、後には其女神崇拜を容れて、自派の女神シヤーサナデヴや āsanadevi 即命令女神を拜せり、而も佛敎も後世には此と同様の感化を婆羅門敎に受くるに至りぬ。

紀元前三世紀の頃に耆伊闍の分裂せし時は、既に彼等が佛敎の影響を受けし時にして、此より以後彼等の發達は此成形に従て敎理并に傳説を整理し、而も其が耆那に關する信仰は自派に無始より存するを證明するにありき、此に於て紀元前一世紀に當りて二部が全く分派として獨立するに至りし後は、二派及其傳統を經典に編成したり、蓋し半摩揭陁語 Ardhamaḡadhī に成れる最初の結集は此頃より少しく後、紀元の前後に成りし者なり。

今此に便宜の爲、第五期以後に於ける耆那敎の歴史を叙せんに、彼敎は漸次膨脹し、五世紀の頃には印度半島の南に達し、七世紀玄奘の旅行せし時には、彼等は處々に存在し、特に南方地方には五世紀の末より六世紀の始に至る頃、摩訶刺陁 Mahārās-ṭhara の王たりし補羅稽舍 Pulakeśa 等の保護に蒙々として生長し、最も弘く行は

れたり、此に於て南方に於ける彼等の主要なる用語は一轉して南方の方語タミール及カナル語となり、此語に成れる讚詩 Stotra を出だしぬ。
北方の耆那教は恒河の平原より西北グジャラト地方に及び、五世紀の半頃白衣派は其經典をグジャラトのワラビに結集しぬ。

第十一節 瑜伽派

佛敎興起
後婆羅門
の活動

婆羅門族の活氣既に衰へ、加之耆那佛陀一派の洗滌的打撃を以てす、婆羅門は其宗教の外形を保存したる外其内界思想の運動は殆ど活潑なる生命を失し、千有餘年の間は哲學的考察に於ては微々たる蠢動をなせしのみ、雄大にして精緻、総合的にして論理的なる思想を組織するが如きは、此時代の婆羅門の能くする所にあらず、他人の慣行に従て荒唐なる儀禮を營むか、若くは疎懶の空想に耽りて苟且の安心をなすか、彼等の運動は失神者の囁語、麻痺患者の顫動に過ぎざりき。

此時代の産物として、冥想恍惚に依りて最上神に合一せんとする瑜伽 Yoga 派を出しぬ、瑜伽派は紀元前二世紀東印度ゴナルダに生れし婆羅門の語學者波騰閣梨

波騰閣梨
の開宗

Patañjali の開く所なり、彼は曾て波尼爾の文典に大註釋を下だして其才學の異常なるを示せり、然れども彼が思想は冥想に依りて最上神と合一するの外、何等の內容なく、彼は此合一即瑜伽を遂げん爲には種々雜多の方法を設けたり。

的・瑜
伽の日

波騰閣梨の著書瑜伽經 Yoga-Sutra は其瑜伽即觀行冥合を説明し、冥想の何たるより其方法及其結果として得らるべき不思議力と解脱冥合とを説きたり。

人の心は戯想、睡眠、追憶に擾亂せられ、現量、比量、五戒に動かさる、此を以て此動搖を防止し、心を不變安穩ならしむる爲には、常に之を練習し、情慾を壓抑すれば、終に心を一處に止住して最上神と合一すべし、是れ即一切の心の動搖と身體の繫縛及生死を離れたる状態にして、此に依りて不思議力を得、最上實在に到達すべし、最上實在とは瑜伽の行に依りて一切知を得たる状態に外ならず、唵の一音は之を代表せりとす。

法・瑜
伽の行

瑜伽の行法に入階あり。
一に耐持 Yama にて情慾を制し五惡を避く。

二に勤勞 Niyama にて宗教の正行を修し、自ら淨うし、自ら満足し、自ら身を苦め、神

に祈願し、神を冥想す。

三に、容止。Asanaにて身體の態度を正しくす、其法、蓮華坐、師子坐、鷄坐、拜坐等の坐法あり、其他手腕膝の位置各定規あり、又咒印。Mudraを行ふ。

四に、壓息。Prāṇāyāmaにては呼吸を壓抑するに種々の方法を用ふ。

五に、禁忌。Pratyahāraにて一切身體の官能を拘束し、外感なからしむ。

六に、内察。Dhāraṇaにて心意を内面考察に止住す。

七に、禪定。Dhyānaには深く冥想す。

八に、三昧。Samādhiに依りて終に自在力を得、身體を意の欲するが儘にすべし。

此の如き八徳を修すれば、不思議力。Siddhiを得、一切を洞見し、自ら身を隠し、或は遠隔地の事を知り、或は精靈と語り、或は空中水底を行くべしと、瑜伽の行者は實に差別界を脱するを目的としながら、差別界の自由を得て、放恣の行をなさんと欲する者なり、是れ大なる自家撞着にあらずや、彼等は此目的の爲にはあらゆる奇行をなせり。

然れども、瑜伽の最大目的は此不思議力自身にあらずして、此力に依りて精神を身

シツテ
識地不思
識力

一切智境

體より離脱し、一切智境。Kaivalyaに入りて一切の業果と三徳の羈絆とを脱するにあり。

瑜伽は其行法に種々の空想を弄したる外、哲學思想として何等の内容なし、其空想の根底は數論派の二元論に立ち、瑜伽の法を構想したるものなり、瑜伽は之を身體に譬ふれば、全身貧血の患者にして、身體の一部に腫瘍を生じたるが如き者なり、瑜伽に萌芽を發したる此種の腫瘍は如何に發生増大し、外部より多くの毒分を入れて、壞爛四出救ふべからざるを致し、終に大國手商羯羅の切開切斷的手術を要するに至りしが、是れ第五期歴史の題目なりとす。

第五章 宗教混沌時代

第一節 概見

佛敎後の
婆羅門敎の
刷振

第三期に當りて印度の社會が婆羅門的に固成して社會上并に宗教上に壞頽の兆を示すや、諸の異流其中外に呼應して起り、其最大なる者は佛敎の新敎法となり、其敎法は威力鴻大の阿育王に繼承せられてより印度國內の大勢力となりぬ、此時に當りては腐敗鬱蒸の婆羅門も外部の勢力に刺激せられて其面目氣風を刷新し來らんとし、特に阿育王は政權を以て婆羅門の專横と苦行犠牲の習慣を打撃せしより、婆羅門の徒は激烈なる外科的手術に依りて其腫瘡を洗滌したるが如く、新なる活氣を得て徐々其新勢力を養ひたり。

婆羅門は其種姓の特權を脱して敎法に瘳盡せんとし、民間には敎法の興味勃興し來るあり、之に加ふるに阿育王の寛容包括に敎法を奨勵するあり、印度古來の土人に行はれし宗教的慣習も、其間に頭を擡げて優に一方の勢力たらんとするあり、印度の西北には亞細亞中部より蠻族の侵入し來るあり、彼等は其信仰宗教を輸入し

外來の勢
力諸宗教の
混沌

佛敎と結合し、有形の征服と共に其心靈界無形の勢力を印度國民の上に與へぬ。婆羅門は新に興らんとし、佛敎は膨然一派の勢力を作り、二者は相對峙して將に其輸贏を決せんとし、加之外來の勢力は雜然縱橫其間に闖入せり、凡そ敎法相對峙するや互に自己の主張を以て他を壓倒するを目的としながら、尙其爭鬪に利便を占めん爲には、不誠の間に各他の長所を容れて自家の弱點を補はんとして、其結果興敗の如何に係らず、自然に混和融合、何時の間にか新風調の思想信念を生むを常とす、佛敎と婆羅門敎とが對峙爭鬪の間に既に融通混合の方向に向はんとする此時に當りて、外來諸種の勢力材料の其間に闖入するあり、彼等が一興一廢相接し相離るるの間に、自ら思想信仰習慣を交通して、紛々擾々風怒り雲湧き彪雜混沌の狀を呈せり、此形勢は滔々幾百年の永きに亘りて印度の信念界を支配し、漸次婆羅門的勢力の増進に終り、紀元後八世紀の頃には殆ど大勢の歸する所を定め、佛敎は名目上印度國外に去り、小少の分子は婆羅門敎の中に吸収せられて、新に婆羅門敎の勝利を宣言して印度敎なる者を確立せり。

此七八百年の間は鬱蒸紛糾の時代にして吾人は之を稱して混沌時代と稱す。

第二節 婆羅門族の新企圖、民間信仰の勃興

一八二

婆羅門哲學第二期の始に起り、婆羅門の宗教全國の教權を支配したる紀元前七六世紀の間にありても、婆羅門の勢力は實は婆羅門族の間のみ横行せしも、下層の一般人民に至りては全く之に化せられしにわらず、婆羅門も種姓上の偏見よりして亦必しも盡く彼等を攝し收めんとせず、原始土人以來の信仰習慣は少しも其潜勢力を失はず、其生活力を一般下層人民の間に蓄へたり、吠陀時代にありても此等の勢は悪魔の信仰、咒咀、祭祀の儀禮の中に其痕跡を示せり、婆羅門教の隆盛は一時彼等を壓倒埋没せしの際あるも、而も摩拏の法典が處々此等世俗の觀念習慣に對して非難を加ふるより見るも、彼等の滔々として人民の間に行はれしを見るべし、正教の教權は如何に盛なるも、民間の俗説俗信の決して衰へざるは宗教史上の通態なり。

土人間の信仰も生存したれば、アイリヤ民族中の俗説も必や此と結合して發達せしなるべく、婆羅門の僧族的教法に對して、昆侖、首陀の俗信は、隱然印度の人心を支配せしなり、然れども此等は民間の俗説として生存せしのみ、未だ宗教信仰の定形

を備へて信念界の表面に出でしにはあざりしなり、而して今や彼等の頭を擡へべき時は來れり。

婆羅門教の佛教と相對するや、其が最も弱點とする所は一般人民を感化するの力に於て對手に劣るの一事にあり、佛教は世外教なりき、而も一般の俗人を拒まず、佛教は無神教なりき、而も開祖佛の人格は教徒の間に不思議の魔力を有したり、特に佛の滅後より墳墓、尊像、遺物崇拜の風出で、殿堂の儀禮、偶像の崇拜興るに及びては、其具象有形の崇拜は佛の人格的感化を一層有効ならしめ、本來は世外的なる佛教は衆民教化の上に少からざる利を占めたり、且つ佛教の悲哀觀に生み出されし慈悲同情の教は其教徒をして慈善博愛の事業に瘁盡せしめ、僧侶は多く醫藥の事に通じて萬民を利したり、此等の風は阿育王に依りて一層隆盛に赴き、佛教は其大勢力と結合せしよりして前に倍して民衆を化導誘化するの利器を得たりしなり。

此を以て婆羅門の佛教に對するや、第一に此點に於て努力し、從來の尊大傲慢の風を棄てて一般人民に接近し、從來の理論的なる教法を措きて通俗卑近の教を説か

英雄崇拜

ざるべからず、而して此新企圖に就きて彼等は民間の俗説と連衡するの利あるを
発見したり。

其一は民間の英雄崇拜に接近したるにあり、印度人の印度に入り來りしに當りて
は種々の事蹟を歴たり、此事蹟は傳説として民間に存し、一種の武勇譚となりて弘
く行はれたり、即イテハーサ *Ithasa* と稱せられし者にして、少くとも紀元前九百年
の頃に既に人民の間に行はれたり、メガステネーヌの時に此崇拜あるを記せり、
此武勇譚の民間に行はるるや、婆羅門の宗教の無味に慊焉たる民衆の間には一種
の英雄崇拜を生じ、特に其勇者たるラーマ及キリシナを崇拜せしに似たり、他の人
民を睥睨し刹帝利の武勇の如き之を蔑視し、民間の崇拜は之を冷笑せし婆羅門教
も、一は其教運を回復するの必要と、一は刷新せられたる包括的精神とに依りて此
等の習慣にも留意するに至れり、此に於てラーマ、キリシナの崇拜は漸く婆羅門教
の教系の中に一個の地置を占めんとするに至れり、婆羅門族の中に此等の武勇
譚を編集大成する者出てしは、如何に彼等の此に注意し來りしかを見るべし、即此
等の武勇譚は漸次編成せられ、遅くも紀元前後の頃には儼然たる二大叙事詩マ

溼婆の崇
拜

ハいらタ *Mahā-bhārata* とマラーヤナ *Rāmāyana* とを成したり、是れ即彼等が民間
の信仰を婆羅門化せんとするの端なりき、此に依て見るも婆羅門の徒は民間の習
慣を自己教系の中に陶冶せんとし始めしは遅くも阿育王の頃にあるを知るべし。
叙事詩の大成は尙未だ宗教の本分に於ける變革といふ能はされども、婆羅門は此
と同時に民間の崇拜を容れ之を吠陀の神位に同化せんとしたり、此企圖は即後世
印度教の源泉となりし者にして、最も著しき變革といはざるべからず。

印度アリアの土人と接してより、彼等の純潔なる天然神話の宗教は漸次惡魔幽
鬼の信仰を容れ、終には土人の間に崇拜せらるる最高神なる溼婆 *Śiva* の信仰に近
き始めたり、溼婆は蓋し元スンダレシワラ *Sundarēvara* と稱し土人の畏怖崇敬し
たる鬼神の最大なる者にして、暴威怖るべく森嚴近き難く、威烈狎れ難き神なりし
が如し、婆羅門の信念が此風調に近づき其思想が此趣味を帯び來りしは何れの時
にあるや確定し難しと雖も、或は之を太古の優波尼沙土時代に溯る人すらあり、蓋
し優波尼沙土の思想が幽玄森大の風を有し、彼の深林の中にのみ誦すべしとせら
れたる阿蘭若迦 *Araṇyaka* が深遠凄涼の調を帯びしが如き、固より氣候風土の人

毘溼拏の
崇拜

化現説の
萌芽

心に及ぼす變化に因すべきも、亦此溼婆の崇拜に似たる傾向に一步を進めしは争ふべからず、其後と雖も一般人民の間には威嚴怖るべき溼婆の人格的崇拜は漸次鞏固に赴き、婆羅門の方面にありても苦行隱遁沈鬱の傾向を長ずるに至りしより、二者は益其趣味風調を接近しつつありしなり、而して今や婆羅門は愈具象的人格的崇拜の必要を感せしより、斷乎として此崇拜を明に其教法中に認めたり、特に吠陀神話中の樓陀羅は暴風威力の神なりしかば、婆羅門は此二者を同定して溼婆の崇拜を容るるに十分の根據を附着するを得しなり、而して此威神宏大の人格的神位を容れし事は婆羅門の對佛教策に於て最も成功したる一なり。

既に暴威の神を容るれば之と共に溫和親むべき對を求めて心情を満足せしめざるべからず、即吠陀に於て日光の溫和化育の方面を表したる毘溼拏は自然に此需要を充たすを得て、兩者は相對して婆羅門教の中に位置を占むるに至れり。

此二神の崇拜は共に人格的崇拜の必要より婆羅門中に位置を占むるに至りしかば、他の一方に同じ必要より婆羅門教に入り來りし英雄崇拜とは共同交通なかるべからず、是れ即此より後に此等英雄を此諸神の化現とするの説出でし所以にし

三種現體
説の萌芽

て、其端緒は此の如く既に紀元前一二世紀の頃に發生したり。

一方に於て暴威と溫容の二神相對して存すれば、優波尼沙土の非二元主義に養成せられたる人心は、二神を統一するの必要を感じ、即梵を以て最高の神、二神の本體として觀せしは自然の勢なり、即是れ三種現體の説の出でし源にして、佛教徒信仰の歸依としたる三寶は其範となりしに似たり、是れ亦婆羅門の佛教に對する企圖の一なりき、三種現體と化身説の確立せしは此より二三百年の後にあるべきも、其端緒は早く此に萌せしは疑ふべからず、此の如くにして民間の俗説崇拜を容れて變化しつつある婆羅門は、又進で民間に行はれし庶物崇拜の風に染み始めし者の如く、彼等は其最上神を梵天として、其下の二神と共に人格的崇拜を營み、又叙事詩に於て英雄の人格的崇拜に近きしと同時に、動物、植物、岩石、惡鬼の崇拜をも容れ、其根本たる萬有神教の中に庶物崇拜を容れたり、此等に就きては後節に詳説せん。

第三節 迦膩色迦王の佛教と馬鳴

第五章 宗教混濁時代 迦膩色迦王の佛教と馬鳴

中央亞細亞なる遊牧の民族は屢印度に入らんとし、又印度に入りては、大なる痕跡を残しぬ、今や彼等の有力鞏固なる一部は又印度に入り來りて、此紛擾の間に投して其宗教史の活劇に加はりぬ。

紀元前百二十六年に塞種の月氏族即後に親貨羅スキュタスと呼ばれる一群北より來りて、バクトリアに國したる希臘人の王國を轉覆し、進て印度のパンジブ地方に迫りぬ、其王ハヴシカHavishkaはカフルに入り、進て迦濕彌羅を占領し、益南進して其領地北は葱嶺より南デツカンに迫り、東は恒河の上流摩突羅に及びたり、王は此度に精舍を建築せり、其子フシカHushkaも亦佛を信し寺院を建立せり、然れども此二人は亦火教の崇拜をもなせしといふ。

迦濕彌羅王の即位

フシカの子は即迦賦色迦Kanishkaにして紀元後十年の頃其父祖の國を嗣ぎ深く佛法を信す。

佛教中の異論と上座部

此時に當て佛法は既に幾多の派に分裂し、議論部執盛にして論争の風益長ず、迦濕彌羅北方には正統上座の一切有部あり、南方摩揭陀には大衆の派盛にして正統派は之を以て外道となせり、立世阿毘達磨論は宇宙論を論究し、法救Dharmatrataの

迦濕彌羅王の結集及佛敎保護

集。無。常。品。提。婆。設。摩。 Devagartman の阿毘達磨識身足論世友 Vasumitra の衆事分阿毘達磨論阿毘達磨界身足論阿毘達磨品類足論等は各其所見に依りて解脱戒律に關して、佛の遺法を宣揚せんと勉めたり、佛敎の宗義論此よりして盛なり、論義の風盛にして所執各異なり、正統派たる者此間にありて之が統一に盡力せざるべからず、恰も善し威權赫灼の迦賦色迦大王は心を佛法に寄せて信念厚し、上座は即彼に説きて阿育大王の事業に倣ひ、佛典の大結集を起さしめ、欽命に依りて佛敎の宗義を一定せしめんとしたり、王は結集の業を起すに中印度なる佛敎の故國第二結集の遺跡に於て之を行はんと欲したり、然れども中印度の地は大衆の勢力盛なりしかば、迦濕彌羅の上座は此地に於て結集の業を擧ぐるの不利を知り、且政治上に於ても中印度と迦賦色迦とは親和の關係なきより、終に北方の國都ジャールランダラLandharaを以て此場とし、上座諸大徳を召集し五百の大阿羅漢を會す、脅尊者Pariva及世友之が頭領たり、此會は其目的専ら宗義を統一するにありしを以て、經文を注釋し、戒律の條文を解釋し、而して阿毘達磨に就て博く所説を綜合審査せり、即其結果は鄔波第鑠 Upadeśa 毘奈耶 毘婆娑 Vinaya-vidhāshā 及阿毘達磨 毘婆娑 Abhidhar-

ma-vibhāṣā 各十萬頌の梵文を制定したり、阿育王結集以後に發達組織せられし佛教上座の正統宗義は實に此に依りて完全に編成せられしなり、特に其論藏大毘婆娑に至りては佛滅後漸次成立したる對法論議を集成し、宇宙論より解脫修行一切の教義に關する論議に決定を與へたり、北方佛教の文學は後世年月と共に非常の豊富に達したりと雖も、其最初の編成は此結集にあり、其が梵語にて記錄せられしより此語は即北方佛教の聖語となり、迦膩色迦王の威勢は西北の所謂西域より支那に及びしを以て、佛教と梵語は此に依りて此地方に及びたり。

迦膩色迦の弘大なる王國は佛教を國教として、其教權は國王保護の下に繁榮したり、此に於て佛僧有爲の士の此國に來り投ずる者多く、中には俊秀の人を出せり、即馬鳴の如きは其隨一なりとす。

馬鳴の傳記

傳ふる所に據れば馬鳴は元中印度に生る、始は佛教を信せず、摩揭陀にあり、夙に令名を博す、後脇尊者の弟子富那夜奢 Purnayaga に化せられて佛徒となり、北の方迦膩色迦沿下に來る、其始の名はカーラ Kala にして、馬鳴即阿濕縛婁沙 Agvaghoshā

馬鳴の思想

等の名は其異名なり、馬鳴月氏國に來り、其卓犖の才能く教團の間に尊重せられ大毘婆娑の結集にも與りしなるべし、或は馬鳴の北方に來りしは此結集事業の爲なりと稱すれども、此は俄に信すべからず。

眞如と生滅

馬鳴元俊才なり、又中印度異部紛々の間に長し、夙に思辨に長せり、其北方に來て月氏國の佛教に投ずるも、豈永く無爲にして、説一切有部宗義の中に没し了らんや、彼は有部哲學の上に一步を進めて、世の實相と其迷妄の打破とを論ずるに止らず、一切差別相を超えて湛然不動絶對不滅の實體即絶對の心あり、是れ一切の本性にして又即如來の法身なりと論じ、之を眞如 Tathata と名けたり、眞如は一切言説を絶し、一切の妄念を離れ、有無の相を超え平等にして變異あるなし、然れども無明の妄念は平等を差別と見、此に生滅の世界を現す、妄念差別を現して業果を積み、諸の境界を作り出だし、此に依りて一切の染法苦繋あり。

眞如と生滅とは此の如く淨と染の相を異にすと雖も、其體異なるにあらず、恰も水の風に依りて波を生ずるが如く、無明は平等を差別して現象界を呈すと雖も、無明滅すれば差別なし、知るべし、一切の境一切の法は皆心より生し、心と體を同しうす

る妄念より生ずるなるを。

衆生の虚妄と佛の覺とは根本の別あるにあらす、此境を脱して彼界に入るは只妄念の一障壁を除くのみ、此修養は先づ妄見の即染相苦界の因たるを觀し、依て以て惡念を止め、善根を増長し、而して一切衆生を濟化せんと發願するあるのみ、菩薩既に此行を修し、此願を發せば、即眞如の眞體即如來の法身を觀取し、從て又專心佛を念し、衷心佛に歸敬するに至らん、既に佛を念して此境に到達すれば、一切現象恍惚として夢消し、我執を離れ、妄見を脱し、一切處一切時に於て衆善隨うて増長せん、而して如來亦勝方便を以て之か信心を攝護し、永く惡道を離れしめん。

馬鳴の佛教大體此の如し、佛教の教理は漸次發達して此に至り、馬鳴は此が發達の一里塚を表しぬ、即彼が宗教の大本は、佛隨の說法と同じく世の無常を無明に歸するにあり、然れども馬鳴が無明論は既に純乎たる形而上論に入り、先には單に行者の理想境として何等の屬性を明にせざりし涅槃の境は、馬鳴にありては即萬象萬法の本體にして、湛然圓滿の眞如として不可言不可説といふ中にも、究竟の實體にして自ら無漏性の功徳を具足すと計せらるるに至れり、此に於て原始佛教にては

單に人々妄念の根底たりし無明も亦形而上的意義を有して、道德宗教的動機の外、宇宙論的に現象世界の因となりぬ。

佛隨の本性に就きても、馬鳴は一時出現の佛隨は其實眞如なる如來法身。Dharma-kāyaの應現に過ぎずとし、之を凡夫二乗の鈍智に應じて出現する應身。Nirmāṇa-kāyaの名稱、又諸聖者菩薩が各其果報に應じて觀する所の佛隨を報身。Sambhoga-kāyaとし、此に佛三身。Tri-kāyaの説を立てたり、應身及報身は多少虚妄の念に支配せらるる靈心か見る所の眞如の側面なり、若し全く妄念を脱し靈心を離れて絶對の境に入れば、即法身を觀、眞如本性に到達したる者なり。

馬鳴は其純粹理論的の形而上論たる眞如と實際宗教的の佛隨尊崇とを、一宗教的關係の兩方面として合一調和したり、而して此の理論的に又實行的に發達したる宗教的意識は染相凡夫の方面に於ける信心と、淨相如來の方面に於ける攝護とを明にし來り、又之を同一宗教的機能の中に認め、信心は即攝護となり、攝護即信心となるの妙契を發揮したり、而して此關係妙契の基本は、馬鳴之を心眞如、心生滅の本性、元非異不二なるに置きたり、彼は哲學思想に於ても宗教的意識に於ても著しき

卓見を提出したる者といはざるべからず、起信論一部は此卓見の叙述なりとす。然れども馬鳴は何れの關係にても原始佛教と後來の大乗佛教との中間に立てる者なるを忘るべからず、原始佛教が何等の言説をもなさざりし涅槃を真如として説きしも、未だ之に就きて祕密的空想を運らすに至らず、原始佛教の佛隨の人格を崇拜せしより進みて、理智の本性、法身の如來を信念するに至りしも、尙未だ無量光無量壽等莊嚴の屬性ある阿彌隨如來を拜するに至らず、原始佛教が單に自己の知と行とに依りて涅槃に到達せんとしたる冷淡なる宗教的關係より進みて、凡夫如來の間に信心攝護の關係を唱道したるも、未だ他力若くは祕密加持を唱へて疎懶なる念佛に陥るに至らず。

馬鳴の著書亦此中間の地位を示し、其大莊嚴經論は宛然原始佛教の阿含と體裁を同じくし、其起信論は當時阿毘達磨の風に成る、而して彼が作なる佛所行讚 *Buddha-carita-kāvya* にては、雄渾の調、莊麗の詞は甚深の感動信念と相助けて、佛隨の一生を歌ひ、昔の簡單なる佛隨生譚 *Jataka* より進みて後世幾多の構想的佛傳普照經、本行集經等の先驅をなしたり。

馬鳴は佛教原始以來四百年の發達を荷て之を一轉進化したり、後世の大乗佛徒が彼を大乘の祖となすも理なきにわらず、然れども馬鳴の所謂大乘即摩訶衍 *Mahāvāna* は小乘 *Hinayana* に對するの大乗にあらずして、只偉大なる教法の義なりしなり、故に馬鳴は又之を大法と稱せり、後世の佛徒が馬鳴を稱して龍樹門下の提婆に就きて學びたりといへるが如き、如何に其の彼を後世の所謂大乘なる者に牽強せんとせしかを見るべし。

迦膩色迦は佛教傳道に新方面を開き、馬鳴は其教義に於て同しく新方面を開き、所謂北方の佛教は源を此に開きて中央亞細亞より支那蒙古を風靡し、終に絶東の日本に及び、此間所謂西域と謂せらるる月支、安息、康居、龜茲等の佛僧が布教翻譯に盡力し、又彼等譯經僧が傳へし佛教が如何に支那日本にて發達せしか、今此に叙せず。

第四節 三種現體說、化現說の發達、印度教

英雄崇拜と民間崇拜の輸入は婆羅門教に一新面目を開けり、民間の崇拜を婆羅門

教の教系中に輸入して之を古聖典の教權に適合せんとしたる結果、梵天、溼婆、毘溼
 拏の三神を相併べて之を貴重するに至りしは既に述べしが如し、其後北方の佛教
 は獨立の旗幟を明にし、中央印度にありては諸派漸次相影響相變化して、新婆羅門
 教の宗義漸く確立するに及びては、此三種の神が、各其機能を異にして而も其本體
 を一にする事は、儼然固定したる宗義となり、此三神が元一の本體より三種の顯現
 をなすことは、三種現體 *Trimurti* と稱せらるるに至れり、是れ固より人格的多神崇
 拜の成果にして、婆羅門教の既に宇宙の主義を最上の神なる梵天に歸せしに一步
 を進めて、其能造、破壊、維持の機能を、歴史上の事情よりして人格的に崇拜せした
 めなり、而して彼等は此三種の機能を總稱して開發維持破壞 *Srshiti-sthiti-laya* の稱
 號を用ひ、或は開發を *A* にて表し、維持を *U* にて破壊を *M* にて表し、此三音を合した
 る *Om* なる一音は能く此三種現體を表し得べしと信じたり、或は又之を表
 するに *Trikona* を用ひしもあり、蓋し三種現體の思想は印度にありて古來
 其例なきにわらず、既に吠陀の時代には、地上の神なる火、阿姑尼、空中風雨の神なる
 因陀羅、樓陀羅、天上の神なる太陽蘇利耶、三神を特に崇拜したるが如き、又優波尼沙

三種現體
 の人格的
 特立

土時代にて萬物の性能を喜愛團の三徳にて説明したるが如き皆是なり、然れども
 新婆羅門教の特徴とすべきは其が人格の觀念にあり、三神は元一主義の發表なり、
 然れども三者は各其人格的區別に於て相混すべからざる者あり、梵天と毘溼拏と
 溼婆とは各特立したる神となり、其間に何等從屬上下の別なき者として相對す、之
 を崇拜する者も各其の専ら崇拜する所を定めて他を顧みざるが如き、如何に三者
 の人格が其崇敬に重要なるかを知るべし、此を以て此より後は賢者出でて典籍の
 述作をなすにも、此三神の何れかを主として、其神格を中心として、考察崇拜をなし
 たり、三神の神格に就きて其機能と其人格の概念明晰となるに従ひ、始は三者を同
 一の如くに見たる三一の觀念も漸く變じ來り、三神格の別は益確立せり、*Śukra*、*Varuṇa*、*Indra*
Indra (十卷八九) なる典籍が三神の別を明にせんが爲に、一聖人が三神に見えし記事
 を撰造せしが如きは其最も明なる者にして、即後世に此等の神の何れかを拜する
 に依りて、相合すべからざる分派を生じ、各派各其神の像を祭るに至りし所以も此
 にあり、此分派に就きては次章の題目として詳述せん。

三種現體の教理發達して其三個の神格各其性能を確定するに及では、三者に關す

三種現體
 神に關する

る神話も、古代の神話歴史の事情を基とし、之に加ふるに新しき宗教的意識の想像を以て漸次構成せられ成熟するに至れり。

梵天は古よりして最上の神なり、其宇宙創造に關する神話は古より既に構成せられしを以て、新婆羅門教は特に之に就きて新に神話を構成するの要なかりき、其他の二神が特に人格的崇拜の對象となり、又民間の英雄人格崇拜と關聯多きは既に之を記せし如し、此を以て二神に就きては種々の神話と之に關聯する諸種の崇拜とを生じたり、然れども其溼婆に關する者は多く其配偶たる女神に關する神話にして、女神に關しては第六期の歴史に記述するを便とするが故に茲に詳述せず、只特に此に記すべきは毘溼拏の神話と英雄崇拜との連結なりとす。

毘溼拏は宇宙の維持者、世界秩序の監視なり、故に其性質は自ら平温慈愛ならざるべからず、慈愛の神に對しては其崇拜者は自然に之に親近し易く、之に親近するに従て其神は益人界に近き來らざるべからず、此に於て最も人類的にして崇拜の對象となりしキリシナ、ラーマ等の英雄神は自ら此毘溼拏と密着し來れり、キリシナは元惡鬼を亡ぼすが爲に生れたる神にして、其が牧者少女との戀愛に關する傳説

毘溼拏に關する神話と英雄崇拜

毘溼拏の信仰

の如きは最も人情に振觸すべき者として弘く傳はりき、ラーマも亦猛獸惡魔を亡ぼせし最も感謝すべき英雄神にして、多くの功名譚は之に附加して一般人民にも尊崇せられたり、此の如き人情に近き神が、人類世界の恩人たる毘溼拏と關聯せしは其因由賭易き者あり、而して此關係は終に此二英雄を以て其實神體にして、毘溼拏が一時人の形にて此世に現はれし者となすに至れり、即化現。Avataraの信仰是なり。

神が人と化現するといふ信仰出でしは實に人格的崇拜の益人心に固結し來りし結果にして、彼等は神を人格的に崇拜するに止らずして、其人的化現に於て其恩恵を謝し、其威徳を崇拜せしなり、此の如く人格的崇拜の終に化現の信仰となりしは全く佛教の影響なり、佛の滅後佛隨の人格に就きて高遠の思想を生み出だし、佛隨は永遠なる真理の顯現なりとの觀念が佛教徒の中に存せしは、明に婆羅門教に於ける化現説の範として其摸する所となりぬ。

毘溼拏の化現は其數一二にあらず、後世には種々の空想に依りて或は魚獅子等にも化現したりといひ、其數も九種、十種、二十二種等を唱ふれども、其最も原始にして

又最緊要なるはラーマとキリシナとの英雄に化現せし事なり、此化現の人格的崇拜が如何に印度の宗教に人情深き分子を加へたるやは最も注意すべき事實にして後に之を詳述せん。

其他の神話

化現の觀念は元叙事詩の英雄と毘溼拏との間に發生せしが、此觀念は又時として他の神にも適用せられ、一切の婆羅門は梵天の化現たるべき者となり、溼婆の如きも或時には**ウラハドラ Virabhadra**なる英雄として現はるる事ありといへり、化現の觀念は此の如く漸次其適用の範圍を擴張し傑出の人は固より、一般の人々も其善良信心なる限に於ては、婆羅門と同じく一種の神の化現なりといはざるべからず、又人間以外の萬物と雖も其が神的なる性能を有する限に於ては又一種の化現なりといはざるべからざるに至れり、而して古婆羅門の宗教も哲學も皆萬物の一梵天より流出せし説を取りしを以て、恰も化現の説と相投合し得たるは新婆羅門教にとりて特に便利なりき。

印度教の根本

三種現體と化現の宗義は新婆羅門教の大本を立てぬ、吾人は此新婆羅門教を呼て印度教と稱す、印度教が此の如く、他を包括して其教に新組織を漸成したるの結果

は又甚包括的の性質を生せしめ、諸種の崇拜習慣を自家教理の中に陶冶するに利あらしめたり、其蛇龍崇拜、庶物崇拜を容れ、又佛教をも吞併し得たるは此が爲なり。

第五節 印度教と其制度

婆羅門教根本の轉換

三種現體と化現の信仰は婆羅門教の根本を變化したり、根本既に變化し時勢社會の狀態も亦舊婆羅門の時と異なり、佛教の刺激は四姓の嚴制を打撃し、異民族の習慣は滔々として婆羅門族の中に入り來れり、印度教の基本は甚複雑なる者あり。

印度教の包括的性質

印度教は頗る包括的の宗教にして、諸の信仰が混化に成りし者なり、佛教が宇内の傳道の精神を鼓吹したると共に起りし印度教も亦、此精神を以て**ドラウダ、コラリア**、**釋迦**等諸の民族の信仰を包括したり、印度教は其始より今日に至る迄も普遍的信仰を宣布し、あらゆる事情に適應するを目的としたり、然れども鞏固なる國民的宗教婆羅門教より出でたる印度教は其根本の信仰既に普遍宗教の性質を帯びしも、尙其實際道徳に於ては民族的制度より脱する能はず、種姓の貴重なるは依然として舊の如く、只種姓の種類關係複雑に赴きしの別あるのみ、又印度教徒の儀式習

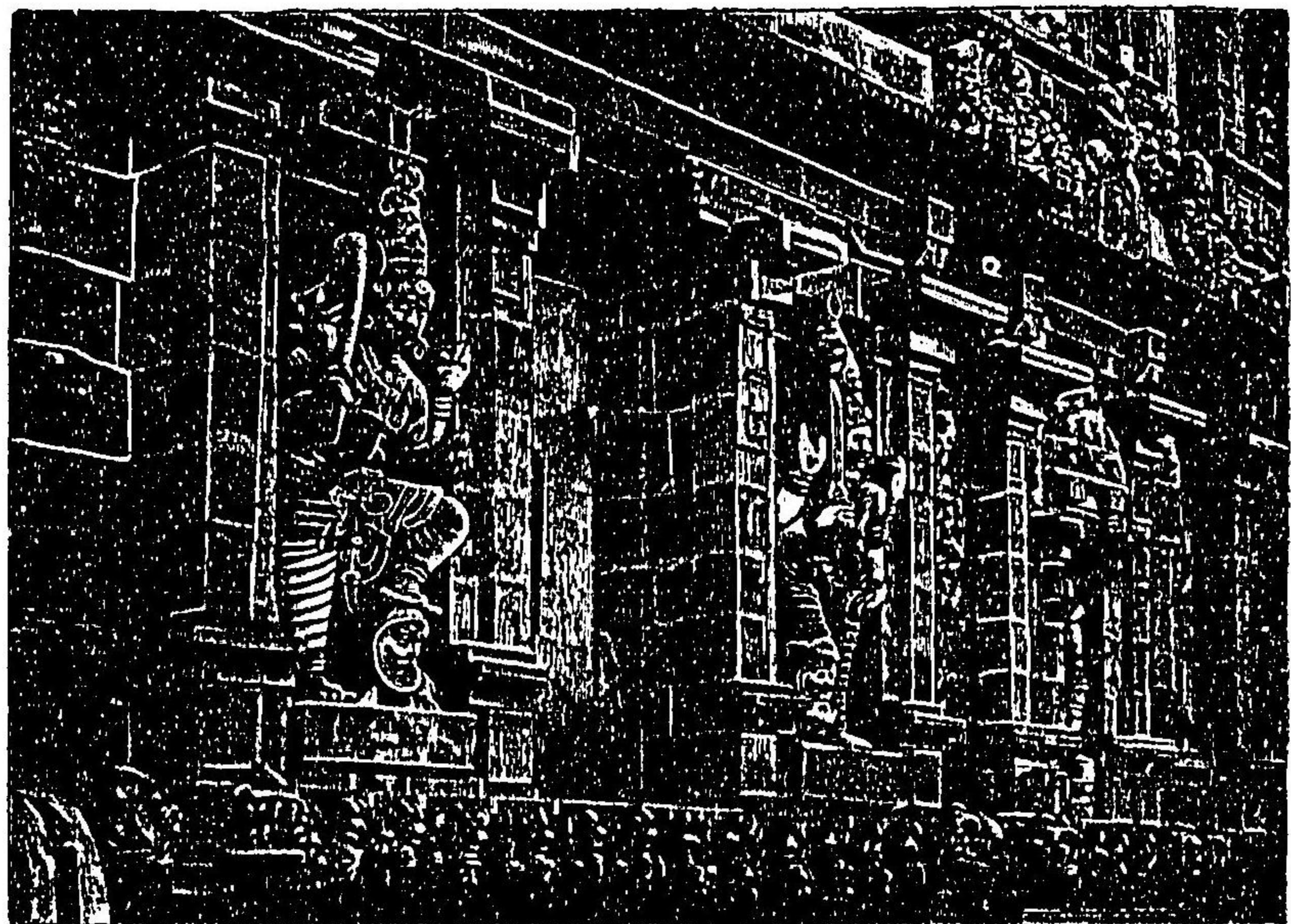
印度教の社會制度

印度教の法典

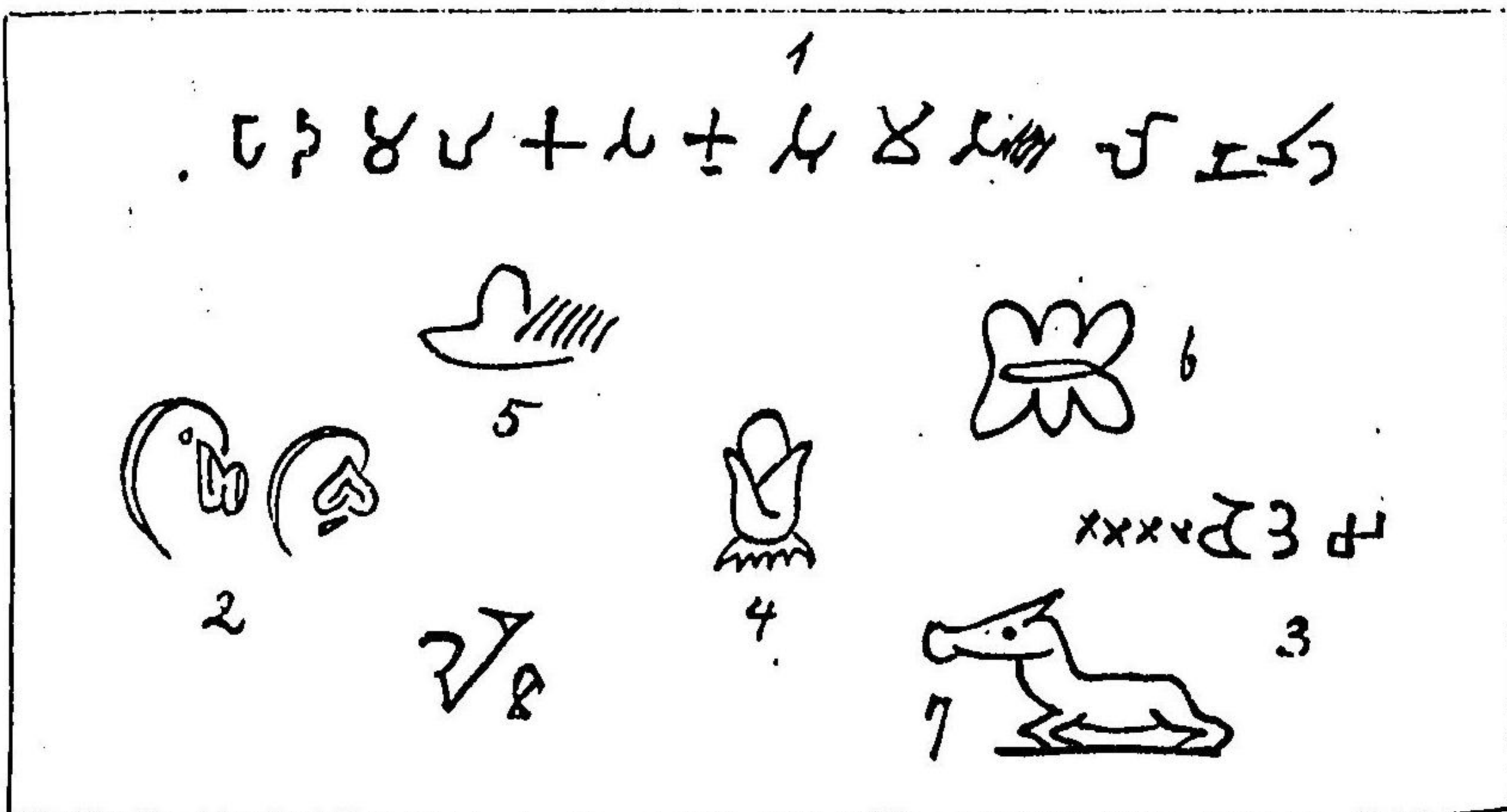
印度教の儀禮

慣を重んずるは此時より以後も少しも衰へず、却て瑣細の定則に依りて其祭祀方法より社會家庭の正行を規定したり、即古婆羅門教の制度習慣の規定が摩拏の法典に大成したると同じく、印度教の規定も亦諸種の法典に編成せられたり、此等法典の今日に存する者實に十六、然れども中に就き印度教の根底として始より成立し又最も貴重せられしはヤジニ、ワルキヤ Yajñavalkya の法典のみ、其他毘溼拏、サシクハ Saikhya 等亦此に次て肝要なり。

此等法典は印度教成立の精神に依りて立つ者にして、階級種姓 Jati を重んずる事は古に劣らず、婆羅門が首随と結婚するが如き同じく之を禁じたり、婆羅門族の數多きに從ひ彼等は盡く宗教上の職務のみに従事する能はず、多くは他の職業に従事するに至れり、此に於て諸の職業に就て其淨穢を定め、婆羅門の職業に従事するを禁せり、後世の陋習となりし寡婦習慣の如きも既に此時に規定せられ、或者は寡婦の夫に殉死すべきを説けり、然れども寡婦の再婚を許せるもあり、其外結婚葬祭より日々の行狀、儀式、祭日等の規定は漸次此等法典に規定せられて今日に至れり。宗教上の制度に就きても其根本の變化と共に新しき制度を制し、佛教の偶像殿堂



神階の壁外堂殿ルニジンドタ

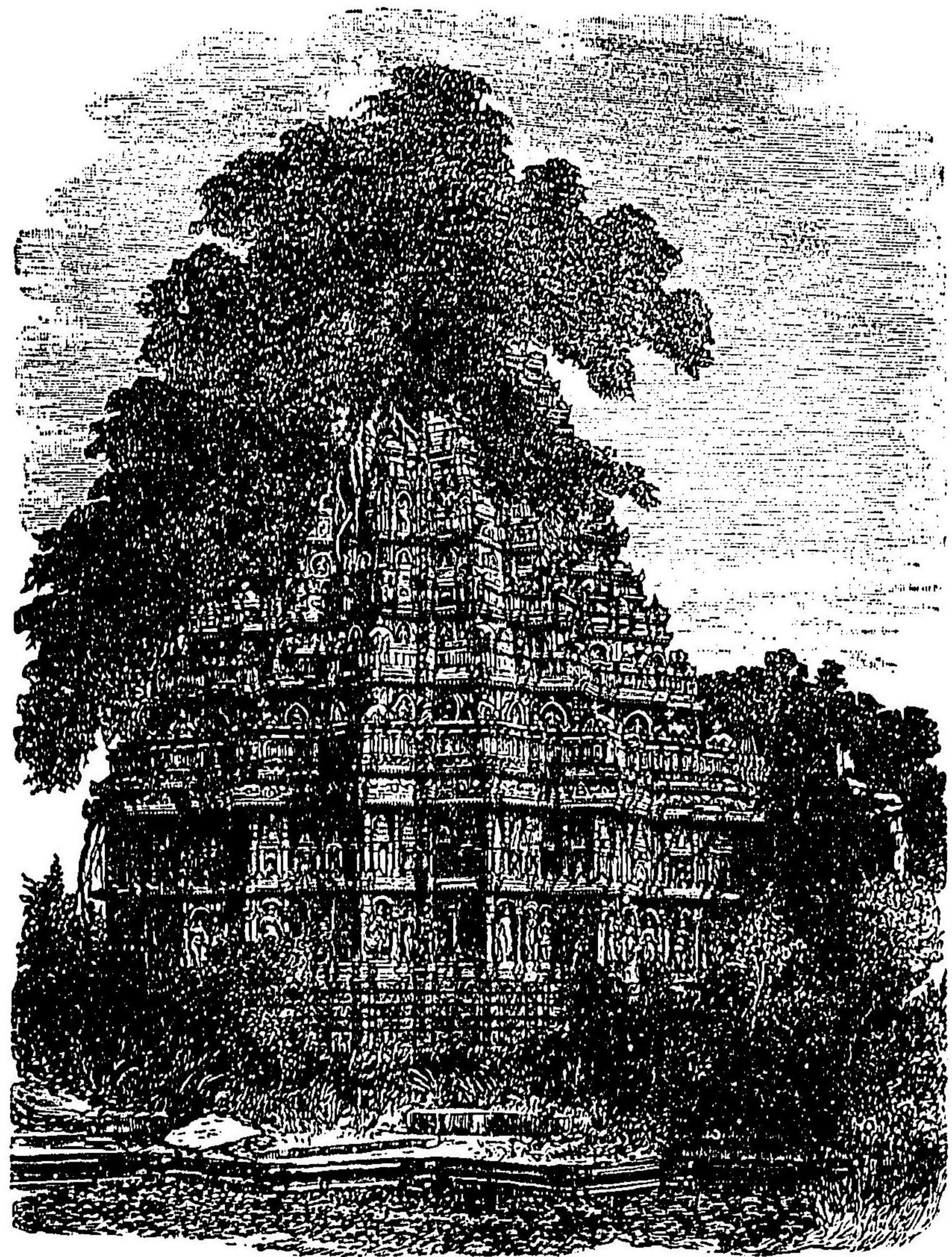


號符及文刻面壁殿佛リギカドカ

(1)

Padamuliksa kusumasa lenain

るせ坐附(5) 號符の隨佛(4) 字文の後以背向(3) 字文具(2)
 號符の隨苦女手十(7) 號符の隨苦男一(6) 號符の隨苦女一
 りな號符てしに字文の明不(8)



堂殿の式様シカツテ
(る記を婆溼作の紀世四十)

巡拜の風を受けて、偶像、殿堂の禮拜起り、聖地の巡禮起りてより僧侶の爲す所、信者の行ふ所も從來の無偶像の時代とは變化せざるべからず、一々の殿堂偶像に就きて各其神話を構成し、其靈驗を説き、一々の聖地に就きては其靈地たる因縁を説き之を巡拜するの功徳を唱道し、從來の簡單なる犠牲を營みし僧侶は莊嚴なる殿堂に叮嚀煩雜の儀式を營み、家庭の内に祭禮を行ひし信者は諸處聖地を巡回して、其殿堂に賽し、其偶像を拜せり、此に於て宗教の外面も亦全く豹變して、莊大の儀式には自然に奢侈豪華の風を生じ、建築彫刻より音樂繪畫等の勃興を來たせり、財寶を費して殿堂を起し僧侶を養ひ、遠隔の地に巡拜するは印度教徒の信仰を表する道となれり。

三種現體と化身とは印度教信仰の大本にして、階級社會習慣は其結合力の源泉、殿堂偶像等は其行爲儀禮の最大表徴なり、此三者相合して印度教をなす。

印度に於ける宗教上の美術は、蓋し佛教に於ける建築を始とし、希臘及バクトリアより彫刻を輸入して此に建築彫刻、偶像彫刻の勃興を來たし、此等裝飾の發達は又

建築の發達を促し、殿堂の莊麗は儀式に於ける音楽を發達しぬ、音楽舞樂の神なる乾闥婆、天女等の多く彫刻せられしは此時代の特徵なり、而して此等の宗教美術は各派各其特質を有し、佛教美術先づ起りて紀元前の頃より三四世紀の頃迄盛行はれ、印度教美術次て出て、闍伊那教美術起り、後世回教の入りてよりは又印度回教建築の美麗なる者を出だしぬ、此等の美術に就きては今一々之を細説せず、其大體は挿畫に於て之を見ることを得べし。

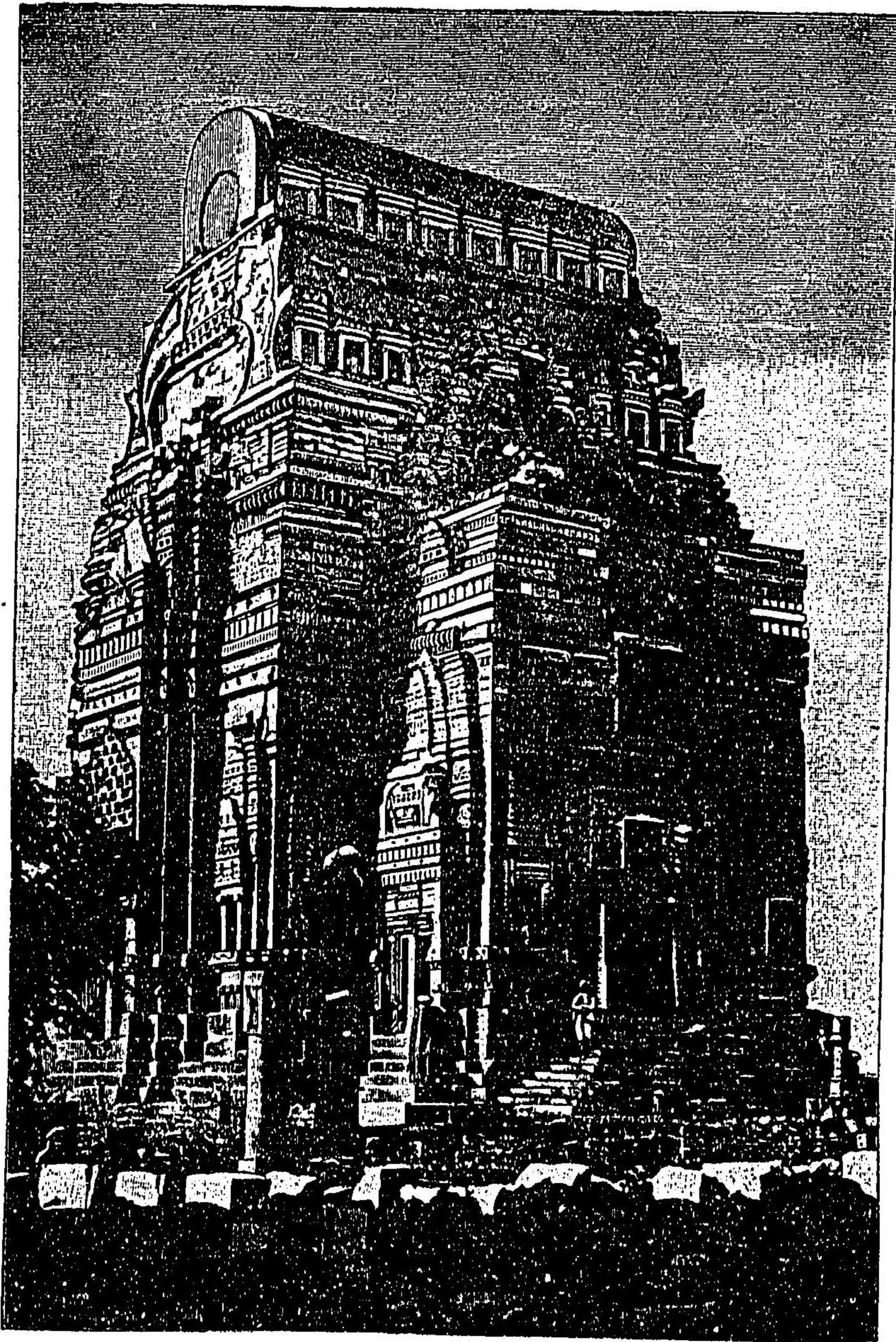
第六節 富蘭那文學、印度教の神話

印度教の教理并に神話は佛教後より漸次構成し來り、紀元後二三世紀の頃よりして富蘭那 Purāna と稱する文書に編成せられ、現時に至る迄數十の富蘭那を作り出せり、即是れ二大叙事詩の神話、印度教の法典其他傳説習慣の内容を總合大成したる者にして印度教の最重要なる聖典と稱すべし。

紀元後四世紀の辭典學者アマラシンハ Amara Simha は富蘭那の内容を五部に分ちて

富蘭那

富蘭那の内容分類



アケラ盛の佛の寺

建築の發達を促し、殿堂の莊麗は儀式に於ける音樂を發達しぬ、音樂舞樂の神なる乾闥婆、天女等の多く彫刻せられしは此時代の特徵なり、而して此等の宗教美術は各派各其特質を有し、佛教美術先づ起りて紀元前の頃より三四世紀の頃迄盛に行はれ、印度教美術次て出て、闍伊那教美術起り、後世回教の入りてよりは又印度回教建築の美麗なる者を出だしぬ、此等の美術に就きては今一々之を細説せず、其大體は挿畫に於て之を見ることを得べし。

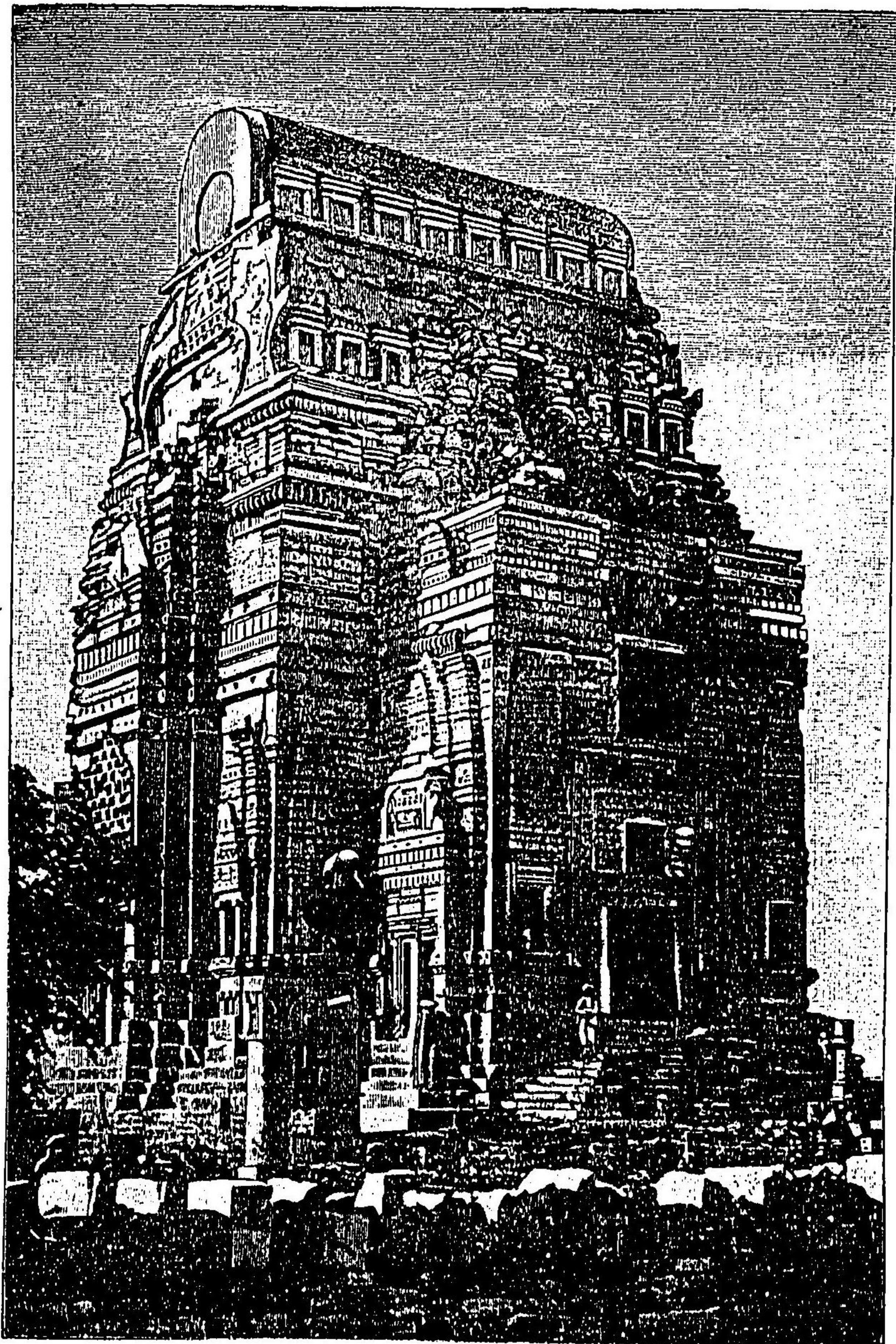
第六節 富蘭那文學、印度教の神話

印度教の教理并に神話は佛教後より漸次構成し來り、紀元後二三世紀の頃よりして富蘭那 Purāna と稱する文書に編成せられ、現時に至る迄數十の富蘭那を作り出せり、即是れ二大叙事詩の神話、印度教の法典其他傳説習慣の内容を總合大成したる者にして印度教の最重要なる聖典と稱すべし。

紀元後四世紀の辭典學者アマラシンハ Amara Simha は富蘭那の内容を五部に分ちて

富蘭那

富蘭那の内容分類



アケラカの佛の寺

一、世界創造即宇宙論 Sarga

二、世界の維持破壊并其年代 Prati-sarga

三、諸神教主の系統 Vainca

四、摩拏の歴史 Manvantara

五、日種月種族の歴史と其子孫 Vainçancartia

となせり、但現存の富蘭那は後世の改竄に遇ひし者なるを以て必しも此分類に合せず、富蘭那は其所記の神に就きて梵天に關する者、毘溼拏に關する者、溼婆に關する者の三類に分つべし、然れども彼等は其主とする所の外の神を顧みざるにあらず、梵天に屬する者にして毘溼拏の崇拜を奨勵せるもあり。

富蘭那は先づ世界の創造を以て生まれり、世界を創造せしは或は梵天なりとし、或は毘溼拏なる婆救天 Vasudeva か迷妄をして創造の業を執らしめたりといふ、梵天の世界を造るや其子七人をして教主たらしめ、人類此より繁殖し、世界は幾成壞を経たり。

世界は須迷廬 Sumeru の山を中心として、此世界即閻浮提波 Jamabu-dvipa には八

天上及地
下

世界成壞
の歴史

祭日聖地
等の縁起

山脈に隔てられたる九界。Varsha之を周り、其外に鹽の海あり、其外に世界あり、糖海あり、此の如く七陸七海相圍て全宇宙をなす。

此上には七層の天。Svargaありて層々相重なり、其最上はヴィクントハ Valkuntha天にして即毘溼拏の宮徳圓滿なる居住なり、地の下には七層の地下世界。Patalaあり、地下世界の下には二十一の地獄。Narakaあり。

此世界成立し人類生じてより諸の摩拏。出でて之を支配し、十四人の摩拏相次て出づる間に世界は一度成壞す、即是れ劫波。Kalpa成壞にして劫波の終には水火世界を破壞すといふ、今の劫波には既に七人の摩拏出でにき、而して此間人間の王には日種と月種の兩族ありて幾多の王相次て世を支配せり、富蘭那には一々此王の系統名稱を列舉せりと雖も、皆單に空想に過ぎずして史實上殆ど何等の益あるなし、要之富蘭那は其宇宙論に於て世界の創造より、其形態、治世を説かんが爲に或は古説を取り或は空想を補ひて冗長の説話記事を作り出だせしなり。

印度教が素朴の祭祀より進て莊大なる儀式禮拜の宗教となりしは既に之を説きぬ、既に儀式的となりしより、自然に祭祀禮拜の方法時日并に其詞章に定規を生み

附屬神話
の成立

少小諸神

禮拜祈禱各其所と神に従て一定の詞を用ふるに至りぬ、此を以て富蘭那には此等の祭日方法詞章を規定記載説明せる者あり、又聖地殿堂の神聖と其因縁を説けるあり、又其中の神話的説話は其殿堂の粧飾とされるも多し。

印度教の神話は叙事詩に發し富蘭那に成り、造化の三神に關する説話に其大本を建てたり、而して此大本の神話が印度アーリヤと其以外の民族の信仰俗説より複合して成りしと共に、主要神の外に幾多少小諸神を諸の源泉より輸入して、副産の神話を構成し少小諸神の世界を造り出だせり。

此少小諸神は元吠陀神話中の空中諸神より出でて、他民族の信仰俗説と結合して印度教主要神の下位に列するに至りし者なり、而して印度教の宇宙形態論が七層の天界、七層の下界を立てしより、此等諸神は各此上下の界に在住して其神力神通を示せり。

天上には無數の神あり、其身體は即粗身Sukshmaにして一定の形態を有し、或は人の形なるあり、或は禽獸の形なるあり、各其果報に従て天上の快樂と神通力を享受す、能く空中を歩行し、多腕多手を有し、其身體には影なく、彼等の眼は瞬せず、身體を装

帝釋天

飾せる花鬘天衣は華麗永く衰ふる事なし、或は又自在に其身體を變形して種々の機能を呈すべし。

此等諸神の最上に位する者は即因陀羅なり、彼は帝釋天 Cakradevendra 即至大天因陀羅として其妻インドラニー Indrani と共に最上天宮に住し、其天宮には柱楹珠玉を鏤め林樹七寶を連ねて光耀の中に居り、微好の聲樂、好美の食に飽き、幾萬の美女鬼神に圍繞せらる。緊那羅 Kinnara 乾闥婆 Gandharva 迦樓羅 Garuda の如きは即彼の天宮を莊嚴し、彼に従隨する神話的人格なり。

緊那羅

緊那羅は人身馬首にして能く歌ふ、天上の歌神なり、其女性を緊那羅女即キンナリ Kinnari と稱す。

乾闥婆

乾闥婆亦音樂の神にして天上の樂手なり、能く香を嗅ぎ、樂を奏し舞伎を演ず、其妻は即天女 Asuras にして其夫と共に美色美音天上の舞樂を助く。

迦樓羅

迦樓羅は半人半鳥の神にして常に因陀羅又は毘溼拏の使役に應じ諸處に飛行して其敵と闘ひ、特に能く龍を殺す、彼は又吹笛に長じて空中に樂を奏すといふ。

龍王等

下界には地獄あり、龍宮あり、惡鬼ハリ Bali 諸龍王 Nagaraja 龍女 Nagakanya 之に住

阿修羅

す、德又迦 Takshaka 和修吉 Vasuki セーシヤ Geshha の如きは龍王の大なる者なり、須彌山の下には無數の阿修羅 Asura あり、常に戰鬥を好み、時には帝釋天と闘ふ、阿修羅とは元吠陀時代にありては神をも稱する名稱なりしも、後世には漸次特別なる下界の生となり、善神と闘ふ惡鬼の類となり、此時代には此名を惡人を稱するにも用ひたり。

惡鬼

此外特に惡鬼として古より存するは夜叉 Yaksha 羅刹 Rakshasa 畢遮 Pishaca タイトヤス Daityas 等なり。

夜叉

夜叉は多くは人の形をなす、或場合には人に惡をなせども、神なるクベラ Kuberā の從者としては却て人の保護をなす、夜叉の女性を夜叉尼 Yakshani とす。

羅刹

羅刹は印度教に於て最も穢惡奸邪なる者なり、常に人と神を害せんとし、宗教の正行を妨害して信者に障礙をなし、特に意に従て種々の形をなし、林間墓地等に出沒して人を苦む、羅刹の最大なる者をラーヴァナ Ravana と稱す、元私慾を惡鬼と人格化せし者にして、永年苦行修練の結果不思議神通を得て人を害す、夜叉の中には其他種々の名稱を有する者あり、其或者は山頂の如く長脚にして其鼻屈み、邪惡の眼

を輝かし、大口を開きて人を食ふといふ。

ダイトヤスは即女神デチの子にして、タヌ Danu の子なるダイナブス Danavas 等と共に下界に在り、然れども羅刹の如き悪鬼にはあらず、一種の幽鬼なり、此外幽鬼の類には人より幽鬼となりし者あり、畢試遮、又餓鬼 Preta の如きは是なり。

富蘭那以後印度教の諸神并に鬼類に就きて特に記すべきは、彼等には各幾多の眷屬従者ありとの觀念にして、何れの神にも鬼にも、皆其家族從族あり、其數も多く其關係も甚複雑なり、此故に富蘭那の或者は諸神の數を數へて三千三百萬ありといへり。

此等の世界形態論并に神話は古來の信仰より變化發達して富蘭那に大成し、一方にては佛教の中に入り又後世の印度教に於て民間崇拜の大なる部分を占むるに至れり、其の佛教と共通となりし者は支那日本に來りて、現時日本民間信仰の一勢力をなせり。

ダイトヤス等

眷屬

富蘭那神話佛教に入

第七節 動植物崇拜、陰陽崇拜、庶物崇拜

婆羅門教豹變して印度教となり、其教理が俗間の信仰及佛教と化合して一變したると同じく、其習慣儀禮も亦之に従て變化し、チラン族の風に感染し、或は獨立に之を發達し、或は之を古婆羅門教の信念風習に聯關して成立せしめたり。

動物の尊重は古代にも其痕跡なきにあらず、阿他婆吠陀には既に犠牲用の牡牛を崇拜せしあり、婆羅門教法典には其が尊重する所の動物を殺すを禁じ、之を犯すは甚しき重罪なり、牛を清淨神聖とするは一般の觀念なりき、特に輪廻の信仰出でては動物も全く人と異なる者にあらずとして之に親近愛撫するの傾を生せり、然れども正式に之を崇拜するは佛教以後にあり、既に毘溼拏の化身には魚、龜、猪、獅子あり、キリシナには猿之に伴へり、マハーバラタ、富蘭那の或者は特に此事蹟を語りて其神聖なるを稱せり、神の動物となれるあり、動物が人語をなして聖教を説くあり、又神には各之に隨伴する動物ありとし、此の如くにして靈ある者として動物の崇拜は漸次其根底を養ひぬ。

印度教の動物崇拜が佛教に助成せられしは疑なく、佛教の説話には既に佛の前生

印度教に於けるチラン風

古來の動物崇拜

佛教に於ける動物

動物の乗物

か鹿、豚、獅子、鳥、赤目魚等種々の動物なりしを説き、又佛の母胎に降るや白象の形を以てせりとす。

佛教の方にては動物を崇拜するに至らざりしも、印度教は動物を神と同伴して、神の乗物。Vahana と稱せられ、溼婆と牡牛、毘溼拏と猿及鷲、梵天女と白鳥の如く、動物は神靈となり來れり、動物崇拜せられて、牛は教系上最重要の位置を占め、龍蛇は民間に洽く崇拜せらるるに至れり。

蓋し蛇に關しては吠陀時代に其痕跡なきにわらず、因陀羅の敵なる暗黒を表するに蛇を以てせり、然れども其が印度の觀念界に頭を出せしは北方民族侵入後にありと斷すべし、北方より印度に侵入せし民族の中には龍蛇 Nagas 若くは德叉迦を其族名とせる者あり、歴山大王の印度に入りし時には、龍なる德叉迦を名とせる都府タクシヤシーラあり、彼等は龍を其祖先となし之を崇拜せしなり、印度人は此等の間に行はるる宗教崇拜を概して龍蛇の崇拜と見做せし者の如し、此を以て大叙事詩の始にジャナメジヤヤ王は蛇を退けんが爲に大犠牲を行ひしを叙せり、始に此の如く憎惡を以て見し龍蛇も漸次民族の混淆又宗教上の混亂の爲に印度宗

龍蛇の崇拜

龍に關する神話

教の中に入り來り、叙事詩以後の富蘭那并に佛教及耆那教の中に龍蛇は宗教上の位置を占むるに至れり。

龍は半蛇半人の神話的人格と化し、海中の下界に住し、其都城ボガワチ Bhogavati は燦爛たる裝飾を有せりと傳ふ、其王セーシヤは宇宙を支撐し、又毘溼拏の從者には千頭の蛇即セーシヤあり、溼婆は五頭の龍にて表せられ、其崇拜も行はるるに至れり、印度教は此く龍蛇を崇拜し始めたれども、亦一方にては之を惡の方面より見て嫌惡せざりしにわらず、之に反して佛教は、多く龍と親近するの傾向あり、未闢地の北方に教化して先づ之に誘化せられしは龍なりしといひ、多くの經典には龍は佛法の守護者なり、龍蛇の崇拜と佛教とは假令其始よりにはわらざるべきも、某時より親密の關係を生せしや疑なく、或は之を釋迦族の民族關係より出でしとせず人もあり、佛の生るるや龍王來りて之に甘雨を注ぎ、後世龍樹が大乗の經典を得しは其の龍宮に保存せられし者なりきといひ、紀元後四世紀の築造に係るアムラワチの塔廟には佛と龍とを併び刻せり。

此の如くにして龍蛇の崇拜は印度并支那日本の宗教に重要なる部分を占むるに

至れり、印度の動物崇拜の大に侵入民族に影響せられて生長せしは蓋し疑ふべからざる事實ならん。

動物特に龍蛇崇拜に關聯して記すべきは植物の崇拜なり、蘇摩の如き植物の尊重せられしは既に吠陀時代にあり、然れども後世輪廻の信仰に依りて植物亦生あるを知り、加之幽鬼の信仰は植物を以て其棲居の如く觀せしめしより、植物に就きて種々の神話を作り出だし、植物は畏怖崇拜の對象となりぬ、毘溼拏の龜と化身して有せし十二寶の中には何物をも供給する神樹パーリジャータ *Parijata* あり、此木後に因陀羅の天に移植せられしといふ、ツラシ *Tulasi* は毘溼拏の妻ラクシミー（或はラーマの妻シター、或はキリシナの妻ルクミニ）なりといひ、畢波羅 *Pippala* 樹は梵天の住する處といひ、或は三種の現體が共に住する處とし、或は特にキリシナの住する處なりといふ、バドマ宮闌那にては世界の始に梵天蓮花の中より生じ、又ラクシミーの洋中より現はるるや蓮を手にせり、榕樹 *Vata* は溼婆の一形たる、迦羅の樹なり、佛教にては畢波羅を佛成道の樹即菩提樹 *Bodhi-druma* なりとして、非常に之を尊崇し、滅後には之を崇拜し、過去七佛か成道の菩提樹として諸種の樹



刻彫の内塔佛チンサ
拜崇の樹提菩
(作の紀世四)

木を諸處に定めて崇拜したり。

植物の神話崇拜は此の如くにして發生し、印度教佛教の中に根底を養ひ、今日にては多くの迷信の種となり、又其繪畫彫刻の材料となれり。

庶物崇拜の興起に力ありしは佛教なり、印度人の間に於ける此種の觀念は、元吠陀時代に其祭祀犠牲の器具を尊重するに發し、其後法典の中に輪迴轉生の信仰中に無生物を其中に數へしが如き、既に其教理の中に庶物に靈ありとなすの端を開き、此時代に雜種信仰が外部より輸入せられ内部に成熟するに及びて、諸種の物象を其中に靈ありとし、若くは神靈の表象として崇拜するに至りぬ、佛教の中にありては佛陀の滅後之を景慕して其遺物墳墓を崇拜し、或は又其偶像を崇拜し、又其教法の表象として經典法輪 Dharmacakra 三寶 Triratna 等を拜し、特に其遺物 Paribhoga 及遺骨即舍利 Carika の崇拜は表象として庶物崇拜の性質を帯び來りぬ、而して其間に民間信仰の入り來るあり、佛陀景慕に出でし者も其境界を擴げて雜種の崇拜となりぬ、紀元前二三世紀に佛教の佛歷生誕 Jataka に槌太鼓等の靈ある説

話の出でしが如きは其最も明なる者なり、蓋し此種庶物崇拜の觀念が教系中に位

男女根の崇拜



佛陀伽耶に於ける三寶象の彫刻
(右は法中、佛は中央、佛は左)

地を占めしは佛教は印度教に先ちし者の如く、轉法輪、七寶を神聖とするは一種の表象として遺物崇拜に關聯して起り、而して後に印度教の中に庶物崇拜を起せしに似たり。庶物崇拜の印度教中に最も明に現はれ來りしは、男女根の崇拜なり、其の何れを源とするや、今日は全く明ならず、吠陀の中には此習俗なく、又印度土人の間に存せしといふ説も今日にては破られたり、而して其は何れよりか輸入せられし者なるべしといふ、印度人の此習俗に感染して其習慣印度教系に入るや、マハーバラタ并に富蘭那は既に之が説明を施し、之を宇宙の破壊及再生の力を表すと

淫婆及
其妻の
崇拜

天然石
器の
崇拜

印度教の
庶物崇拜

し淫婆及其妻の表象となしたり、即男根は之を隣伽 Linga と稱し、女根を Ni Yoni と稱し、多くは石を以て之を作る、此陰陽の崇拜は破壊再生の力を表せしのみにして一種の庶物崇拜に過ぎず、之に關聯しては淫風を行はるる事なし、然れども男女根の崇拜は此よりして益行はれ、後世には此表號を奉祀する爲に大なる殿堂を作り甚しく之を尊重せり、其の佛教に入るや、表面には明ならざるも裏面に其風趣を帶ぶるに至れり、西藏佛教并に眞言の中には此風あり。

男女根の崇拜は人造の形狀のみにあらず、天然物の之に類する者をも拜す、河水の礫にして形狀の是等に似たる者は即此表象となり、ナルバダー河より出づる白石英は之を矢石憐伽 Vanalinga 又 Bana-Linga とて拜せり、此と同しくガンダキー河に多き鸚鵡石はシャーラグラマ Galgrama とて、昆溼拏又キシナの表象として拜せらる、其外巖石の拜せらるる物多く、延びて丘陵、沙丘、山嶽を拜し、小にしては書籍、器具は、其使用者各其日を定めて之を祭る事あり、是れ皆其機能の中に何物か靈の潜める者あるが如くに信するが故なり。

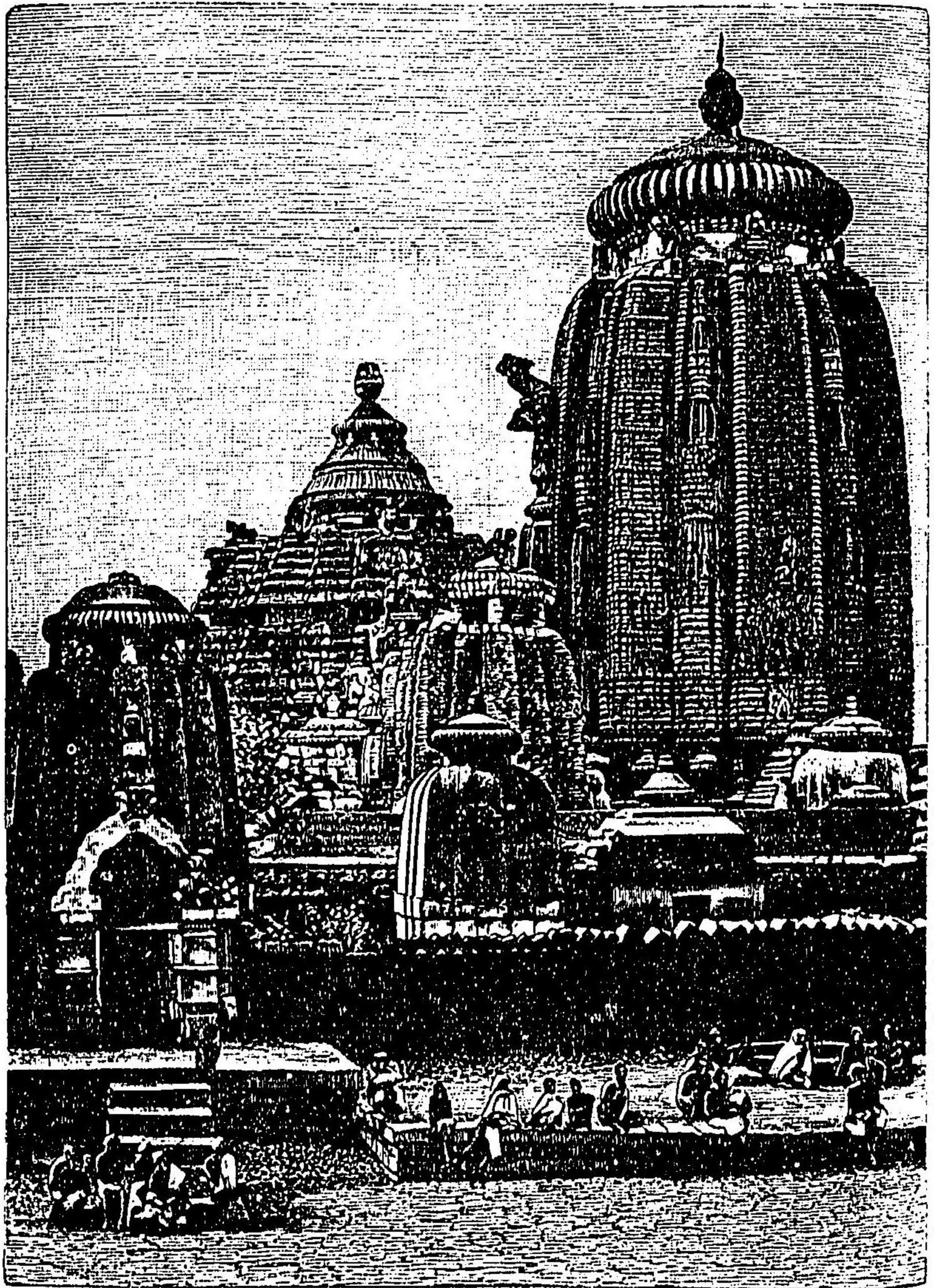
印度の庶物崇拜は純粹に其物を拜するにあらずして、中に存する靈を拜するなり、

而して婆羅門は之を教理上に説明するには其萬有神教を以てし萬有皆神なる限は其中の一々の物も亦神として拜すべしとなせり。

第八節 薄伽梵歌の折衷宗教

諸種の分子雜然相交り、彼是を攝せんとせば、此は彼を包まんとし、折衷混和の風は滔々として印度の宗教界を蔽ひぬ、此間に出でし者は其の印度教たるを佛敎なるを問はず、何れも諸種の信仰教理を包括混和せざる者なし、而して其折衷混和の最好標本として出でしは、薄伽梵歌 Bhagavadgita とす、此歌はマハーバラタの一曲として紀元後二三世紀の間に出でし者にして其作者の名は明ならず、只其人は毘溼拏派に屬せしも、弘く見地を多端に集めて當時の信仰を合一せんとせしは明なり。

薄伽梵歌の立脚地は古吠檀多の萬有神の哲學に立ち、瑜伽派の冥想に依り慈悲温和の神を信敬し、宗教の信仰と世の義務とを全うせんとするにあり、其思想に原造的なる者なしと雖も、其が諸の系統を混和して、尨然たる一大折衷をなせしは、當時



北印度度式殿の堂
(る祀をガシリ婆溼のラソシチゾア教度印)

優波尼沙
土的分

數論的分
子

瑜伽并に
印度教的
分子

折衷的學風の最莊大なる一部を代表せる者といふべし。

宇宙の本體は無屬性の絶對的實在梵なり、然れども彼が魔力は相對の現象を流出して物心の現象を形成しぬと、是れ即優波尼沙土の哲學思想なり。

此くして物心界の成立するや、物なる自性は二十三諦を開發して心を蔽ひ、心は此に繫縛せられ、自性中の三徳の支配を受け、諸の業因に依りて輪轉生死す、是れ數論派がなせし説明なり。

吾人は即此相對の境に繫縛着枷せられて其本質を忘れたり、之を解脱するには一に慈悲の神に合一を求めて之に歸敬するにあり、瑜伽是なり、然れども瑜伽を修するは單に其行法を修するのみにあらず、先づ無明を打破する爲には、眞理を認識し、宇宙の眞性を了知せざるべからず、是れ即諸哲學派の所謂知識的歸敬 *Jñāna-yoga* なり、然れども單に認識するは解脱の期成原因なりと雖も、之を實現すべき材料原因は之を諸の善行修法即作法的歸敬 *Karma-yoga* に求めざるべからず、而して薄伽梵歌が主張する所の作法歸敬の中には、瑜伽派のいふなる諸の方法を施し、外感を遮斷して心を恍惚境に馳するあり、即是れ心を神に合一せんとする者なり、此の如

くにして神に歸敬する者は又一定の方式を以て神を祭るを義務とし、又神意に従て一切の善を修し、特に階級の義務を履修すべし、薄伽梵歌の歸敬論は瑜伽と印度教とを合したる者なり。

信仰の觀

信者既に此二種の歸敬を修して滿幅の信念歸敬 Bhakti を以て神に事へんには、慈愛の神は又之に慈悲を垂れ、之が信心修法を攝護して憐愍と救済を彼等に與へん、吾人か先に馬鳴の佛教にて見たりし信心と攝護の觀念は、此歌にも頭を掲げて重要な位置を占むるを見る。

薄伽梵歌の効果

當時混亂時代に於ける折衷的思想風の代表として此に此歌の宗教を叙しぬ、元折衷は統合にあらず、混和宗教には活ける精神なし、此歌も亦大なる勢力を有せずして止みぬ、印度教の方面には此の如き折衷學風あり、而して佛教にも此頃に同様の傾向を示しぬ、即馬鳴の進歩したる佛教に嗣て、諸の異傾向を合せ異種の信仰慣行を包括したる佛教の新變化を起し、薄伽梵歌の作者より一層大なる者龍樹あり。

第九節 龍樹の大乗佛教

大乗佛教の勃興

北方の佛教にありては馬鳴が一切有部に一頭地を拔て、哲學的思想と宗教的の信念に歩を進むるあり、南方にありても大衆部、經量部の中に高遠の思想を出すあり、所謂大乗の佛教なる者は漸次形成し來り、一方舊守の佛教を小乗と稱して之と相對するに至れり、特に此時代於ける印度の思想界は混和紛亂鬱勃の氣象を呈し、所謂大乗佛教の如きも包括混融寇雜なる系統を發達しつつありしなり、蓋此間婆須跋陀羅 Vasubhadra 羅喉羅跋陀羅 Rahulabhadra 等の諸師は此大乘を形成するに與りて力多く、多くの大乘經論も漸次此間に出でしならん、而して此形勢の中に鬱生し來りし新方向の佛教は終に一大手腕に依りて彰然たる一大系統をなすに至りぬ、此人は即龍樹とす。

龍樹の出

龍樹即那伽阿周那 Nagarjuna は二世紀の頃西南印度に生れ、南印度及西北印度の諸方を歴遊して道を求め法を傳へし者の如し、龍樹の佛教は馬鳴の眞如生滅に一步を進め、勉めて生滅現象界に就きて有無の見を著持するを破するを以て起れり、中論、十二門論、大智度論は、龍樹が般若經の一切否定の主旨に據りて有無の見を破したる者にして認識論的詭辨の方法を以て一切の概念を破したり、即先づ佛教の

龍樹の無字山論

大本たる無常無我の見地に依り吾人が能作能動の本體あり常住不變の本性ありとの概念の自家撞着なるを明にし、此に一步を進めて在來佛教が世界を觀して苦となし、苦の源を釋ねて十二因縁を説き、五蘊の一切法を組成して、物に成壞あり業に因果の連續あるを説きしは、其實實有ならざる無明に生起せられし虛妄の世界に就きて幾何かの考察信仰を費したる者にして尙未だ有無の見を超脱せざる未透徹の思想なりと斷し、既に吾人は此等虛妄に就きて有無の見解を云々するの自家撞着なるを知らば、又四諦の教に執着し苦界繫縛を解脱して涅槃に到達せんとするも亦實有ならざる唇氣樓に就きて心を勞する者なり、若し一切法にして空ならば、若し一切作者取者の概念にして空ならば、若し一切本體本性の觀念にして虛妄ならば、何者か生じ何者か滅する者あらん、然らば何の斷すべき煩惱あり、何の滅すべき苦惱あらんや、然らば又何をか稱して生死といひ、何をか稱して解脱涅槃といはんや、現象世界の相對的物事は皆虛妄のみ、一切の差別認識は妄念のみ、然らば一切空 Sarvaśūnyatā ならざるべからず。

龍樹は此の如く一切を否定空了し、認識を妄念と斷じて、馬鳴の眞如生滅の對立を

一轉し、斷乎として無宇宙論の立脚地を占めたり、一切を否定空了したる結果は如何、不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不出、一切の差別認識妄念を超越したる畢竟空のみ、之を八不の中道といふ。

六波羅蜜
波羅蜜
般若波羅蜜

斷乎たる無宇宙論も亦虛妄の妄念を脱したる理想境を希求す、龍樹は此に於て菩提心離相論に於て、此理想たる菩提に入るには一切の相を離るるにあるを論じ、進て菩提資糧論に於て之が方法を明にせり、而して龍樹は此菩提の方法を一事に蔽ひ盡して、智度又智慧到彼岸なる般若波羅蜜 Prajñā-pāramitā と稱せり、凡そ彼岸に到らんには虚妄を破して眞實に據らざるべからず、而して佛教にて眞實に據るは即善なり、故に度脱到彼岸の方は一に善を修するにあり、龍樹は此修善即波羅蜜を數へて、施、戒、忍、進、定、智の六に歸し、而して之を總括し之が始終を一貫するは即智なる般若波羅蜜なりとせしなり。

施即施那波羅蜜 Dāna-pāramitā は我執我慾を棄てて一切の所有を棄に施與する者にして、即是れ我なる妄念を脱する第一着なり、既に施に依りて我執を脱せば、進て衆善を修し、諸惡を止めざるべからず、即是れ先に止得と譯し、今戒と稱したる尸羅

布施
持戒

忍辱

精進

禪定智慧

菩薩及願力

波羅蜜 Cila-paramita なり、尸羅を修して止惡得善の境に進めば、即心清涼にして惱熱あるなし、只其れ此止惡得善を永續持久して再び惡に陥るなからんには忍、耐、自克を要す、即是れ提波羅蜜 Kshanti-paramita なり、此の如くにして浮世の動亂を絶すれば、此より發心して菩提の道に勉強せざるべからず、即精進なる毘梨耶波羅蜜 Virya-paramita なり、精進勤勉して身口意の業を淨うし度脫の路に入らば、次に心を彼岸に遊ばしめて浮世を脱し心を彼岸に止住して常に虛妄を打破すべし、禪那 Dhyaana 三摩地 Samadhi 即禪定の二波羅蜜を修すべし、此の如き諸修善を一貫して之を履修せしむるは、即無明の虛妄を曉知せる智慧般若なりとす、般若波羅蜜は一切の善を増進する巧方便を具有せり、是れ龍樹か智を第一となせし所以なり。

此六波羅蜜を修して彼岸に到る者は即菩薩 Bodhisattva なり、菩薩既に菩提を得、願て衆生か虛妄に蝨々として惡邪の見網に陥り、愚癡の稠林に覆はるるを見れば、豈慈悲の情なきを得んや、自己既に菩提の樂果に入りて此慈悲の情を起せば、自ら大悲願を發して彼等を濟度し父の子に於けるが如き者あらん、此に於て菩薩は彼等を

念佛修善
慈悲攝護

十住地

救濟すべき十大願を起し、益之を擴張して無數の大願と七種の大力を以て功德を衆生に廻向し自由自在に衆生を濟度す、即是れ佛果にして、此等諸佛の大悲願力あるを以て衆生は波羅蜜を成就するを得、故に曰く、波羅蜜は菩薩仁者の母にして、善方便を父となし、慈悲を以て女となすと。

見るべし、衆生の度脫は彼等の波羅蜜にのみ成るにあらず、實に既到彼岸者の大悲悲の之を助くるあればなり、佛子の能く現世を超過して無等覺に到るを得るは、波羅蜜に相應するに大悲の攝護を以てするが故なり。

馬鳴に於て漠然と現はれたる如來攝護の概念は、龍樹に依りて明白なる規定を得て、大悲の願力となり、衆生が觀佛の信心は念佛三昧の歸命修善となりぬ、而して佛名に依りて十方諸佛の無量功德を念ずるは、如來の攝護を奉ずる所以の易行道なりと説きたり、後世淨土門の他力往生阿彌陀念佛の萌芽は此に存す、阿彌陀佛が大發願に關する神話の如き蓋し此と同種の産物ならん。

龍樹は一方にては無宇宙論哲學を提出し、一方にては六波羅蜜と願力慈悲の宗教を唱道し、而して又一方に於ては到彼岸の道と其境界とに就きて多くの細説をな

したり、即是れ十住毘婆娑論の題目にして、其所説の十地境界とは、歡喜離垢、爲明、災、難勝、現前、深遠、不動、善慧、法雲の諸地なり、此等の説明は、後來秘密佛教を胚胎し來りし原因なりとす、而して大智度論には既に密乘佛教の主要宗義なる文字の功德を列擧し、陀羅尼 Dhāraṇī が諸法に通達して無礙なるを説き、又此に依りて天耳、天眼の神通 Riddhi を得て、人の宿命と歳時の運行を知るべしといへり、蓋し前者文字陀羅尼に關する信仰は婆羅門文法學者特に波尼爾派の説を承け、後者宿命の觀念は婆羅門の天文占星に得し者ならん。

龍樹の學系も亦此の如く原始并に西北の佛教、印度教、吠檀多、文法學、占星術を混和し、之に當時の論理的にして往々詭辨的に走る思想の風を加へたる、危然たる一大塊なり、是れ其學系が種々に分派し、後に八宗の祖師と仰かれし所以なり。

龍樹の門下に迦那提婆 Kāna-Deva あり、隻眼眇なるを以て此名あり、始錫崙島より來りて龍樹に學び、特に論難の道に長じ、卓犖の資と不撓の意氣を以て四方に外道を難破したり、其甚しきに及びては當時小乘佛教其他外道の中堅たりし東印度の

市城十字街上に立ち、首を懸けて他と論辯したりといふ。提婆は専ら龍樹の中觀即無宇宙論を繼承し、此立脚地に據て盛に破邪の運動をなしたり、故に彼が名著述百論は有常觀を破し、我見を破し、時に過現未ありとの觀念を破し、主義見解に執着するを破し、衆分所成を一定の根境と觀し、依立の現象を一邊に執するを破し、殆ど破摧を以て其議論を立てたるの觀あり、然れども彼が無宇宙論の論理は一切の差別見を破せし者にして、彼自らも其弟子を誡めて、自己の見地なくして漫に他の失を談すべからずといへり、只彼が破邪の執情は抑へんとし、て抑へ難かりしなり。

我在爲燎邪宗火 注以如來正教酥

又扇因明廣大風 誰故如蛾投猛焰

而して此破邪の熱情は彼が衆生濟化の大悲に起りし者にして、大悲惠手を施きて衆生を苦と邪の淤泥に救ふは菩薩大丈夫の天職なりと信せしなり、彼は大丈夫論に於て此旨意を宣説し、又此大悲願は必や佛陀の知る所となりて之が攝護を得て大菩提を成すべしと信せしなり、實に是れ折衷的學風の滔々として宗教界を支配

せし時に當りて稀有の勇猛なる偉丈夫といはざるべからず。

那爛陀寺の形勢

所謂大乘佛教は此の如く西と南の印度に繁昌したりしが、此頃中印度の小乘佛教は漸次衰頹し、其中心たる那爛陀(Nalanda)の伽藍は三たび焼かれて多く其經典を失ひたり、然れども其中卓出の思想家なきにもあらず、中にも訶梨跋摩(Harivarman)の如き成實論を著はして、大に我法共に空なるを主張して北方一切有部の説を破したり。

第十節 無著の中觀及世親の瑜伽佛教

龍樹後の佛教

龍樹門下の佛教は其包括的の風趣と活潑の運動に依りて印度の中部に一時の勢力を占め得しも、印度教の勢力は優に佛教を壓倒し、那爛陀の精舎も焼かれ、經典多く散迭するの不幸に遇へり、而して佛教其物も益印度教と混合して神祕修行の方向に向ひき。

此四世紀の時に當りて深奥なる哲學的論議を以て佛教の光輝を中印度に放ちし

無著

無著の問題

者無著即阿僧伽(Asaṅga)あり、無著は龍樹が八不の中觀佛教に入り一切の見を破して、盛に著作を出だし、主として中印度阿踰繕國に止まりて其化を行へり。

無著は中觀(Madhyamika)の立脚地に立ちて一切諸相を否定せり、是れ龍樹の無宇宙論に同じ、然れども無著は一步を進めて此く否定したる虚妄の相は果して何に依りて此く虚妄非有の顯現をなすか、吾人は顯現の相に執着して有となすべからざるも、而も吾人は何が故に此顯現を認識差別するか、即無著の問題は無宇宙論的根底に立ちて認識論の研究に入りぬ。

無著の阿頼耶識説

無著は此問題を解釋するに、獨斷的に佛教通有の無明論に據り、特に馬鳴が真如より生滅を説明するに阿頼耶識(Ālaya-vijñāna)を以てしたる説を開發して、此分別認識は阿頼耶識中に藏する妄念、薰習に依て生ずとせり、此識は其薰習種子に依て差別の見を生じ、影像此に顯現して徧計顛倒の見解を生ず、此の如く阿頼耶の薰習に依て分別を生ずるは分別の根本にして、此分別の爲に徧計顛倒の見をなすが爲に、五感の差別的知覺を生じ、物に變異ありとして六趣生死の變を生じ、諸の執着徧見迷妄皆此に出づ、然らば吾人の差別認識は皆心に生じ、三界唯一心に依りて生ず、三

三界唯一心

界唯一心なり、三界諸相は妄見なりと雖も、元此唯一心を離れず、此唯識を本性とす、若し妄見を脱して其眞實本性を觀すれば、顯現も不顯現も、眞義も非眞義も其實二にわらず、異にわらず、現象は即實在なり、相盡離念の處に本體法身は存するも、諸相虚妄亦此自性法身を出でざるなり、此に於てか諸惡趣即菩提となり、生死は即涅槃なり。

無著の宗

龍樹が中觀の無宇宙論は無著が中觀の認識論に依て觀念實在論となりぬ、只無著の宗教に至りては龍樹と異なるなく、六波羅蜜を修し十地を經、而して一方にては佛の不思議大方便慈悲開導に歸禮して生死即涅槃の智境に達すべきを説きぬ、蓋し無著の長所は其認識論的形而上論にありて、之に就きて未だ特得の宗教的意識を開發せざりしなり、而して其の此の事業を繼承し觀心瑜伽の宗教を開きしを彼が弟世親となす。

世親の俱舍、唯識

世親即婆薮槃豆 Vasubandhu は元西北の一切有部に學びしも、之に満足せず、俱舍論を作りて自己が宇宙實相に關する見解を明にせり、後兄の無著に化せられて俱舍

成唯識論の遺稿

瑜伽の行

の實相論に一步を進め、中觀の立脚地に立ちて萬法唯心の説を主張し、唯識 Vidya-mātra の見地を明にせり、中邊論、成業論の如きは即兄の立脚地に於ける述作にして、成唯識論は其唯識の見地を述べたる者なり、然れども世親の思想は尙此に止らず、進て純粹なる唯心論に依て解脱の路を説き、所謂瑜伽師地の宗教を立てたり。

唯心論は外界を否定す、故に外界に着するは虚妄にして、外界を離れ唯一實在の心に還歸するは眞實の地位即解脱なり、此の如き立脚地は既に馬鳴に隱見し、彼が解脱は法身の佛を觀るにありとし、法身は即心眞如なりとして、觀佛と觀心とを一にするの第一着歩をなしたり、而して龍樹無著も此跡を追ひて念佛を以て佛の慈悲と相應せんとしたり、世親は即此結果を明白に露出し、瑜伽の觀行を以て解脱の道と斷ずるに至れり、其瑜伽とは波騰闍梨に於けると同じく、心を外界より離脱して裏面に潜め、終に唯一の本體と相應合一するにあり、世親の宗教は此に於て神秘的觀行の迷宮に入りぬ。

彼の兄が彌勒に聞きしといふ瑜伽師地論は即此觀行の宗教を説きたる者にして、瑜伽を修する者を瑜伽師 Yogācārya と稱し、其觀行の階段即瑜伽師地 Yogācārya-

瑜伽師の十七地

dhāmi)を十七として論せり、瑜伽の行を修するは先づ五識と身體を相應せしめ、次て五識を超え色身の束縛を離れて意のみを活動し、心中に探求し、直覺し、次に探求的活動を離れ、直覺を超越し、心を止住して靜慮恬澹の三昧地に入る、此の如くにして心中睡眠なく、煩悶なく、有心の境より無心の境に闖入す、此の如く無想無餘の果を得れば、耳に聞く所盡く解し、思慮する所盡く明々の慧を得て之を解し、修するに從て勝果盡く得べし、聞くに從て修證を得るは即聲聞地なり、思慮に從て盡く獨悟するは即獨覺地なり、修するに從て勝果を得、大覺を希求し有情を悲愍し、永く堅猛の修證を積み永く世間を出離して、大行に依て大果を得るは即菩薩地なり、此の如く輪伽を修して漸次高地に達し、有餘涅槃の地を棄てて無餘涅槃に入るべし。無餘涅槃は即絕對寂靜なり、然れども寂靜とは絶無にあらず、甚深廣大無量無數の徳を含有し、即色離色を斷すべからず、即想離想を説くべからざるの境なり、故に論には此境を形容して、爲恒、久住、舍宅、歸依、所趣、安穩、淡泊、善事、吉祥、無轉、無垢、難見、甘露、無憂、無沒、無熱、無病、無動等と稱せり。

無餘涅槃

中觀と瑜
伽の發達

龍樹の大乗佛教は無着と世親とに依りて、其認識論的哲學と冥想的宗教との異傾向を判別しぬ、一を中觀と稱し、一を瑜伽と稱すべし、大乗佛教の徒は此より各此二派を繼承し、一は論理と唯心論とに力を盡し、一は益印度教特に女神崇拜派に接近して眞言の秘密佛教を開發しぬ。

陳那等の
論理

護法の唯
識論

論理に於て貢獻する所ありしは世親の門人陳那 Dinnāga にして、因明正理門論を著はして、古尼夜耶の因明が五段に成りしを改めて宗因喻の三段のみになしたり、而して其認識論に於ては、外界の認識は非理にして識は唯内界の相を所縁となすと論じ、唯識の立脚地に立ちたり、其無相思塵論、掌中論等は此説明をなしたる者なり、陳那の門人商羯羅主 Śaṅkarabhaṅgī Cālikara-svāmin 亦因明に力を盡したり。此後護法 Dharmapala あり、専ら世親の唯識論に據りて成唯識論を作り、萬法が八識の作用に依て種々の顯現をなすの理と過程を説明したり、護法の唯識は世親と同じく萬法唯心を説くと雖も、其目的は此説に依りて萬有の説明をなすにあり、阿頼耶薰習の理に依りて業感の説きしを以て、之を一種の心理的宇宙論と稱すべし。

清辨等の
空論

護法と時を同うして其萬有説明に反對し、同じく因縁所生の法を認めながらも尙
之が非實有なる事を揚げし者清辨。Bhavaviveka あり掌珍論を著はして一切分別
の虛妄を論じ、空即眞性なりと論じたり、是れ即龍樹の破有論を祖述したる者なり、
清辨の門下に智光。Jhanaprabha あり、佛法を三級に分ち、一切有部の心境俱有論、唯
識の心有境空論より進て、般若の心境俱空論を以て最高とすと論じ、空論を主張し
たり。

戒賢の中
論

此と同時に七世紀に那爛陀寺の戒賢。Gīlāhadra あり、空有の中道を佛の眞意なり
とし、陳那及護法の唯識主義に依りたり、唐の玄奘は此人に就き、歸朝して其法相宗
を起したり。

龍智の秘
密佛教

一方に於て此の如く空有の論戰耐なるに當り、一方にては心を神秘幽玄の域に馳
せ、密乘佛教を成したる者龍智。Nāgahvāya あり、六七世紀の交に生存し龍樹の直弟
と稱し、遠く羅喉羅跋陀羅が阿彌陀如來の出現を信する神秘的大乘に據り、又龍樹
が秘密門を開發して一切を文字言語に歸する神秘的萬有神教を興せり、是れ即後
世の眞言。Mantra 佛教なり、蓋し此派の成るや、波尼爾派哲學に影響せられ、又當時開

眞言佛教

發しつゝありし女神及溼婆派の感化を受けし事の大なるは、多くの女神が現に尼
波羅佛教并に北部の眞言宗に存するにても明なり、龍智の門人たる南印度の婆羅
門。金剛智。Vajrabodhi は即此密教を支那に傳へたる始にして、其弟子不空。金剛。Ano-
ghavajra は吾邦の空海が師なり、眞言佛教は蓋し龍樹の頃より形成し來り、印度教
の混合に依りて漸次生長し、多くの印度教的習慣を容れ、又多く其神を拜し、自己の
内には毘盧遮那。Vairocana 即大日如來の崇
拜起り、彌勒。Maitreya 文殊師利。Mañjueri 金剛
手。Vajrapāni 等の神話的人格も漸次此間に出
で來りし者の如し。

法相、眞
智、中觀、眞
淨土、應
機、諸派の
宣布



念佛部北
佛部
用教佛
廻用
輪(ふ)

龍樹と無著世親の流派は印度の國內にては
中觀と瑜伽の二派に分れて漸次發達し、其中
觀の法相は玄奘に依りて、其瑜伽中の密乘は
金剛智に依りて支那に傳へられしが、其他に
ありては、世親の門人サンガターサ。Saṅghadeva

るは中觀を北方迦溼彌羅に傳へ、フダパーリタ Buddhapāṭita は同じく中觀に依り、有空の中を執り、阿頼耶を絶對として公開教には念佛に依る淨土。Sukhavatī 往生を教へ、内秘教には智慧涅槃を教へたり、之を應機教。Prasaṅga と稱し、主として西藏に傳はり、今も尙其教義の根本をなせり。

第十一節 中印度の文化

雜駁なる印度の中古は西及南印度に於て種々宗教上の變象を呈しぬ、而して中印度にありては四世紀の頃に一度燦然たる文化の明を放ちぬ、即阿踰繕。Ujjain 國王毘訖羅摩。Vikramāditya 即力日王が朝に於ける文化是なり。

此王は恰も無着世親と時を同じくし、諸宗教併立の間に立ちて偏頗なく之を保護し、特に文學語學の學者を保護して、其朝廷は宗教文學の輻合處となりぬ、其朝廷に出入したる傑出の文人九人あり、九寶。Navaratnāni と稱せらる、其中カーリターサ Kalidāsa は戯曲に於て印度の沙翁と稱せられ、アマラシンハ Amarasinha は字典に於て、其他天文文典等各傑出の人を養ひたり。

力日王

力日王朝の九寶

宗教に對しての力日王

諸教派の平和

新日王と無着

戒日力の法會

王は又宗教に於ても諸教の教師を保護したり、數論派の金七十論の著書なる自在。Īśvarakṛishna は王の朝廷に出入せり、此と同時に無着世親も此王の保護を受け、幾何かの寺院を建立せり、世親が俱舍論も亦此朝廷に講せし者なりといふ、蓋し此時代には佛教、印度教、耆那教共に相對立して互に仇敵視する事なく、王者貴族等は多くは此等諸教徒に對して偏頗なき待遇をなし、一般の風俗として人之を怪まざりしなり、此を以て恰も此時代に成りし南印度エルーラの岩窟殿堂の如きは、佛教と印度教と耆那教と同時に相併びて平和交際の跡を示せり。

後力日王死して、其子婆羅多。Baladitya 即新日王其母と共に無着に歸依して厚く之を保護す、王の妹の夫にして婆羅門なる婆修羅多。Vasurata 及毘婆娑の信奉者僧伽跋陀羅。Sāṅghabhadra 共に無著と論議を闘はし、王の朝廷には宗教上の論議盛行はれぬ。

力日王の後三世紀にして羯若鞠闍の國王尸羅阿秩多。Chalukya 即戒日王あり、大に諸宗教を厚遇し盛に法會を設けぬ、六百三十四年玄奘は恰も此國に來りて王の法會に參列して其實況を記載せり、王は諸國王二十餘を會し、佛教の沙門と婆羅門の

徒とを會し、恒河の畔に大伽藍と寶臺を建立し、仲春の月此處に大法會を營み、法會の間日毎に珍味を以て沙門婆羅門を饗應し、第二十一日に至り佛像を奉じて行宮より伽藍に至る、其時道を夾て盛に粧飾を施し、樂人聲を續けて路上に奏樂す、金佛は之を大象に載せて寶輿を帳り、王自ら帝釋の服を着し、寶蓋を執て其左に侍し、他の王は梵天王の粧をなし、白拂子を持して其右に侍し、五百の象群、鎧を被て之が周邊を衛る、此の如き行列は進むに従て音樂起り、眞珠雜寶金銀の花を散す、其西盛に着するや、佛像を之に安置して寶玉を以て之を飾れり。

蓋し王は佛像を奉ずる此の如くなるると共に、同様に婆羅門教の儀式を營みしなるべし。

佛教婆羅門教が共に其宗教の感化力を消磨し、其信者たる王者貴族は一般に儀式虚形を以て宗教の能事となし、信仰なく意志なく、只あらゆる神に奉事して福徳を積み、以て未來の樂果を希求せしの状態粗見るべきなり。

第十二節 佛教の消滅

佛教と印
度教との
接近

婆羅門教が印度教と變化したると同じく、佛教は宗祖の滅後漸次變化し、分派を生じて内部には瓦解に歩を進め、外には他と混交して殆ど別種の新宗教を作り出しぬ、他と混交變化するに従て佛教と印度教とは益相接近して其特長圭角を去り、當年の新鮮なる活氣は又益消滅し來れり、印度教特に毘溼拏派は既に佛教の方法を已に收めて通俗の教化を布き、又雜多の崇拜を起しぬ、佛教の或者は既に吠檀多の哲理を容れ、或者は既に瑜伽の行を修しぬ、寛容包括の風は一般に行はれぬ、先に述べたる戒日王の祭禮供養の如きは蓋し此風潮の好標本なり。

當時の寛
容的風潮

此王の時代に出でし佛教の戯曲龍の妙樂 Nagānanda は諸派親和の狀を寫し、佛教と印度教が相伴て而も争鬪の跡なきを示せり、而して一方にて同じく此時代に出でし印度教の戯曲寶珠の列 Ratnavali も龍の妙樂と共に戒日王の保護を受けしものなりと云はば、王が二教に對して偏頗なく、又二教徒も相鬪くことなかりしを想見すべきなり、蓋し此時代上流の人々は矛盾なしに同時に二教の信者たりしなるべし。

佛教の衰
勢

然れども佛教は漸次印度教に包容せられ、其活氣に於ても其形體に於ても衰勢を

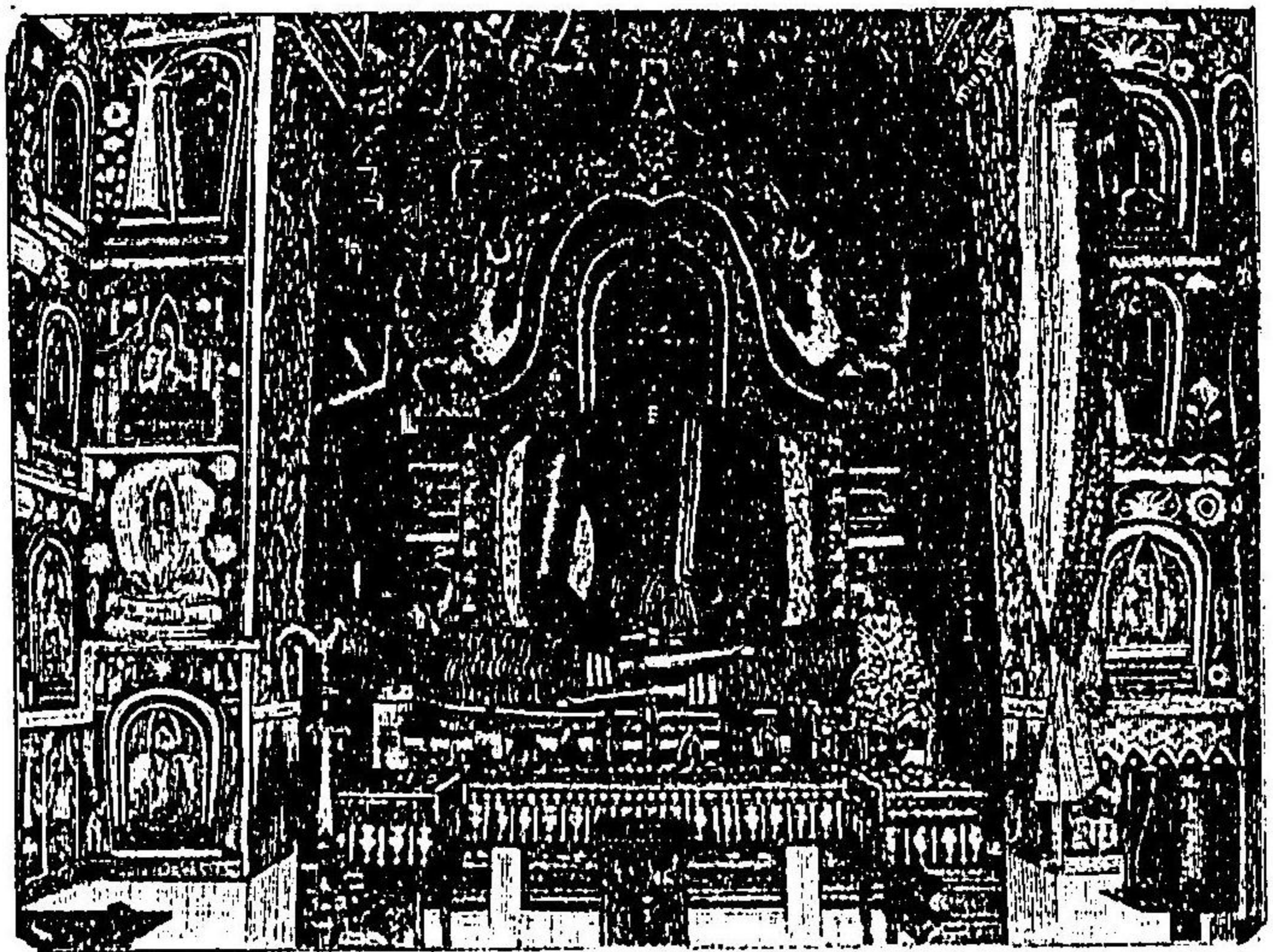
毘溼拏派
對佛教

呈しぬ、五世紀の始に法顯が印度を旅行せし時に隆盛なりし寺觀も、其後百五十年にして玄奘か巡見せし時には既に荒墟となれるあり、佛教は時に偉人の其中に出でて折伏顯揚に力を盡せしあるにも係らず、次第に衰へ來り、恰も佛教が曾て其一視同仁の博愛に依りて婆羅門を吞併したると同じく、印度教の通俗易行の宗教儀式の爲に包括せらるるに至れり、特に佛教の分派異論出でて、煩瑣的教理其教團の事業となり、進ては民衆を化する能はず、退ては偏に淨行戒律に依りて團結したる教團の精神を失ひ、假令佛教は其精神を印度教の中にて保存し得たるも、少くとも其名と形とにては到底彼の爲に壓倒せらるべきの運命を進めつつありき。

印度教中毘溼拏の崇拜は、曾て述べし如く、人格的崇拜と慈愛寛容平等の觀念に依て佛教を攝し、特に其華麗快潤なる祭禮儀式は、痛く人の感情を惹き、始よりして割合に冷索にして又後世甚しく煩瑣的となりし佛教を壓倒するに足りしなり、加之毘溼拏は佛の慈悲同情の側面を表したる者といふべく、此を以て佛陀を祭りしブリーの殿堂は毘溼拏なるキリシナとなりぬ、此像は即後に世界の主 Jagannāth と稱して有名なる祭典を營みし者なり、此外又佛を以て毘溼拏の一化身に過ぎずと

溼婆派對
佛教

佛教の自
滅



元佛陀を祀りし毘溼拏祭にせし者

をも容れ、一種の呪咀禁厭の集合に化したるもあり、今日尼波羅に存せる密乘佛教

なすの一派も出現せり。

次に溼婆の崇拜は、其森嚴沈痛なる風趣に依りて佛教の世外冥想的方面を包容するに足る者あり、溼婆は即遁世沈思の佛陀なり、曾て佛陀の尊像たりし佛像は後には冥想觀念を凝らせる溼婆の像と見做され、又其建築殿堂の莊嚴偉大は佛教の曾て占め得たる建築上の感化を奪ふに足りしなり。』

佛教既に其活氣を失ふに當りて、其對手の勢力は滔々として盛に、佛教は其特長を以て之と對峙する能はず、彼を容れ、此を許し、折衷混和を勉め、甚しきに至りては印度教中に發生したる女神崇拜派の神怪の方面

及北方佛教の一部分は即其結果なりとす。
 老朽の樹木は日に月に風雨に暴されながらに尙其餘命を保つも、一旦強暴の風雨に遇ふや終に勢なき最後を遂げん佛教の老木は終に印度教の偉人商羯羅の打撃に遇ひて消え失するが如くに自然に倒れたり。
 印度教を起せしは佛教の力なりしも、今や此は彼の爲に壓倒せられ、其宗祖の滅後千有餘年の後に全く其跡を印度の本土に絶つに至れり。

第六章 印度教確立時代

第一節 クマールラと商羯羅

佛教興起の反動として婆羅門教より派生したる印度教は千年の星霜を経て茫然たる一流の大宗教を作り出しぬ、只其成立混成的にして其性質雜駁なるが故に、其精神勢力を集中する能はずして、雜然混沌の状態にて存しぬ、然れども混沌の中毘溼拏と溼婆と各其特質を構成しつつあるあり、又薄伽梵歌の如き一大統合の目的を以て一系統を作らんとするあり、佛教の議論的學風と古代哲學派勃興の時代を追想せしむるに足る者あり、印度教は其中に一偉人の出でて一大系統を組織するを待てり。

此大勢を負て出でし者七世紀の末に當りてクマールラフハツタ Kumārilabhata なる者あり、彌曼薩の作法を祖述して其哲學を唱道し、彌曼薩哲學に多くの註釋をなし、又幾多の弟子を率ひて大に婆羅門的精神を宣布し、又一方にては佛教に對して敵愾の氣を起さしめたり、元來宗派の感情盛なる南印度は此より一層外道折服

印度教統
合の要求

クマールラ

の風を高めし者の如し。

クマーリラの後に商羯羅阿闍梨 Caṅkarācāryaあり、七百八十八年南方印度のマラ
 パーに生れ、クマーリラの跡を嗣きて一層婆羅門哲學の學風を昌にし、吠檀多の知
 識的宗教を復興せり、彼は吠檀多經を始め幾多の古哲學書に注釋を下し、自己の意
 見を以て印度哲學の正教を主張し、殆ど古來の哲學を總合成し、其英風は全印度
 の思想界を風靡せり、彼は又四方に歴遊して熱情人民を教化し、其弟子多きに及び
 ては破邪顯正の隊伍を整へて全印度に派遣し、教化説伏の外又威嚇の手段を用ひ
 て敵手特に佛教を屈伏し、印度の正統思想を宣傳したり、商羯羅の所説は遠く吠檀
 の教權に依り優波尼沙土の心髓を奉じ、宇宙唯一最大の精神のみを實在とし、人心
 物質一切の現象を否定するにあり、其實行道德を説くや、一に四姓の種別に依りて
 婆羅門の神聖を維持し、古來の習俗に依りて儀禮を修するにあり、其の教は全然内
 秘教と公開教とを判別したる者なりき、彼は上流婆羅門に對しては哲學の心髓を
 説き一般人民に對しては通俗の教を與へたり、彼は實に婆羅門的精神の權化と稱
 すべき人にして彼の復古的思想運動は混沌たる印度の思想界を振動し紛亂の中

商羯羅の
事業の結

に一大嚮導となりき、此に於て餘喘奄々たりし佛教は其最後の打撃を受けて音
 もなく倒れ、印度教の精神は凜として立ち其向ふ所を定むるを得たり。

商羯羅は破邪顯正の多事なる生活に一生を終り、其三十二歳の時雪山中のケダ
 ルナート Kedārnāth に死す、其が印度の四方に創設せし四個の大修道院は彼の死
 後各其高弟を指名して之が首長たらしめ、其學風は彼が短き生涯中の偉業を源泉
 として永く印度の思想界に覇たりき、彼の後にでて最有爲なりしは十四世紀に
 其のシリングリ修道院の上座たりしサーヤナ Sayana 又 マーダワ Mādhava にして
 梨俱吠陀を註釋し、又一切見集 Sarva-darśana-saṅgraha を著はし、正風を起し又所婆
 迦、佛教以下十六派の哲學を叙して大に其正否を辨難したり。

商羯羅の事業は印度固有の思潮を振起確立して一切の異流を排斥したり、龍樹が
 大乘密乘佛教の確立して後世諸派佛教の祖となりしと同じく、商羯羅は印度教の
 確立者にして後世印度教の諸派多く之を祖とせり、溼婆派は彼を以て溼婆の化身
 なりとし、毘溼拏派は彼が毘溼拏を拜せしを云ふ、然れども佛教を驅除し印度の正
 統思想を確立せし彼が事業は即後に發達して諸種の哲學派を生じ又從來存せし

商羯羅の
繼承者

商羯羅の
事業の結

印度教中の異傾向に分派の形を確定せしなり。

第二節 印度教の分派

印度教の山來分派

印度教が佛教に對して混沌の中に發生せし始より、溼婆は多く學者上流に崇拜せられ、毘溼拏は一般民間に行れたり、然れども未だ分派と稱すべき者にあらざりき。商羯羅の如きも後世の毘溼拏派は之を毘溼拏の崇拜者なりとし、溼婆派は之を溼婆の化身なりとなせども、彼自らは婆羅門教全體の宣布者として未だ分派を形成せし者にはあらざるなり、然れども崇拜する所の對象を異にし、從て其方法趣味を異にするに從て、自ら其間に固定分派の形を呈し來らざるべからず、商羯羅の偉手に依りて振起せられし印度教は彼の如く偉大ならざる其後嗣の間には自ら流派を分ち來れり、九世紀に出でて商羯羅を傳へしアーナンダキリ Anandasiri は、商羯羅が溼婆派 Caiva 毘溼拏派 Vaishnava 女神派 Sakta 伽那鉢提派 Ganapatya 太陽派 Saura 波輸鉢提派 Paupata 等六派の存立を許せし事を記し、又此等六派は皆同じく商羯羅に出でしと傳ふ、此を以て商羯羅を稱して六見の祖 Shan-mata-shapakas と

商羯羅の分派

稱する事あり、此の如く假令商羯羅自らが此等分派を始めしにあらざるも、分派の形勢は既に其前に成り其由來する所近きにあらざり、五世紀の無着、世親の頃にも波輸鉢多及波利伐羅勾迦 Parivrajaka 等の名あり、其より前の提婆の時に既に幾多の分派を擧げたり、漢譯佛典に徵するに之を古にしては四世紀の龍樹、提婆が著作より之を後にしては無着、世親の著作に至る迄諸種の哲學派を評騰し、九十六種外道等の名を附せし者少なからずと雖も、多くは哲學的意見に從て古今に存せし見解を分類論評せし者にして、其名稱の如きも盡くは分派の名となすべからず、又必しも商羯羅の刷振以後に於けるが如き宗派にはあらざるなり。

商羯羅が立てし吠檀多の内秘教は少數哲學者間の思想として存し、其直接の信奉者少きだけ其宗派に分裂する事もなかりき、然れども其公開教は一切の印度教的崇拜儀禮を許せり、異種の崇拜異種の傾向も其中に存せり、又其信奉者も民間一般に弘く、其分派の形勢は着々として時と共に進めり。

印度教の分派は其崇拜の對象を異にするに起り、其根本は最弘博なる萬有神教の信仰に立ちて唯一なる絶對最上の最上神 Paramesvara の外に孤立の神を許さざ

萬有神教的觀念の分派

るの教理に依れども、何れの者をも容れ何れの者にも適合する萬有神教の混淆包容に依りて發達したる、複雑なる神界の諸神は各其崇拜者を得、人各其好尚に依りて其選ぶ所を拜するを得べし、即各分派は各其祈願神 *Ishā-devata* を有して特に之のみを崇拜せり、此を以て此等諸神は其根底に於て差別なしとするも、之に祈願する以上は其の一のみを主とするを免れず、是に於て分派の基本は立ち、此分派と其專念の信奉とを表せん爲には、各派各其崇拜する神に對する真言 *Mantra* を定め、日毎に之を唱するを以て神に事ふるの道となし、又其祕密の眞言を傳授するは其派僧侶の職務にして之を傳へらるれば即其信者として歸敬式 *Diksha* を終りしなり、此等の祕密法を傳へて一派を形成せる者は即教義修法の相傳にして、一派の教系 *Sampradaya* をなせるなり、而して一定の教系を有するは一派をなす根本狀件なりとす。

毘溼拏派
と溼婆派

此分派の最根本として小分派の源となりしは毘溼拏派と溼婆派なり、此二派は甚相異なる特色を有して相混同調和すべからざる者あり、從て其形體習慣に於て大なる懸隔ありと雖も、二者は元同一根本より出でし者にして今日に至る迄甚しく

二派の外
形差別

相敵視する事なく、毘溼拏と溼婆を合一しハリハラ *Harī-hara* と稱して祭れるあり、又溼婆を祀れる都會には必ず毘溼拏を祀れるあり、或は毘溼拏が溼婆を生めりとなせるあり、溼婆が毘溼拏を生めりとなすあり。

二派は其區別として前額に記號 *Tilaka* 又 *Pundra* あり、溼婆派は白色を以て横に三線を畫き、毘溼拏派は紅黃白三色を以て縦に三線を畫く、其他身體に畫く記號も異なり、珠數は溼婆派にては三十二珠にして菱に似たる果にて作り、毘溼拏派は百八珠にしてツラシの木を以て珠を作る。

二派の趣
味差別

溼婆は威嚴の神なるを以て、其派の信仰儀禮には破壊の威力を表する者多く、其珠數の如き時には死人の骨を用ひ、其記號には三叉槍あり、其が祀る所の像は勢力威力の表號として男根を表象とし、其偶像も森嚴の容貌を有し、又威力の表象として牡牛を伴へり、而して之を崇拜するの道は冥想禁欲苦行するにあり、此を以て其信者は純粹なる婆羅門に多く、甚た世俗に遠かれり、毘溼拏は人情の神にして常に温和快濶の風趣に富み、其偶像はラーマ又はキリシナの温雅なる人形にして、毎日生人を遇するが如くに之を遇し、之を浴し之に多くの美食を供す、其祭禮は快濶にし

て時には肉慾放逸に流るる事あり、全く溼婆派の沈痛なる趣味と異なり、此故に此派は通俗の宗教として一般の人民を支配し、其教師若くは僧侶の如きも出世間の道徳を行はず、多くは妻子を有して恰も世間の士に似たり。

第三節 溼婆崇拜派

溼婆の崇拜

宇宙萬物を破壊するの威力、并に此破壊に對して之を再生するの威力は皆威力の神なる溼婆に出づとして、此神を畏敬崇拜する者即溼婆派なり。抑溼婆の崇拜は、曾て畧叙せし如く其由來する所遠く、其成立複雑なり、從て其が威力神としての性能も亦甚複雑なる者あり、吠陀時代の季世には此神を拜し破壊の神、救の神とし、後には大自在天 Mahēsvara 又は大天 Mahādeva と稱せらるるに至れり、之が性能を分析すれば大抵五となすべし。

破壊の威力として溼婆

第一には破壊の神なり、一切衆生の破壊者 Sarva bhūta-hara にして、一切の終には世界の生類天人惡鬼より梵天毘溼拏をも殺す、此を以て又大時即死 Mahā-kāla 破壊者 Hara 火神 Anala と稱せらる、此を以て彼は諸天の骸骨を其頸に纏へり、又彼は

曾て其眼より一閃の光を出だして一切を燒盡し、其灰を以て己が身體に塗りしといふ、溼婆の信徒か灰を用ひて崇拜の具となすは此が爲なり、溼婆は死の神として生類の死を喜び、墓場に徘徊し、墳墓に Gnāna-vāsin と稱せらる、死神たる彼は殆ど惡意憤怒の神となり、惡鬼を從へ、人の少しの不敬をも咎め之を滅せずんば止まず、此を以て又怖るべき人 Bhairava と稱せらる、後には此怖るべき方面は寧ろ溼婆の妻なる突伽 Durgā 及カーリーの Kālī の性能となれり。

再造の威力として溼婆

第二に溼婆は破壊を再造するの威力にして、一切守護の力なり、此を以て恵あり、平常に恵ある Sadāciva と稱せられ、恵を下す Cankara, Gambhu と稱せらる、溼婆は此方面にては殆ど造物主たる梵天に似て、乳を生し又力量ある牛を以て表せられ、又特に多く男性生殖器即憐伽 Linga にて表せらる。

行者としての溼婆

第三に溼婆は苦行禁欲、沈思冥想の中にある修業者苦行者の模範なり、此にては大苦行者 Mahā-Tapāh 大行者 Mahā-Yogi と稱せられ、榕樹の下に坐して裸體にて灰を身體に塗りて冥想せる像を以て表せらる、此方面にては修業中の佛陀に似たる者あるを以て釋迦に似たる傳説を附加し、彼は木幹の如く不動にして情慾を去り煩

知者としての溼婆



溼婆を象表したる牛像

二五二
惱を絶てりといふ此を以て情慾の神なる迦摩提婆 Kāmadeva が彼をして彼の妻なるパールワチー Pārvatī に對する情慾を刺激せんとせしや、彼は其眼より光を放ちて迦摩を灰にしたるといふ。

溼婆は此方面に於て其信者の世を遁れて禁慾苦行すべきの範となり、幾萬の婆羅門の遁世者をして此神の天なるカイラーサ Kailāsa に生れんが爲に、如何なる苦行をも敢てせしむるに至れり。

第四に禁慾冥想の溼婆は思想家學者となりて一切聖知の源泉なり、即波尼

遊樂の神としての溼婆

半男半女の溼婆

溼婆の功徳

溼婆の異名

備に梵語の文典を授けしも彼にして、彼は吠陀に通曉し、其順序に通達せる婆羅門なり、是れ即溼婆の崇拜が特に婆羅門族の宗教として内秘教の性質を帶るゝ所以なり、之に反して毘溼拏の崇拜は快濶なる趣味を帯びて一般人民の宗教として通俗的なり。

第五に溼婆の其妻と同伴するや、放逸なる山住の神となり、狩獵に耽り酒に溺れ、其從者なる侏儒の伽那 Gana に圍繞せられて、其妻と共に舞踏嬉樂せり、即此方面は女神崇拜派の溼婆にして、溼婆崇拜派の本色にはあらず。

溼婆は時として其再生の威力を表し、其妻との同伴に象りて半男半女 Ardhanārī となり、若くは其妻と合一して表せらる、即造化の二種の力が合一して萬物を生々するの意なり。

其他溼婆は地、水、火、風、空、日、月及婆羅門の八形を現して世界を維持すといひ、或は南方印度にては彼は六十四種の奇跡を現して、死人を活かし、盲を明かし、跛足を醫せし等の事をいふ。

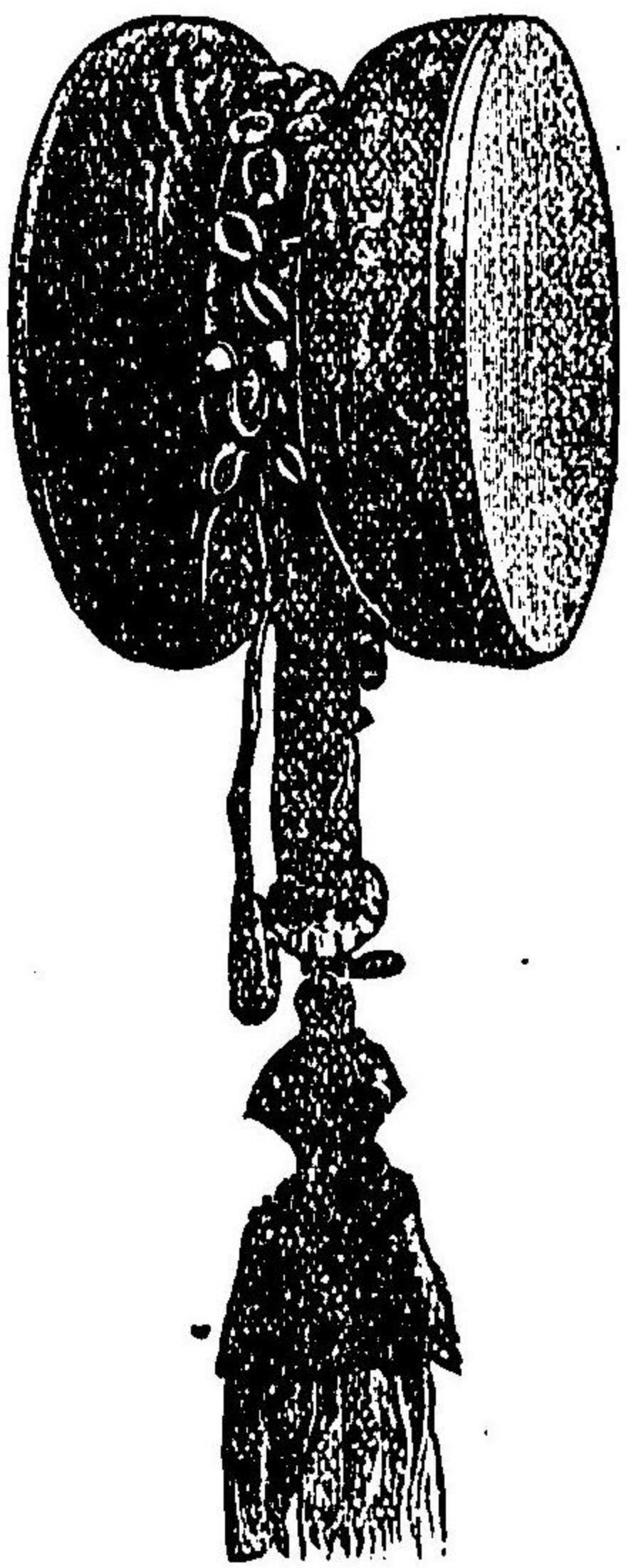
溼婆は此の如く異種雜多の性能を併有するを以て其信仰にも亦多方面あり、其名

稱も遂に千八を列ぬるに至れり、即右に擧げたる外の名の主なる者を擧ぐれば、母
 Matr父。Pitr衆生現出者。Bhūta-Bhāvana 一切構成者。Sarva-Bhāvakara 寂滅。Nirva-
 na 造歳者。Sainvatsara-kara 大幻。Mahāmāya 夜行者。Niṣā-cara 馬面。Badava-mukha 白
 者。Cukla 大怒。Mahā-kroda 根本。Mūla 崎形。Virūpa 等なり。

溼婆の形相

溼婆は山中のカイラーサ天に住し、無數の夜叉惡鬼を使役し、以て世界の惡を拂ふ
 と、其面は時には一面、時には五面にして、過現未を透視する三眼あり、其中央なるは
 前額にあり、其上に新月を戴き、以て月の變遷を表す、其頸を纏へる蛇は年月の順環
 にして、骸骨の頸章は時間の接續生類の生死を表す、其身體には灰を塗り、其毛髮は
 上に束ねて髻をなす、其中には恒河あり滔々東に去て復歸らず、其色は時には白き
 も、死の神としては黒く、其喉には一切を殺すべき毒ありて青色をなす、溼婆は牛に
 乗り若くは之を伴ふ、又幾度か惡魔を征服滅盡せしを表して、幾何かの武器を携ふ、
 三叉。Trigūla 金剛。Vajra 弓。Pinaka 斧等是なり、又其クハトワンガ。Khatvāṅga なる武
 器の尖頭には骨を載す、又其手には敵を縛する繩。Paśa 及音を發すべき太。報。Damaru
 を携ふ、此等の形態は皆其性能の表象なりとす。

溼婆崇拜の方面



（鼓太）ルマダ

溼婆には此の如く多方面ありと雖も、信者は必しも特に其一方面を擇て之を拜せず、從て其分派も此性能に相當したる者にあらず、其信者の間に種別ある

は只偶然の事情より、其記號及苦行の方法を異にするより出でしのみ、其シヤンカラウツジャヤに記する所の六派は左の如し。

- 第一、眞の溼婆派は憐伽を兩腕に烙印す
- 第二、ルドラ派 Paundra は前額に三叉を畫く
- 第三、ウグラ派 Ugra は兩腕に太鼓を烙印す
- 第四、フハツタ派 Bhakta は憐伽を前額に畫く
- 第五、ジャンガマ派 Jangama は頭上三叉を戴き、石造の憐伽を携ふ
- 第六、波輸鉢多派 Paṅcupata は前額兩腕胸部及中腹に憐伽を畫く

此中今日に存するは此第五と六にして、今日には此外に諸種の派あり。
 ダンデン Dandin 即携杖派は杖を携ふ、其杖に十種の別あるを以て又十名携杖派
 Daganāmi-dandin 云々。
 ア。ニ Aghora は動物の排泄小蟲等を食ひ、或は回教徒の尸を食ひ、之を以て、溼婆を
 慰むべしとなす者なり、此種の行者は今日益減少す。
 ウルドワバーフ Urdhva-bāhu は、隻手若くは兩手を頭上に上げて數年を経、蓋し其
 の生れんと欲する天上を指すの意ならん、
 此くして時日を経れば腕は骨立針の如き
 に至る。



(二五三頁参照)

那 迦 闍 從 の 婆 溼
 (刻彫堂殿ヲールエ)
 アーカシヤムキン Akāśa-mukhin 即空面
 派は、首を後方に向けて常に天を凝視す。
 リンガワタ Lingavata は金屬の筐に憐伽
 を納めて常に之を首に懸く、此派は南方印
 度にのみあり。

要之、溼婆派は特に婆羅門族の宗教にして、其方法は皆世を遁れて、苦行するにあり、
 故に彼等は溼婆を特に大苦行者として尊崇せり、而して其最終の目的は主。ムヒな
 る溼婆の力に依りて鎖。Paśa なる物質世界に繋がれたる家畜。Paśu 即精神を離
 脱せしむるにあり。
 此派の聖典は二十八の阿含。Agama ありしといふも、今は傳はらず。

第四節 溼婆派附屬分派

上來記述せし溼婆派中の分派は、只記號行法の異同に過ぎずして眞に分派と稱す
 るに足らず、元來溼婆派の正統教理は一種の内秘教として少數學者の間に存し、甚
 しく分派を生ぜざりしも、商羯羅の前既に溼婆崇拜の中に特別の教理を有せし者
 あり、又其後にも此の如き分派を生じたり、此分派の中此に記すべき者三即復認派、
 波輸鉢多派、及水銀派是なり。

復認派は商羯羅の世界妄迷論を最唯心的に解釋し、唯一の實在大自在天に依屬し、
 之が奴隸となりて此實無の差別相を脱せんとするにあり、九世紀と十一世紀の間

にリマーナダ Somānanda とアビナワグプタ Abhinavagupta の著作に依りて編成せられたり。

復認派の教理

此派は教ふらく、吾人が差別事物の世界と見るは、其實唯一の實在なる大自在天の意志に出でて其觀念を表せしに過ぎず、而して吾人人類亦此觀念に外ならざれば、一切と我とを差別するは即迷妄にして、一旦外物を離れて自己心中の觀念に照して見んか、萬物皆觀念の外にあるなく、萬物我と同一にして皆我に存す、吾人が萬物を認識するは即大自在天の觀念を再び吾人自己の觀念の中に認識する者にして、復認 Pratyabhijñā なり、若し吾人が溼婆と同一體ならざりせば、一も其觀念たる事物を認識する能はず、日々接する事物も生ずる能はざるべし、此を以て深く聖教を信じて沈思冥想し、吾人の實に大自在天と同一體なるを了知し、絶對的に此神に依屬し、其奴隸なる事を意識し、其恩寵に依りて自己の神たるを知り、自己の中に存する神の力を回復し、其絶對の觀念に到達するを要す、即是れ迷妄離脱の境にして、神より出づる一切の福祉を享くる事恰もロハナの山を得し者は其中に存する一切の財寶を得ると同じき者あらん、幸福知識の全體を包括せる知者は大自在天なれ

溼婆派の二極端

ばなり、解脱したる自己は大自在天に同一にして萬物の皆自己なるを知る。復認派は純粹なる唯一主義の唯心哲學を根據として、溼婆に歸依する宗教に依りて解脱を希圖したる者なり。

然れども溼婆派は他方にて又頗る自利的なる教理を組織し、迷信に富み溼風に走るの宗教を生み出だせり。即波輸鉢多及水銀派にして、其極端に走りしは女神崇拜派なり。

波輸鉢多派

波輸鉢多 Paṅpata は溼婆を波輸鉢提 Paṅpatti として崇拜するなり、漢典は之を牛主又は獸主外道と譯せり、波輸鉢提とは家畜の主の義にして、古にては只家畜を保護する神の義なりしが、此派は此名稱を個人精神并に物質世界なる家畜を作りしは自立自存の主溼婆なりとして、特別の教理を組織し、多く南方印度に傳播したり、其開祖はナクリーシヤ Nakulīca なる人なりと傳ふれども、其事蹟は審ならず、此派が商羯羅以前既に一系統をなせしは、此名か四世紀の世親等の著書に存するにて明なり。

波輸鉢多派の教理

此派の教ふる所に依れば、世界及人類は依存なり、繫縛の苦界なり、此繫縛を離脱す

るには、先づ智力と思想の活動に依りて最上の神溼婆に結合し、此に人格的解脱を得、此より進て一切の活動を止め、一切の苦惱を去り、絶對的に非人格的に解脱合一を得べし、此解脱の境に至るには八種の五事と三種の作法をなすを要す、即師に就きて戒行を修し、常に不淨に遠かり、迷誤を除き、常に溼婆を冥想し、如法の儀禮を修する等の事はなり、其儀禮とは主としては功徳を修し、其信念敬虔の爲には一日三回沙に浴し、燒熱の沙に坐し、供物を捧げ、文を誦し、聖地を巡拜し、又發聲唱歌舞蹈して主を讃嘆す、其他欠伸し、振顛し、跛行し、媚を呈し、無意義の事を行ふは皆此派の神に事ふる所以なり、此外乞食して破衣を着し、粗食を食するは其儀禮の副なり、彼等は眞に戯に類する無意義の作法と最厲の自克とに依りて、最高の状態に達し得べしと信するなり、此派の記號は身體諸部に憐伽を畫くにあり。

水銀派即ラセシワラ Rasagvara は、水銀を以て身體を永久に生活せしむる威力即神力なりとして、此水銀なる溼婆を拜する一種の鍊金術的宗教なり、此派にては最高幸福の状態即解脱は死を以て得らるべき者にあらず、身體の健全にして十分に冥想修法し、身體の永久不滅にして大自在天と合一の幸福を享くるにあらざれば

水銀派の
其教理

不可なりとなし、此に其不滅の法を構成し、水銀と雲母の混合液に此不死の料を發見せしなり、濕氣あり濃厚にして光輝あり、重くして而も動き、之を壓すれば幾多に分割して而も其質を變せざる不思議力ある、水銀と雲母は即溼婆と其妻との威力を合一したる者にして、精力 Passa なり、又彼岸を附與する者 Parada なるを以て、十八の方法を以て之を處理し、之を摩し、或は之を割り、之を粉にし、或は之を流し、之を壓し、之を燒き、終に之を食へば、則身體は漸次不死を得、自在を得、或は空中を飛翔し、宇宙を透見し、一切の災厄を離れ、一切の繫縛を脱するの幸福を得べし。

水銀派は過境來世の解脱を不確實なりとし、自己の幸福を冀ふの餘り、自己の身體を保存し、老死を経ず、此儘にして解脱の幸福を得んと欲するの餘り、終に此の如き神怪の方法に到着せしなり、彼等は曰く、壯年は色慾に溺れ、老人は老耄す、此の如くにして解脱を得べき生命なければ知るべきを知る能はず、故に不老不死の生命は解脱の唯一源泉なりと、而して水銀を以て不死不生の神力となすに至りしなり、此派は溼婆派と女神派の中間に位して其過渡をなせり。

溼婆派の現世幸福主義は獸主派と水銀派とに於て頗る主我私利なる傾向を作り

水銀派の
現世主義

出し、其極は肉慾放逸の女神派となれり。

第五節 女神崇拜派

溼婆派の病的傾向

溼婆派の苦行には、殆ど精神の常態を失する者あるは既に見たるが如し、而して此病的傾向は他方にては肉慾放逸として現はれぬ、女神の崇拜即是なり。

生殖力の崇拜

溼婆は威力にして其中に男女生殖の力を有すとの觀念は、既に溼婆派の中に出で、之を表するに半男半女若くは男女抱合の像を以てする者あり、此傾向は發達して溼婆の威力を其妻たる女神として拜するの一派を生ぜり、其威力 *Calita* を女神として拜するが故に、之を女神派 *Calita* と稱す。

女神崇拜の起源

生々の力を女性として、或は崇拜の對象となし或は哲學の主義となすは古より印度に存せり、然れども此傾向を十分に發達し、之に加ふるに放逸淫靡の慣行をなすに至りしは、溼婆派の中に恐くは土人の感化を受けて起りし此女神崇拜派なり、溼婆派の中にて通常の溼婆崇拜者は右道 *Dakshina-margi* と稱し、之に反して女神のみを拜するは之を左道 *Vama-margi* と稱す、其崇拜する所の女神には其夫なる溼婆

女神の二方面

破壊の威力を以てしての女神

と同じく、黑白即威烈温和の二面あり。

Kali

温和なる方面の女神

威烈破壊の力は時即死の女神なる *カーリー* *Kali* なり、*カーリー* は黒面鬼様の女神にして、髪を亂だし、口を開き、其手には劍を携へて人を殺し、其喉は血に濕ひ、其頸には骨の環を纏へり、此を以て此女神を祭るには常に血を以てし、甚しきは人を犠牲に供せし事もあり、虎の血は此女神百年の満足を買ひ、人の血は千年の満足を買ふに足るといへり、此と同じく「近くべからず」どの名ある突伽 *Durga* も亦恐るべき全身金色の女神にして、虎に跨り十手に兵器を携へて悪魔を殺戮す、恐を生せしむるなる *バイラヴ* *Bhairavi* 恐るべき *カラ* *Karala* も亦此方面に屬す、其温和なる方面にて溼婆の妻は即宇宙の大女神 *Mahadevi* なり、山に住して溼婆と戯るる *パール* *Parvati* なり、此方面にして肉慾に走りたる者は愛慾の女神 *カーメーシ* *Kamevari* 清淨なる *ヴマラ* *Vimala* 力なる *バリニ* *Balini* 等なり。

女神の異方面

此の如く女神の性能も溼婆に同じく其數無量にして、少くとも一千ありといふ、之れを大別すれば、知識の威力として大智女神 *Mahavidya* 生育の女神として大母神 *Mahamati*、愛慾の女神として戀神 *Nayika* 行法修験の女神として行女神 *Yogini* の

四類となすべく、第一と第四は多くは威烈の方面にして、第二第三は大抵温和の方面なり。

宇宙は女神なり

此の如く宇宙の力を無数の方面より女神として拜するが、故に宇内にありて女性は最も尊ぶべく又恐るべき秘密力を有する者となり、女性に對する感情は此派の中に於て諸種に發表し、萬物女性の中に存し、女性は神なり生氣なりと唱へ、其極は最も肉慾の放逸を極むるに至れり。

女神派の肉慾的儀禮

即此派は總ての肉慾を恣にするを以て、女神に事へ女神を慰むるの道となし、其崇拜の集會には一人の女を裸體にして之を本尊とし之を圍繞し、先づ酒 Madya を飲み、肉 Mamsa を食ひ、魚 Matsya を食ひ、油揚の類 Mudra を食ひ、終に男女亂雜の醜行 Maithuna に終る。此集會を聖環 Cricakra と稱して之を秘密にし、特に此最後の式を以て最秘密にして又最肝要なる儀式となせり。

女神派の私利的修法

此放恣放逸なる修法をなす女神崇拜派の目的とする處は、又從て私利私慾を遂ぐるの外にあるなく、彼等は此崇敬修法に依り不思議力 Siddhi を得、己の欲する所を獲己の欲せざる處を斥け、福利快樂を得、人の愛を買ひ、盲聾を醫し、疾病を斥け、怨敵

を伏せん事のみ願へり、即不思議力を得たりと思惟する彼等は、此等願望を達せん爲には諸の方法を設け、各之を特殊の場合に用ふ。咒文、咒字、咒符、咒札、咒念、及咒印是なり。

六咒法

咒文 Mantra は現今にては殆ど意義の通せざる文句を誦するなり。咒字 Bija は某々の一字を以て某女神の代表とし之を誦し若くは之を記するは即其神の力を借る所以なり。咒符 Yantra 種々の符號を以て神を代表するなり、特に血を以て書せしは其神力大なりと、女神派には三角及五角形の咒符多し。咒札 Kavaca は石片、紙又は木板等に咒文、咒字、咒符等を記したる者にして、信者は之を携へて災厄を避くるに足るとせり。咒念 Nyasa は咒文を誦しながら指を身體の諸處に觸れ、各其處に寓せる神の力を借るなり。咒印 Mudra は一定したる諸の方法に從て指を交叉する等の事をなすなり。

女神派の修法の影響

此種の修法は元吠陀時代より存せし者にして、何れの時代の印度宗教にも多少此信仰なきはなし、然れども之を極端に及ぼせしは瑜伽學派に始まり、密乘佛教に入ると入り、又女神崇拜派に於て十分の發達をなしたり、而して女神崇拜派の此慣行は又

女神派の
經典

佛教に影響し、尼波羅西藏の佛教に此慣行の盛なるを見る。
女神崇拜派の經典は、^{咀特羅} Tantra と稱す、其數甚多く、大抵皆溼婆が其妻に語りし者なりと稱し、其對話の體をなせり、咀特羅は女神派にては富蘭那に代へて第五吠陀として尊ぶ所にして、其記述の題目は大抵富蘭那に似たれども、其他咒文祕法等に就きて冗長の記述甚多し、其成立の年月は明ならずと雖も、何れにしても七世紀より古きはなし、女神派の信仰は此頃以後に漸次生じて後世に堆積せしなり。

第六節 毘溼拏崇拜派

毘溼拏派の
態度の包括的

毘溼拏派は一の分派と謂はんよりは殆ど印度一般人民の信仰なり、其が三種現體の中特に毘溼拏を尊崇して、一切を造化保存又破壊するの神となす點より云へば溼婆派と相對して印度教の一宗派なり、然れども毘溼拏派は極めて寛容包括的にして、其神なる毘溼拏の圓融自在にして、如何なる變にも應じ得て其性質極めて何物をも容れ何物にも適應し易く、四姓の別を問はず、宗義宗制の固定せる者なく、慈悲愛情の至大全能の人格的毘溼拏を崇拜し、之に歸敬する者は盡く其徒なり、特に

毘溼拏派
に定形な

毘溼拏の化身たるラーマとキリシナは共に婆羅門にあらずして、庶民に近づき易きと共に其傳記説話の趣味あり活氣ある風韻は、大に四民の同情を惹き、婆羅門の内祕的なるに反し、又佛教の平等と并に佛教に缺乏せる通俗的趣味とを兼ねたるを以て、浴く人民の信念を支配するに至れり。

毘溼拏の崇拜は弘く民間の宗教なり、其中に大徳の出でて一定の見識を以て之を導く事あれば、信者は其周圍に集ると雖も、而も其感化盡くれば、此の如きの團結は此と共に消滅するも、毘溼拏の崇拜は依然として滅びず、定まれる教理なければ何れの教をも容るべく、定まれる教團なければ何れの人も容易に之を攝し得べし、彼等の中には婆羅門の哲學を奉ずるあり、溼婆派の苦行を實行する者あり、女神派の放逸に倣ふ者あり、佛教の如く平等博愛の精神を實行するあり、而も其歸する所は毘溼拏の崇拜に集り得べし、此を以て、彼等は教理習慣の異同に冷淡にして、佛陀を毘溼拏の化身として拜し、基督教と和合せんとするあり、彼等の日常の行爲は即宗教にして、彼等の眼中には何事も非宗教的なる事なきなり、此を以て、彼等は必しも改良を企圖せず、變革進歩を冀はず、然れども又高德にして新信仰を以て、彼等を導

く者あれば、彼等は直に之に應じて怪まず、最冷淡に最抱的に、又最保守的にして最變化に適應す、恰も大海の一切を容れ常に風波に動揺して定まる所なきに似たり。

毘溼拏は其化身として屢、人界に現はれて其慈愍を行へり、而して其身は其妻たる福徳美麗の女神ラクシミー Lakshmi と共に **ワイクントハ Vaikuntha** 天に住す、其胸には毛輪の神聖なる表象あり、其四手の一には善見 Sudarçana なる輪と、一には五姓 Pāncājanya なる螺を、一には輝月 Kaumodaki なる棒を、一には蓮華 Padma を携へ、此車を驅り、此螺を吹き、此棒を振ひて悪魔を拂ひ、金翅鳥伽樓羅に乗じて其信者を助く、又彼は象を伴ふ事あり、又恒河は彼が足より流れ出でて人界を潤すなり、毘溼拏は此の如きの神なれども、人の最も之を崇信する所以は、其人界に **ラーマ、キリシナ** 等の勇者と化現して、華麗の一生に勇敢の行を以て人間を助けし點にあり。人の毘溼拏を崇拜するや、其功徳の廣大なるよりして種々の方面より之を尊稱し、其數溼婆と同じく千八あり、其の表する所の性能は溼婆のよりは神靈高德なる者多く、彼の如く威力忿怒の相なし、眞實者 Satya 淨心 Patatana 道路 Marga 眞理 Tatv-

毘溼拏の性質及相

毘溼拏の功徳名稱

vam 生命 Prana 醫 Vaidya 世界の藥 Bhesajam-Jagata 父 Pitṛ 聖の聖なる者 Pavitram Pavitrāṇām 等あり。

毘溼拏の化現する稱謂

毘溼拏派の感化は此等の人格的方面特に其化身にあり、毘溼拏が或は動物となり、或は **ラーマ、キリシナ** の如き勇者となりて、人間を惡より救ひし事蹟は、特に此派の人格的崇拜に深き感化を與へたり、此感化の弘く行はるるに至りて其信仰は特に感情的に傾き、浮薄に赴き、**ラーマ、キリシナ** の勇敢なる事蹟よりは寧ろ其小説的の戀愛譚に心を傾け、**キリシナ** が少時田野に生長して多くの牧女に慕はれ、彼等と共に陽春郊野に遊戯舞踏せし傳説は、最も人の好む所となり、信者は之に摸倣して、牧女が **キリシナ** に對する肉慾的愛情を神の恩寵と人の信仰に擬し、浮薄風をなし、淫靡俗となり、宗教的儀式は遊戯となり、其極は此派の感情的宗教をして一種の色情宗教たるの觀あらしむるに至れり、後に此派に出でし戀の海 Premasāgar と稱する歌曲、十二世紀の戯曲、牧歌 Gitagovinda の如きは、此風の好代表にして、此の如き風趣は毘溼拏派中之を有せざるなし。

毘溼拏派は民間の宗教として特に神學的組織を有せず、其が多數の信仰を支配す

毘溼拏派の崇拜の風趣の概観

る所以は其教儀よりは其儀禮祭祀の風韻其傳説説話の感化にあり、而して其宗教的意識の中心は信仰。Bhaktiなり、毘溼拏其物よりは寧ろ其化現たるキリシナ若くはラーマを慈愛恩寵。Anugraha, Prāsādaの最上神として之を信じ、之に服従歸敬するにあり、信仰の觀念は其始既に薄伽梵歌の中に成熟し、毘溼拏派の宗教をして人格的愛情の特色を發達せしめ、一方にては幾多の偶像的崇拜の對象を作り出だし、一方にては信者の方面にて其信仰の狀態に就きて種々の考察をなさしめたり、此に於て最寛容なる毘溼拏派の宗教は其中に種々の異傾向を發生し、後世諸の教師の出でて各一派をなすの端緒を此に發しぬ。

專念信仰の第一義は精神の世事に擾亂せられずして敬虔一心に神を冥想するにあり、靜安。Calm は佛教に於けると同じく毘溼拏派の最先とする所にして、其極は即敬虔なる冥想に依りて神と合一するにあり、眞の信仰は愛情に依る神人合一を以て最上の状態とす、即瑜伽にして、毘溼拏派の信仰は他の宗教哲學派と其歸着を一にせり、只其間人格的愛情の存するの差あるのみ、而して此一點は毘溼拏派の中に諸の儀禮祭祀を有する所以なり、毘溼拏派は信者の信仰敬虔と共に神の恩寵に

信仰及愛情の恩寵

重きを置き、而して此恩寵か如何にして人心の上に働くかは、此派の分派を生ずる一因なりき。

信仰愛情の説が毘溼拏派の中にて具體的に發達するに従て、其信仰は法外に走り始めぬ、信仰は解脱の唯一の因たるが故に、信仰を以てなす一行一聲又解脱の能ありとなし、生命臨終の時最後の一念信仰にあれば、一切の罪惡も消ゆと説き、從て此の如き最後を遂げん爲には特に自殺を行ふ者あり、或は信仰の一念に神の名を唱し、或は信仰の供物の殘餘を食へば、一切の罪障消滅すと信するあり、大罪人も此瑣少の事にて天に生ると信したり。

毘溼拏派の人格的信仰は又宗派の教師。Guru を神化崇拜せしむるに至りぬ、特に毘溼拏派には始より一定の教制なく、諸の教師出でて人民を化せしかば、此現存の師に向て神的信仰を捧ぐる事行はれ、或は之を神の化身とし、神的に成れる人。Śaiva, a-deva-mayah と稱し、或は之を最勝者覺者と稱し、後世毘溼拏派中分派の開祖は皆神位に加はりぬ、此が爲に儘に崇拜する所の教師を異にする事も、分派の因となりて多くの紛争を惹起せし事あり、然れども毘溼拏派にて現存の教師を尊崇して之

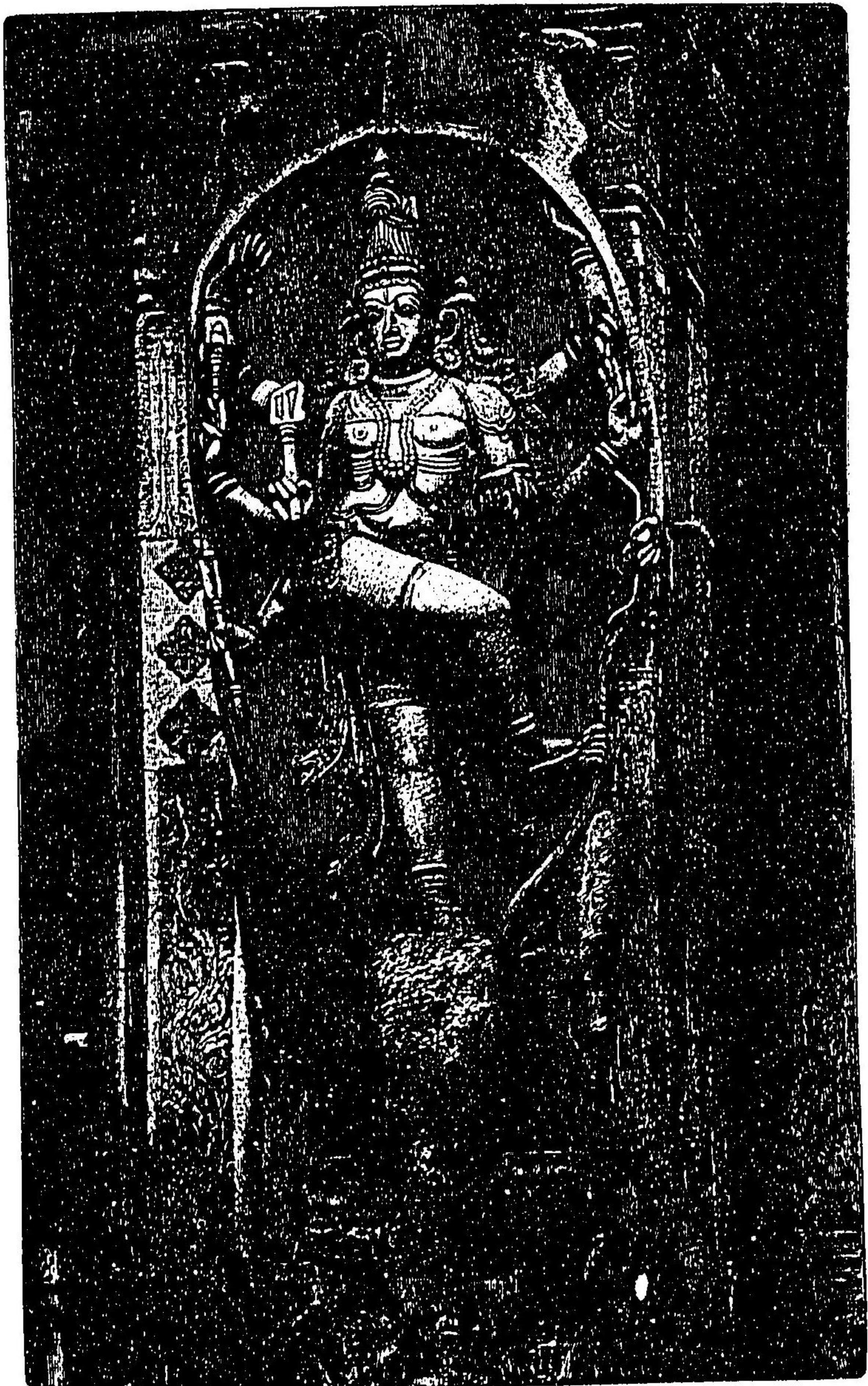
信仰祝の流弊と唱名

教師の崇拜

を神化し之を教權とする事は、徒に古典に拘泥し古傳の外に信仰なきの弊を脱せしめ、自由に新説を唱ふるの自由を興へ、幾多改革の企圖を生せしめたり、即回教及基督教の入り來りし後に當りて、之が影響を受けて混和折衷若くは融合の企圖をなせしは、嚴厲なる溼婆派に見るべからずして、盡く此毘溼拏派に出でたり、是れ最も注目すべき現象とす。

毘溼拏派は十一世紀以後に多くの分派を出だしぬ、其中には毘溼拏富蘭那の如き婆羅門の排斥的精神を以て古風の神を唱へたるなきにあらねども、其多くの大本は人格的に毘溼拏を信仰するにあり、神と同じき愛情を博く衆生に及ぼし、人類相愛し畜類を害せざるにあり、而して其最終の目的は死後毘溼拏の天なるワイクントハ若くはクリシナの居住なる牛地。Golokaに入り、各其功徳に應じて無限の幸福を得るにあり、而して此等の人格的崇拜、信仰の教理を説きし薄伽梵歌、薄伽梵富蘭那并にラーマ、クリシナの傳説を詩にしたる二大叙事詩は等しく彼等の聖典たり、

第七節 ラーマー又ジャ派

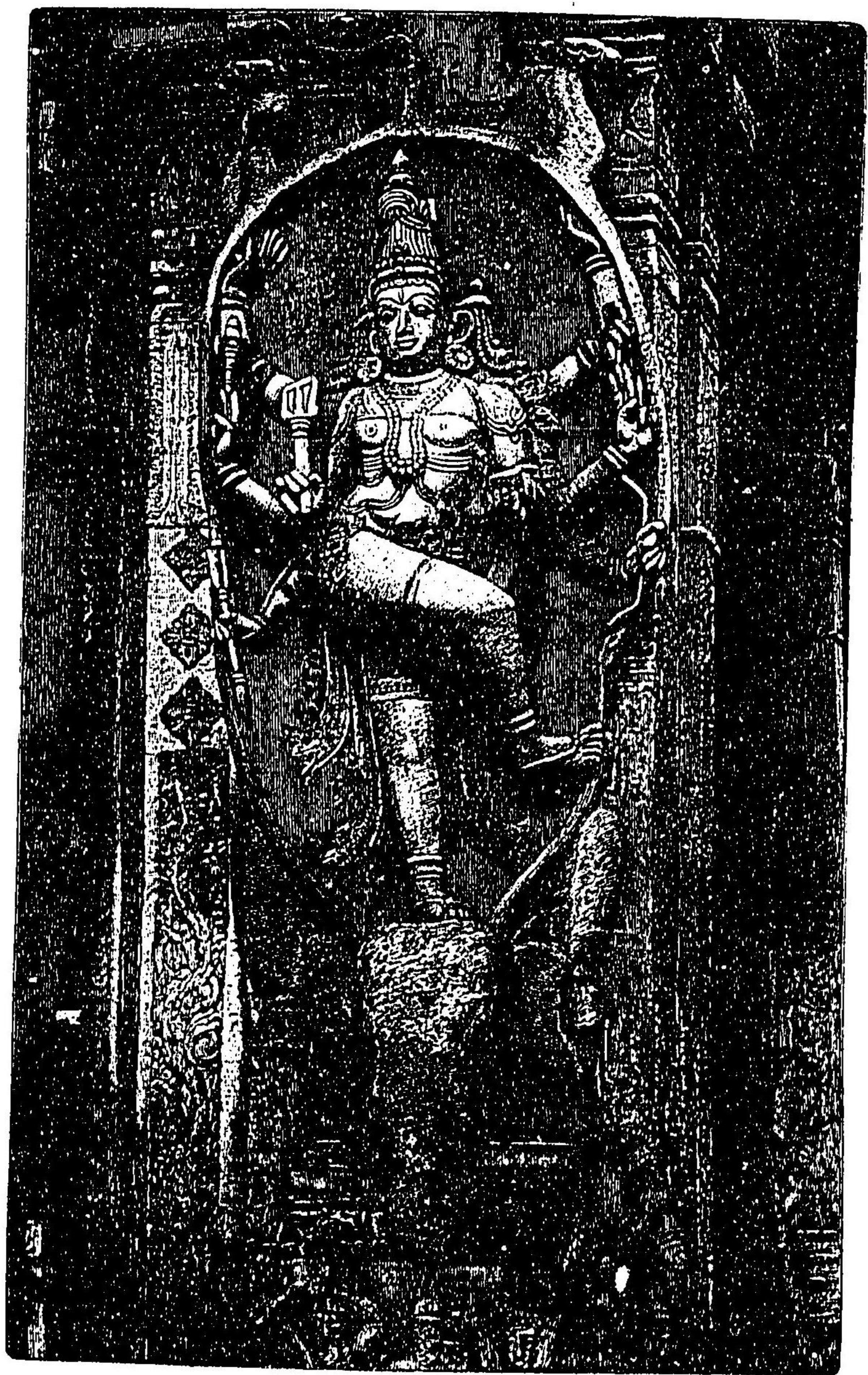


毘溼拏の像

を神化し之を教權とする事は、徒に古典に拘泥し古傳の外に信仰なきの弊を脱せしめ、自由に新説を唱ふるの自由を興へ、幾多改革の企圖を生せしめたり、即回教及基督教の入り來りし後に當りて、之が影響を受けて混和折衷若くは融合の企圖をなせしは、嚴厲なる溼婆派に見るべからずして、盡く此毘溼拏派に出でたり、是れ最も注目すべき現象とす。

毘溼拏派は十一世紀以後に多くの分派を出だしぬ、其中には毘溼拏富蘭那の如き婆羅門の排斥的精神を以て古風の神を唱へたるなきにあらねども、其多くの大本は人格的に毘溼拏を信仰するにあり、神と同じき愛情を博く衆生に及ぼし、人類相愛し畜類を害せざるにあり、而して其最終の目的は死後毘溼拏の天なるワイクントハ、若くはキリシナの居住なる牛地 Goloka に入り、各其功德に應じて無限の幸福を得るにあり、而して此等の人格的崇拜、信仰の教理を説きし薄伽梵歌、薄伽梵富蘭那、并にラーマ、キリシナの傳説を詩にしたる二大叙事詩は等しく彼等の聖典たり、

第七節 ラーマー又ジャ派



毘溼拏の像

毘溼拏派人格的崇拜の特色を開發し、神の慈悲と人の信仰を大本として有神教的
理を組織し、力を盡して吠檀多の唯一主義萬有神教に對抗したるをラームメシ
ヤとす。ラームメシヤは十二世紀の中葉南印度に生れ、全印度を旅行し、其が個體
精神と宇宙精神との相對的對立を許す局限唯一論 *Vishishtādvaita* の哲學宗教を以
て特に南印度を教化せり。

ラームメシヤの局限唯一論は世界を解釋して、三體を立て、最上精神たる主[○]宰[○]と、
vara と個人精神 *Cit* と無[○]精[○]神[○]の物質 *Acit* とを分ち、心と物の現象より成れる世界
と其主宰とは汗と鹹との如く本質を異にせり、人は常に樂ならず、差別相なり生滅
なり、作法の善惡に應じ善惡の果を享けて輪迴生死す、主宰は常樂なり、絶對なり、常
住の光なり、純潔にして一の汚點あるなし、大なる意味にては一切は主宰に外なら
ず、一切は主宰より流出せしなり、然れども主宰と現象世界は既に相分れ相離れて
其本性を異にせり、然らば此差別を滅し、不幸なる個體精神を常樂の主宰に歸入せ
しむるは最上主宰なる毘溼拏即ハリの慈愛にして、一切の主宰主權なるハリは其
常樂の光明に依りて吾人を救ひ導き、此最上の位地に到らしむ、ハリの此目的の爲

主宰の内面的信仰

ラーマの感化とその二派

信仰の争点

に人間に現はるるに五様あり、偶像として現し、ラーマの如き局部の神的化現と現し、キリシナの如き十全の化現と現し、又一切の物に普遍透徹なる精神と現し、人の精神を支配する内面的精神と現す、此故に之を信仰崇拜して其恩寵に攝せん事を冀ふ者は、漸次一より五の状態に歸敬して、其最上位地に到達するを要す、此最高の状態に達して、自己精神の中に内面的主宰を崇拜し得るに至れば、是れ即眞の信仰にして、ハリは此人をワイクントハ天に導き、再ひ人界に歸らしめず、人は此に至りて其信仰せし神に同化せしを認識し、其中に意識的に還没するの幸福を享く。

ラーマ・ヌジャの教化の及びし所は弘く、其弟子亦頗る多く、彼が指名せし高弟七十四人あり、此等の高弟は各其意見に依りて師の説を繼承し、其結果は種々の教理慣行を此派の中に生じて大に分離せしむるに至れり、其最大なるは南北の二派にして、其相敵對する事溼婆派に對するよりも激しく、北派はワダカライ Vada-galai 派と稱して古吠陀を尊信し、南派はテンガラライ Ten-galai と稱して別にタミール語の吠陀を作りたり。

此二派の争点とする所は、主宰の慈悲が如何にして人心に働き得るかにあり、此派

は、人は其意志の力に依りて神の慈悲を把持する事、兒猴の母猴に向ふに似たりと論ず、此説を猿猴説 Markata-nyaya と稱す、南派は神は其慈悲を以て人を救ひ出す事、母猫が其兒を捉へて其を危難より救ふに似たりと論ず、故に猫把説 Marjara-nyaya と稱す、是れ實に我邦の浄土門に於ける自力と他力の論と同一にして、又基督の救に就きて、アルメニア派とガルウン派が相争ひし點なりとす、恩寵救済に就きて、神本位、人本位の議論は幾多の支論を生じ、若し神にして正にして善ならば、如何にして一を擇て他を棄つるか、神は全能ならば彼の外に如何なる作用か存じ得ん、一旦信仰と恩寵を得れば再之を失ふ事ありや、等の神學問題は兩派の熱心に討議する所となりぬ。

信仰に就きての神學的問題は、信仰の表象たる女神ラードハーに就きての議論となり、此派は此女神を毘溼拏と同じく無限不滅にして救済の得らるべき階層なりと論じ、南派は之を以て神的ながらに毘溼拏の依屬にして同等にあらずとせり、此故に北方は女神を以て單に造化力の表象とせず、慈悲愛情同憐の權化として崇拜し、南派は之に反對せしなり、此議論は恰も基督教の聖母に關する議論に同じ。

女神に關する二派の争点

此二派は共に毘溼拏の烙印を胸、肩、兩腕に印し、其教師處々を巡回して小兒に之を施す、二派は又同じく其食事并に料理を祕密にして人に示さず、是れ印度の習慣なりと雖も、ラーマヌジャ派は特に此習慣を極端に及ぼして、堅く其庖厨食堂を瑣



ラーマヌジャ派の行者

せり。

二派の教師たる者は皆妻を有して子孫相續き、今日も現存すれども二者共に形骸のみを存し、其争點の如きも信者前額の縦線烙印は毘溼拏の右足を表すといひ、兩足を表すといふが如き事に過ぎず、北派は一足を表す白線を踏鐵狀に眼の間に畫き、其中に紅を點してラキシミーを表し、南派は蓮華座上にありといふ二白線と中央に紅或は黃の一線を引きてラキシミーを表せり、其形稍三叉に似たり。

其所説甚ラーマヌジャに近く、其傾向稍女神派に傾きてチヤイタヌヤ派等の先驅をなせし一派に、ニンパールカ Nimbarka の二元的唯一主義 Dvaitadvaita あり、此派は蓋し十二世紀に起り、キリシナと共に其妻ラードハを拜す、其戀愛を以て個人精神と宇宙精神との合一を説くが如き、又此派の一詩人が牧歌 Gita Govinda を作りて、キリシナの戀愛を詠せしが如きは、チヤイタヌヤ等の先驅をなせし者といふべし。

第八節 マドワ派とラーマナーンダ派

ラーマヌジャの局限唯一主義は、彼と同時のマドワ Madhva に依りて殆ど二元對峙の論となりぬ、マドワ又の名をアーナンダチールタ Anandatirtha と稱す、十三世紀の始に西方マラバル海岸の一都府に生る、其教ふる所は宇宙を自存と依存の二主義にて説明し、自存なる毘溼拏は常住にして主人なり、依存の世界は生滅にして奴隸に等しとなす、蓋し宇宙を三種に分ちて世界の物心と神とを相對せしはラ

其信仰及儀禮

イマーマヌジャの説にして、マドワは此に一步を進め、物心の世界を同じく依存として之と自存の神とを對立し、明に溼婆派の唯一主義に反對せり。依存奴隸なる吾人が最上神を崇拜するには唱名、禮拜、烙印の三方あり、其唱名とは、信者は神に歸敬の紀念として其子に命名するに毘溼拏千名の一を以てする等なり、其禮拜は身口意の三方にして聖經を唱し、柔和の語を用ひ、貧者を保護布施し、心に慈悲愛情を蓄へ神を信仰するは皆禮拜の方法なり、烙印 *Ahikana* は身體に毘溼拏の記號を烙印し、右腕に輪を書き、左腕に螺を書き、及前額には薄紅線を蹄鐵狀に書き、其中央に燒炭を以て黒線を書くを法とす、此に依りて常に神を念し、解脱の道に到るべしといふ。

マドワ派の分派

此派又祖師の尊稱に従て滿智 *Purnaprajna* 派と稱す、其信者は南方に多く、後二派に分れ、又八の修道院 *Matha* ありて、其首長各開祖の正流を傳ふと稱す、蓋しラーマヌジャの派とマドワの派とは最宗教的に毘溼拏の人格的崇拜を開發せし者にして、基督教と類似する所少なからず、其が眞に基督教に感化せられしと斷する學者あれど、未だ俄に肯定し難し。

ラーマーナダの通俗的教化

ラーマーマヌジャの運動は一般人民の間に毘溼拏の崇拜を傳播したり、然れども彼は尙未だ通俗教中の婆羅門派たるを免れざりしが、其通俗的の事業は其繼承者に依りて益發達し來り、其最も一般の感化に勉めたるはラーマーマヌジャより第五世のラーマーナダ *Ramananda* とす、此人は十四世紀の末に出で、ベナレスを中央として弘く恒河地方を教化し、多くの徒弟を下層人民の間に拔擢し、彼等をして俗人として其教化を行はしめ、頗る自由の風を宣揚し、其感化は弘く一般民間と遠く後世に及びたり。

其崇拜の風趣

此派は特にラーマと其妻シーターとを崇拜す、其典籍は盡く地方の通俗語に成り、又後には幾多の風韻ある叙事詩を出だせり、此派の詩人スールダス *Surdas* は多く毘溼拏の讃歌を出だし、彼は盲なりしより特に盲者の信敬渴仰を博したり、其後十六世紀末に出でし詩人ツラシーダス *Tulasidas* はラーマとシーターの熱信者として、俗語の詩を以て之を讚嘆し、ラーマイヤナに次ぎてラーマの信仰を民間に宣布したり。

ラーマリーナダの感化は此の如く沿く民間に澤を及ぼせしが、彼が高弟の中に回教の感化に依りて革新の運動を起せし者カビールあり、彼の事業をして一層の生彩を放たしむるに至れり。

第九節 毘溼拏派の腐敗

毘溼拏派中、キリシナと牧女の戀愛を以て神人の關係に比し淫靡風をなせる者あるは既に之を述べぬ、此傾向を大成して極端の肉慾放恣に及ぼし、一派を立てし者十六世紀の始に當りて二あり、西部のブラバと東部のチャイタヌヤと是なり。

チャイタヌヤ Caitanya は千四百八十五年ベルゴルに生る、幼にして梵語に通じ、其遊戯にもキリシナの化身たる實を現はせりと傳ふ、二十五歳に至りて志を決して身を宗教に投じ、六年の間印度國內を歴遊し、心を潜めて其信念を鍛練しぬ、其一旦法座を開きて其教を説くや、信者雲の如く其仇敵すら其徳と辯に歸服して、忽にして一般民間の大勢力となりぬ、彼は神の決して四姓種族に頓着せざるを教へ、キリシナの前には階級の別なく、キリシナを信する者は同じく平等なりと教へたり、彼

ブラバ
キリシナ

チャイ
ヌヤ

信仰と戀愛
の合一

信仰戀愛
の階段

淫靡の儀

は四民平等の點に於ては佛教の長所を採り、而して一方にてはベルゴル地方の大勢力たる女神崇拜派の風を輸入し、表面には其淫靡風を駁撃しながらも、内實は之に倣て、人の神に對する愛即信仰は男女の戀愛にて表象すべしとなし、愛の感情一片を以て其信仰を説き、男女の戀愛は單に相愛するのみにして其何故たるを知らず、人の神を愛する亦此の如くならざるべからずとせり、彼は此愛情的合一の階段を説き、第一には靜安。Cantaにして、他事に亂だされずして神を思ひ、二には進て神に歸服して其奴隷。Dasyaとなり、三には之に對して眞實友愛の情。Sakhyaを起し、四には子の父母に對するが如き孝心。Vatsalyaを起し、終には男女戀愛の無垢の愛情。Mithunyaに到着するにあり、即是れ專念の信仰、脫塵的合一なり、此の如き專心熱情恍惚の狀態に達する方法としては、稱名。Nama-kirtanaあり、戀愛に關する歌を歌ひ、牧女とキリシナが戯れしを摸して樂を奏し、舞蹈す、此間不徳の事行はるる事少きにあらず、彼の有名なるブリーの世界主祭禮の如きは此派にて最貴重する所なり、チャイタヌヤ自身も亦屢、此等の方法に依りて恍惚自失の狀に陥りしといふ、彼は亦海岸を歩みながら此狀態に達し、キリシナが浪なる牧女と戯るる無垢幸福の狀を

見て、自ら浪に身を失ひしと傳ふ、其迷信の度知るべきなり、又此派にては毘溼拏の名ハリを唱名すれば不思議力を得て幸福を得べしと信じ、數十萬遍の唱名をなす者少なからず。

チヤイタヌヤの死後
の同派

チヤイタヌヤの死するや彼は全身神の化身なりとせられ、其高弟アドワイタ Ad-
vaita ニトヤーナタ Nityānanda とは其一部を受けて生れたりと定まり、他の高
弟ハリダース Hari-dās も亦別に神として拜せらるるに至れり、此より後も此派の
教師たる者は牛主 Gosain 即 Go-sāmin と稱し、神の現身として崇拜せらる、即此派
にてはキリシナと其妻ラードハー Rādhā とを拜し、此と相并て教師特にチヤイタ
ヌヤを崇拜す。

チヤイタヌヤはヘルゴル地方を教化し、十二年間カタクに住し、位置を高弟に譲り
し後は、フリーの世界主祠の傍に住して毎年其祭禮に出でたり、此を以て此派は現
今にありても主として此地方に行はる。

ブラバ

ブラバ Vallabha も亦チヤイタヌヤと同じ頃千四百七十九年に尼波羅の境上に生

非苦行主
義

る、幼にして聰明穎悟、十二歳にして既に自己の教理を組織せりといひ、壯年にして
四方に周遊して其教を宣布せり、ブラバは思へらく、人は皆神なり、此故に神的なる
精神を宿せざる此身體を苦むるは決して神に事ふるの道にあらずとて、肉慾を禁
壓するを非難し、歡樂は即神に事へ神を慰むるの道なりと教へたり、此傾向は後來
益極端に走りて、快樂主義となり、肉慾放恣となり、外人をして此派を稱して飲[○]食[○]逸[○]
樂[○]の快樂道 Pushi-mārga と稱せしむるに至れり。

幼キリシ
ナの崇拜

此派の特に信仰歸敬する所はキリシナ、特に其幼時牧女と戯れしキリシナなり、其
祭る所の偶像は十二歳頃の幼キリシナ Bala-Krishna なり、ブラバ自身は此幼キリシ
ナの戀愛を譬喩的に人と神との關係を表すとせしむる、其後人は之を肉慾の方面
よりのみ見て、肉慾を以て直に信仰歸敬の方法となすに至れり、即彼等は集合して
其情慾熱情を逞むるを勉め、キリシナの舞踏に擬したるラーサマンタリ Rāsamand-
ri の集會には非常の熱情放逸に至るを常とす、又信者にして男子たる者は、此幼キ
リシナに事へん爲には特に女装する事あり、此派の法主たる大王 Maharaja 自らも
神に奉事するには女装し、翻て衆人をして己を拜せしむる時には、衆人をして己に

法王大王
其放逸

對して女性の態度を取らしむ。此大王は即キリシナの代理なりと見るを以てなり、大王はキリシナを拜し、信者は大王の前に跪き、其頭を戴き、其排垂毛髮の類を拜受し、其湯浴の水を飲み、其足を洗ひし水は之を足の不[○]死[○]劑[○] Caranāmitra と稱して尊重せり、從て其携帶物を拜し、其畫像を拜す、加之身心財產 Tan, man, dhan を放棄して神に事ふるを無上の徳となし、其歸入式 Samarpāna には己が身體生命精神才能妻子家産一切を奉 ずるを宣誓す、其甚しきに至りては婦人たる者はキリシナの代表なる大王に親近すれば、自己並に自己の家族に大なる幸福を得べしと信じ、争ふて大王等が肉慾放恣の具となるといふ、此が爲に近時法庭の問題となりし事もあり。

ブラマ派の經典

ブラマ自らは十八部の著作をなしたるも、此肉慾に走りたる後世の信者は、其中に色慾に關する文字多き薄伽梵富蘭那第十卷のみを保存して之を貴重せり、此派は今ほ主として西の方孟買ゲジャラト、中央印度の諸方に行はる。

此二派の末流

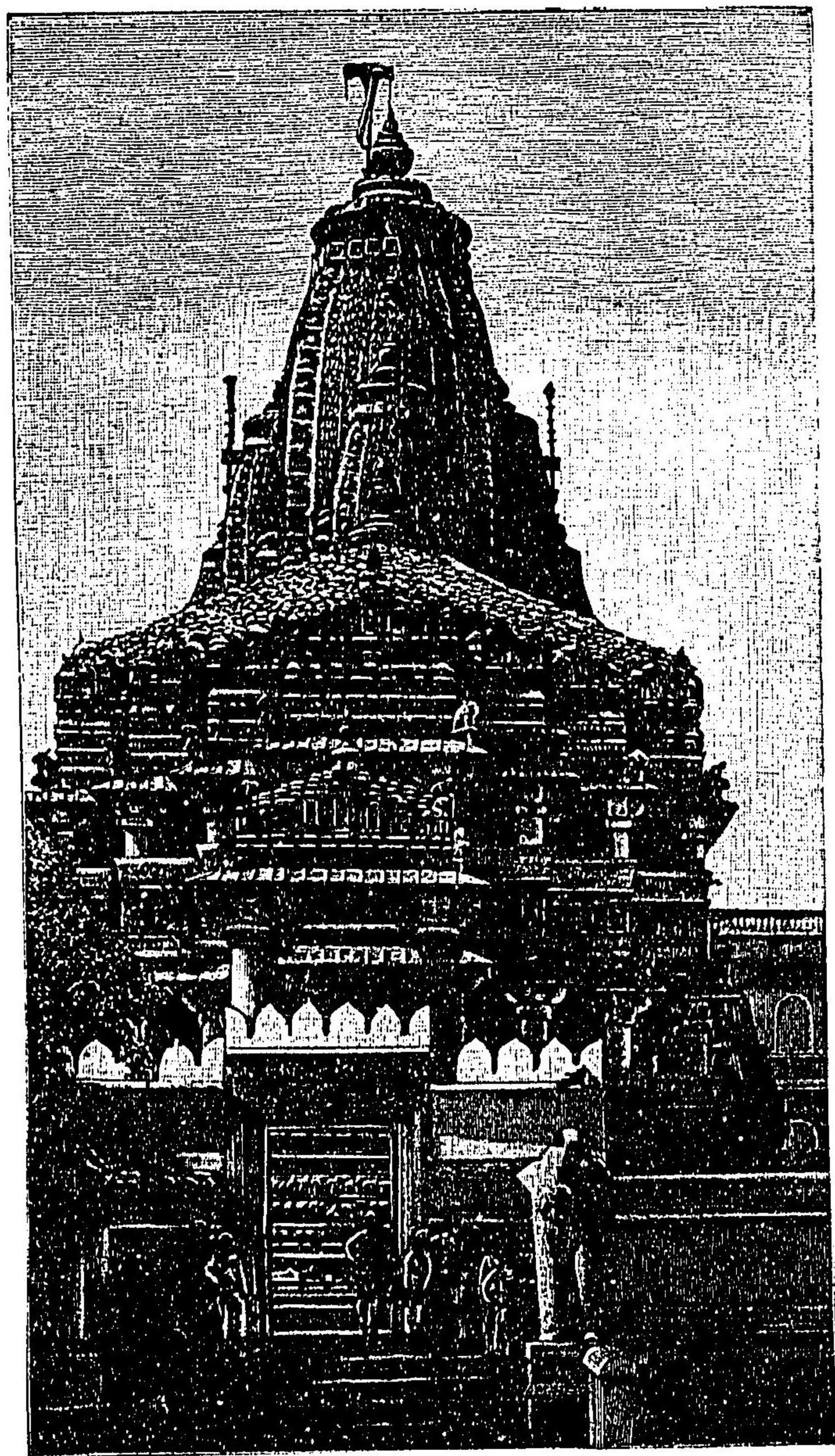
此二派は毘溼拏派中に肉慾の傾向を代表したる者なり、此故に其末流は此惡風を

増長して甚しき腐敗に陥りたるあれば、又一方には其腐敗に耐え兼ねて改革の企圖を起せしあり、其腐敗の極端なる者、十六世紀の末に起りしラードハヴラビーヤ adhāvalabhi 派の如きはラードハ一の戀人としてのみキリシナを拜し、十七世紀に盛に行はれし女友 Sakhibhāva 派は、自ら女性の友即ラードハ一となれりと信する者にして、其信者は盡く女子の服装容儀に擬し、女性の職務をのみ行ふ、此二派の如きは最淫靡に走りし者にして、毘溼拏派中の女神崇拜派と稱すべく、其派には其咀特羅を有せり。

チャイタヌヤ派中に、前世紀の末に出でし造物主信者 Kartabhaj と稱する一派は、教師以外に崇拜すべき神を認めず。

一方にて此の如き病的傾向發達したりと雖も、他方にてキリシナの崇拜は清淨なる信仰道徳を生せざりしにららず、敬虔なる女王ミラーバイ Mira Bai の虔信なる事蹟に基きて起りし一派は、徳行を嚴にし、情慾を離れたる行者 Vairāgin の生活をなす、此淨行の傾向は種々の影響を及ぼし、チャイタヌヤ派中の興清淨心派 Spathadāyaka のときは人間の教師を尊崇せず、禁慾の共同生活をなし、原始の佛教

改革派



堂殿改度印のルブイダウ
(るらせ稱と乗上の美築述)

に似たり、ウラバ派中のチャランダース派 Carandasi はデルヒの信度なる商人の創
めし所にして、道徳を唱導せり、而して此二派中にて改革の企圖をなせし者の最大
なるは十九世紀の始に出でしナーラーヤナの一派なり、印度教の腐敗を洗滌する
は時代の必要なりしなり。

第七章 西教輸入後の印度教改革時代 第一節 概見

印度教の腐敗既に膏盲に入る之を洗滌するは印度教自家の能くする所にあらず、恰も好し、十三四世紀の頃には回教及基督教の印度に入り来るあり、之が外部よりの刺激は印度教徒を警醒し、之が唯一神の純白なる崇拜と其高調の道德教は、即彼等に模範を示し、此に於て印度教の改革は處々に起り、回教の感化に依りて立つ者カビールあり、印度國內に回教風の兵力宗教を興せし者にナーナクあり、蒙古帝國のアクバル大帝は回教の中に出でて一切宗教の粹を集めんとせり、此等の刺激は印度教自身の中にも改革の運動を起せしが、一方に於て印度は英國主權の下に屬し、英語と英語の文明盛に此國に輸入せられ、基督教は中流人士を感化する事漸く深きに及びて、基督教の精神を以て印度の宗教を起す者ラームマフンロイあり、梵教會を設立して今に至れり。

第二節 回教の侵入

モハンメド以後
回教の侵入

回教徒の
狂熱と其の
運動

回教徒の
印度占領

亞刺比亞にありて、豫言者モハンメドが其説法を始めしは六百三十二年なりき、爾來劍と法とを以て其政教の領域を擴張し、三十餘年の後には其一將印度の境上を偵察せり、後七百十一年カシム將軍三年の間印度の西部を畧し、貢賦を捧ぐるか若くは回教を奉ずるかを強ひたり、然れども其進軍は七百十四年カシムの死と共に止まり、印度諸王は同盟して回教の侵入を防きたり、亞刺比亞人の波斯地方に於ける勢力は其後益鞏固となり、十世紀の末の頃に其王スフケテギーン一度大に印度諸王の連合軍を敗り、其子マハムードに至り、千一年再び印度軍を敗り、此より二十五年の間に十七度印度を犯し、其西部を畧し、東はカノジを犯し、南グジャラトを略し、至る所寺院と偶像とを破壊して、回教の勢力を樹立せんと勉めたり、此より回教徒と印度教と互に勝敗ありしも、回教は印度諸王の不和に乗じて中印度に入り、終に千二百六年デルヒを首府とし、東ベンゴルを平げ、南グジャラトを畧して、モンゴルの侵入して新に回教の王朝を建てし時迄其帝國を樹立したり。此間回教の王は變轉七朝を更へ、内には宮庭臣僚の擾亂あり、外には印度人の叛亂

あり、加之中央亞細亞の回教徒は常に此國に入りて同信の王を倒さんとし、常に困難の位置に立ちたり、然れども此四百年の回教王は盡く回教の狂熱を有し、印度人を虐殺し、他教徒を苦め、僧侶を殺し、寺院を破壊して信仰の壓抑を勉めたり、然れども回教は印度人の多數を化する能はずして、常に彼等と衝突したり、衝突の結果は彼是ど混し是彼に和して、印度教も回教の感化を受け、回教も亦大に彼の爲に化せられたり。

回教徒の
正統派

回教徒の
異流と印
度教

但其侵入の初期にありては、回教徒は純粹に其信仰を保存し、所謂スンニー Sunni 即正統の時代なりき、彼等は神なるアラハを唯一の治者とし、モハンメドを其豫言者と信じ、四人のカリフを其正統の繼承者と仰ぎぬ、然れども其侵入後數百年を経て印度教と互に相感化するに及びては、其中に異流即シーアハ Shiah を生じぬ、異流の徒は四人のカリフを仰がず、モハンメドの義子アリと其二子ハサンとフサインとを其正統の繼承者とす、此異流は印度教と合して、神人の關係を愛情の關係に歸して神と合一するを説き、モハンメドの二孫を神の化現としてラーマとキリシナの崇拜を摸倣せり、此の如く印度教と回教は相近きたれども未だ十分の調和を

なすに至らざりき。

回教と印度教と相并び、印度の國はツゲラク朝 Tughlak の回教の支配にありし時に當て、千三百九十八年、北方韃靼の酋長帖木兒^{トムール}印度を犯し來り、デルヒに入り、虐殺を行ひて諸方を荒せり、然れども彼自らは回教に化せられ、ヤムナ河畔フイルツの寺院に入りて回教の神を禮し、翌年印度を退きて北方に歸りぬ、此より後印度は統一なくして擾亂割據の狀を呈しぬ、此の如くして百餘年を経て、千五百二十六年に至り、帖木兒六世の孫バール^{バル} Babar 印度に侵入し、回教徒と結びて印度人を壓伏し、デルヒに都してモンゴル帝國の基をなせり。

其孫アケバル^{アケバル} Akbar 一五六〇—一六〇五在位に至りて、能く印度國中にある土其其人アフガン人、蒙古人等を結合して其大帝國を鞏固にしたり、此アケバル大帝は即比較宗教の祖として、新宗教の唱道者として印度宗教史上阿育以後の明星なり。

第三節 カビールの回教的革新

溼婆派の慘烈なる苦行と毘溼拏派の私利淫靡の風とは、之が洗滌の必要を呼び來

れり、ラーマ、ヌジャヤ并に其繼承者の一流は此間に立ちて印度教に一縷の光明を維ぎたり、然れども洗滌の必要は尙一層切實にして、根本的なる革新の精神を呼び來れり、此時に當りて恰も外來の回教は其極端の熱信と不寛容に於ては多數の同情を惹き難きも、其唯一神教の基本に立てる宗教は尙活氣を存し、印度宗教界の洗滌劑たるに足る者あり、此時勢は即回教の側より印度教の革新者カビール Kabir を起こせり。

印度教の多神教は其萬有神教の基本に依りて一神教に近づき、回教の中にはスフ^{スフ} の如き吠檀多哲學に近き者あり、回教徒の排斥的精神なかりせば、寛容なる印度教の之と相合する事敢て難きにあらず。

カビールは十五世紀の始に當りて織工なる回教徒の家に生れ、其宗教に通じ、長じてはラーマ、ナンダの弟子となりて其感化を受けたり、此に於て彼は回教の排斥的なるを非とし、又痛く印度教の宗教的精神なきを慨し、回教一神教の純白なる宗教に依りて印度教を洗滌せんとしたり、彼は沙悉特羅^{シャクティ}、富蘭那の類を嘲笑排斥し、婆羅門の外形に走りたる精神なき偽善信仰を攻撃し、偶像の外形を崇拜し、徒に殿堂

を壯にして浮薄の信念を發ふを非とし、階級種姓を分ち宗派教義を立てて相闘ぐの非なるを唱道し、而して教ふらく、最上唯一の神を信敬して互に相愛する者は、何の派たると何の民たるとを問はず、同じく同胞なり、神は世界の主にして、又一切の生活し運動せる者の精髓なり、其神は毘溼拏といふも、ラマといふも、又ハリといふも、將又回教の名を以て呼ぶも、其精神にして同じければ、同じく唯一の神を拜せるなり、彼は阿育王の宗教と同じき廣博なる精神を唱道して、信仰の實ある以上は何物をも拒絶せざりき、只苦行をなし又異様の服装記號を以て宗派を表するは之を絶たんと欲したり、其他の瑣細なる點に至りては諸派の慣行を許し、又遁世冥想の生活をなすをも非とせざりき、彼の冀ふ所は只清淨なる道徳にして、其の道徳に戻らざる限は、如何なる方法、如何なる生活を以てするを問はず、而して一神の信仰に依りて純潔の道徳を履行するは、一に信頼するに足る教師を擇びて之に服従するにあり、之に服従すと雖も、其教は一々自己良心理性の判断に訴へて、後に滿幅の誠意を捧げて之に服するにあり、此故に彼自らも常に其弟子に自ら眞理を求むるを懇諭したり、カビールは印度教鬱蒸の中に一陣の清風を齎らせし者といふべし

道徳と理
性

此一陣の清風は諸方に波及して幾多の改革運動を喚起するの因となり、カビールは幾多改革者の模範として、毘溼拏派の聖人と仰がる。

カビール
道者の運
動

カビールの弟子は少からず、其徒はカビール道者 Kabir-panthi と稱せらる、其聖典は即カビールの語を集録したるスクニダタン Sukh-nidhan なり、彼等は特にカビール派を以て自ら標置せず、他教の中に交りて其精神を鼓吹せり、故に彼等の感化は表面直接にあらずして裏面間接なり、後カビール派の中には教理慣行に幾何かの異同を生じ、分派の形勢を呈したりと雖も、異派互に氣脈を通じて精神的に協同結合せり、其信者は特にヘルゴルに多きも、其他グジャラト、中部印度、デカン等至る處其徒なきはなし、而して其中心は教祖の住所ベナレスにあり。

カビール
派の分派

カビールの承繼者中、教師の異同に依りて分派せしあり、即彼が十二弟子は各其道 Pantha を立てて分派せしといふ、其主なる者を擧げんか、十六世紀末なる綿晒工なるダードー Dada の派はダードー道者 Dada-panthi と稱し、特に毘溼拏を拜し、アジメール、ジイフル邊に多し、十七世紀の中葉に出でしバーバール Baba-Lal の派には王族の歸依者多かりき、清淨派 Sadhu は十七世紀の末に出でしビルバーン Bir-

正名派の
教理

bhanの創むる所にして、**デルヒ**の近邊に多し、十八世紀の後半に出でし**ジワンダ**
ス Jivan-Dasが開きし**正名派 Satnami**は神を**正名 Satnama**として拜する者にし
て、此派亦唯一神教と萬有神教との觀念を合せし者なり、教師を神の影像として尊
崇す、其教條を略記すれば神は遍一切所にして、何れの者にもあり、神は善惡一切の
源泉なり、偶像を拜すべからず、師は神聖なり、彼が足を洗ひし水と雖も神聖にして
弟子は之を飲むべし、階級の別をなす勿れ、斷食するを要せず、貧民を養へ、他人の感
情を傷ふ勿れ、死人を葬るに當りては泣く勿れ、而して呼べ「主は與へ主は持ち去れ
り」と、此派は此の如くにして下層人民を教化し、道德の教を宣布したり。

其他の回
教的影響

カビールの流とは少しく風趣を異にすと雖も、回教の影響に依りて同様の運動を
なしたる者、十七世紀に**ブラレンナト Prān-Nāth**あり、十八世紀の始に**溼婆那羅**
延 Giva Narayanaあり、前者は細事の異同を捨て、回教徒たると印度教徒たるとを
問はず、只唯一神を信すべきを教へ、後者は教師に服従するの要なしとして、自然神
教を説きぬ。

ガビールの流派少なからず、其勢力亦少小ならざりしと雖も、就中其大なる者を**ナ
イナク**のシク教とす。

第四節 シク教

ナイナク

シク教の開祖**ナイナク Nanak**は千四百六十九年**パンジヤ**州**ラーヴェー**河上**ラホル**
府の近村に生る、少より**毘溼拏派**の經典を研鑽し、稍長じては四方に周遊して親ら
宗教の師を訪ひ、宗教の状態を視察し、終には**メッカ**へ回教の巡拜をなしたりといふ、
彼が故郷は回教徒多き土地なりしを以て、其影響を受けし事少なからず、又自らは
印度人として、特に**カビール**の弟子等に交りて其感化を受け、茲に一神崇拜の根底
に立ちて回教と印度教を合一せんとせるに至れり、彼は**カビール**と同しく印度教
の荒唐なる經典を排斥し、其偶像崇拜の迷信、四姓の差別を非とし、精神道德の清淨
を最第一として最上の神**ハリ**を拜すべきを教へたり、然れども其教理の發達する
に從て、其人格的神格は印度教神話の**真氣**と迷信を混同するに至れり、彼が教理の
大本は吠檀多の無宇宙論的萬有神教に立ち、之を補ふに**ハリ**の人格的崇拜信仰と、

ナイナク
の信仰

ナーナク
の教師
の名稱

一切宗教上の指導たる教師に信頼するを以てしたり、彼は思へらく、現代末世に道徳修法亦固より功德たりと雖も、眞の解脱はハリの名を唱ふる外に方法あるなし、而して此方法を行ふには教師グルに就きて之が教に信順すべし、即彼はガビールが教師を尊重せしを特に明白に唱道し、ナーナクを初めグルは皆神格の化現にして、神に同じきを以て絶對的に之に信順すべしといへり、即教師に就きて眞正道を求むる者は弟子にして、其教の名シク Sikh は弟子の義なり、而して彼自らも必しも新宗派を創設すると云はず、印度教を改革し、カビールの跡を追ふ者として、常に其語を引用せり、ナーナクは幾何か詩作を遺して其教を傳へしが、十六世紀の末に第五のグル、アルジン Arjun 此等を集めて根本經典 Adi-Granth となし、其後第十のグル又經典を編し、此一派は此二編を師の金口 Gurmukhi として尊重せり。ナーナクは其教を西北印度に布き、千五百三十八年に歿しぬ、此より師弟相嗣て此派の統領をなす、此派は少しも階級の別を問はずして如何なる人民をも教化し、又遁世の修行を非としたるが故に、諸種の事業に従事する者、回教徒も印度教徒も之に歸し、専ら信仰道徳を勸勵せり、其多くの俗人信者は清教的團結をなして一グル

師の金口

シク派の
團結

第四の
グルの
訓練

の下に服従せり、此の如くにして教徒の團結鞏固なるにつれ、其間に軍事的趣味を生じ來り、其訓練を獎勵し、教祖の死後百餘年には宛然一箇の軍團をなすに至りぬ、第四のグル、ラームダース Ram-das は特に團結の精神を鼓吹して、宗派に政治的意義を附着し、又其財政を豊にせん爲大に財を堆積し、之に加ふるに師子相承の教制を改めて、グルの位置を其子アルジュンに譲りぬ、アルジュンは教徒の團結を鞏固にせんが爲に、其教權の中心とすべき經典を纂集し、又其父が建立せしアムリトサルAmritsarの寺院を一派の中心首府と定め、進て教徒に忠順の教を布きて、一定の課税をなし、精神的教派を化して宛然政治的團結となし、自ら之に法王として政教の大權を一手に集中したり、シク教派の政治的威力此く増長するに従て、回教の朝廷に忌憚せられ、グルアルジュンは終に千六百六年蒙古朝の帝シエハンギルの爲に誅せらる、此よりしてシク教徒の狂熱は一層を高め、其西北地方の勇悍なる信者は其軍隊を組織し、第九グル、テグバハードル Teg-Bahadur の時には世界を回教化せんと勉め、狂熱帝王アウラングジーブと衝突し、グルは千六百七十五年帝の爲に死に處せらる、此衝突刑罰は益此教派を刺激して其狂熱を高め、此派を化して全く戰團の

シク教團
の衝突

團體と化し、西北印度に儼然たる一王國をなしぬ。第十ケルGovindは父の仇を復せんが爲回教の帝國を滅さんと計り、此大望の爲には尋常一様の手段の能する所にあらざるより、不思議力を以て此望を達せんと欲し、神通力を得ん爲に時には山に入りて印度教的修行をなし、或は人を犠牲として女神突伽を祭り、其助力を仰ぎぬ。彼は又教徒を軍隊的に訓練せんが爲に、盡く教徒の名に獅子^シの字を加へしめ、盡く長髪にして劍を帯びしめ、常に回教徒と戦ふの覺悟をなさしめぬ。又自ら經典を編纂して其根本經典の平和なる教を化して慷慨悲憤の氣象を鼓舞し、諸の規律を定めて教徒の起居動作を一定し、宗教的狂熱と勇壯の氣風を養成せしめたり。シク教は此ケルに依りて迷信狂熱の軍隊と化しぬ。ゴヴ^グはアウラングジーフと戦ひしも、常に其志を得ず、後其子と和し、後千七百八年兇手に斃れぬ。ゴヴ^グは其繼嗣を定めず、教徒をして經典を尊てケルとなさしめ、余の死後汝等は何れの處にても主^主 Sahibなる經典をケルと仰げ、經典は汝の間ふ所に答ふべしと遺言しぬ。既に迷信狂熱に浮動せるシク教は此よりして經典崇拜の宗教となりぬ。ゴヴ^グは死して後も此派は尙一ケルの下に團結して回教王朝に抗し、屢慘烈なる戦

争刑罰に信者の血を流しぬ。回教王朝亡びて彼等は其軍勢を張りしも、後英國の東印度會社の爲に蹂躪せられ、今は宗教的團體としてよりは、寧ろ地方的團體としてパンジフ地方に散在せり。

シクの教祖ガビールは印度教の迷信を排斥して起りぬ、而も其後昆は甚しき迷信狂熱に陥りぬ。シク教の政權は回教の王朝と衝突しぬ、然れども其が政教を合一し兵器を執て立ちしは一に回教の感化にして、シク教は宛然印度の回教たり、シク教の運動歴史は宗教としてはカビールの革新と甚相異ならずと雖も、其軍隊的狂熱は宗教史上の一異彩にして頗る注目すべき者とす。

第五節 アクバル大帝の新宗教

印度教の中にはカビールあり、ナーナクあり、回教の感化に依りて印度教の腐敗を洗滌せんとせり、而して回教の方面を見れば、其教祖を去る事既に一千年に垂んとし、千五百九十一年は即回教の紀元一千年にして、回教の豫言が革命の時となせし時期も近きぬ。此時期は即正教一時衰頹し、大豫言者が出づべしと信せらるる時な

豫言者運

りき、回教の熱信者は皆其正教衰へて邪道のみ盛なるを慨し、翹足して豫言者の出現を待ち、憂慮狂熱は何人の胸にも往來しぬ、回教が印度に勢力を占めてより既に數百年、而して今や彼教は内部に紛擾を生じてスンニーとシーアハと相争ひ、之を外にしては波斯のスフ教は太陽と火との崇拜を以て回教を侵し來り、基督教は印度の西岸にあり、印度教の腐敗は幾多の改革者の運動を喚起せり、印度の宗教界は雲蒸鬱勃の中にあり、豫言者を翹望する者、自ら豫言者たらんと欲する者、自ら豫言者と稱する者は世間に簇々たり、世の改革的豫言者 Madhi 現はるべしとの翹望は自由討究信仰比較の氣運を増長しぬ。

ムバーラク司法著

十六世紀アクバル帝の時代には、改革翹望者として、其精神を鼓吹し其運動に奔走せし者、其數社會の上層下流に少なからず、而して其好代表たりしはシャイクムバーク Shaiik Mubarak とす、彼は元スンニーの家に生れしが、處々を周遊して宗教に就きて考慮したる結果、一種のスフ教の信仰を抱き、起て大に改革の運動に加はりぬ、彼は此が爲に回教正統の司法官即ウラマール Ulama 等に忌まれ、其住居より放逐せられぬ、然れども其子アフルファヅル Abu Faiz は後遂にアクバル太帝を助け

アブルファ

司法者の服従

て其新宗教樹立を助くるの人となりぬ、即ファヅルは其兄アフルファイズ Abu Faiz が詩人としてアクバルの朝廷に召されしと共に召されて、帝王の側に侍し、終に其親友として其大臣として其事業を助けぬ、ファヅルは元より回教の狹量狂熱を好まず、特に其司法官たるウラマールを好まず、即王に勸めて種々の方法を以て彼等の權力を奪ひ、彼等をして互に分離せしめ、終に一切正邪の判断は彼等にあらずして、帝王にあるを承認せしめ、四年にして全く彼等の權力を剝奪し了れり、此一事は特に回教徒の保守派に取りて大なる打撃にして、アクバルが自由宗教の事業は茲に其障礙を除き、其端緒を開くを得たり。

アクバル帝の偉大な業

アクバルは政治上にも偉大の統一を成ししと共に、又精神上の事業に於ても宏博偉大の精神を發揮し、恰も新時代の阿育王として、回教の偏執を捨て、印度固有の文學宗教に同情し、自ら人類の保護者と稱し、平等博愛の業を起し、又一方にては印度教の惡風を矯め、法律を以て動物を犠牲に供するを禁し、幼兒結婚を禁し、寡婦の再婚を許し、其他禁慾苦行の如き宗教に於ける没人情の儀禮を禁止したり、王は又回教以外の教徒に課する不信税 Jazia を廢し、巡拜者の課税を廢し、又奴隸を禁止せり、

王の不信税を廢するや、其詔に曰く、

此租税は不良の迷信に課したる者なりと雖も、一切の崇拜の方は一の大なる存在に對する者なるが故に、敬虔なる者に對して障礙を興へ、又彼等が其創造者と交通するの方を絶つは甚非なり。

と王の寛大なる見るべきなり。

アクバル王は一切の宗教に對して十分の寛容を有し、其後の一人は印度教徒にして、一人は基督教信者なりしといひ、又其子をして當時ゴアにありし基督教の教課を受けしめたり、回教の安息日(金曜日)には、彼は猶太教基督教回教婆羅門教火教等諸の宗教者を一堂に會し、十分の自由と寛容を以て宗教に關して談話討議せしめ、自己も亦此中に加はり、熱心に討議に加はり、又諸教の聖書を蒐集し、學者をして相互之を翻譯せしめ、又日毎に之を讀ましめて其教理を探求したり、此等討議研究の結果、王は回教の真理に疑問を生じ、宗教の根底は理性と道德の外何物にも従ふべからずとし、フツルと共に新に一種の自然神教を起し、全能の神世界以外にあるの教を立て、此新宗教を以て自然神學研究必要の結果にして一切宗教の粹は唯一神を

アクバル
帝の宗教
會合と
其新宗教

拜するにありとなしたり、アフルフイツは此新宗教の精神を歌て曰く、

來れ、我等は光明の壇に向はん、

我等はシナイの山の石を以て新しきカーバの礎を置かん、

カーバの壁は破れたり、

キフラの礎は消へぬ、

我等は新しき礎の上に誤なき樂を築かん、

と、フツル亦其唯一神を讚嘆して曰く、

神よ、我は何れの殿堂にも人が汝を求むるを見る、

何れの國語にても、人よ、汝を讚せよといふを聞く、

多神教も回教も汝を感知せり、

何れの宗教もいふ、汝は并ひなしと、

モスクには人の祈禱を捧ぐるあり、

基督教の寺には人汝を愛して鐘を打てり、

とアクバルの一切宗教に其心髓の奥を採らんとするの傾向見るべきなり、

アケバル王がモハンメド第十二の繼嗣教主なりとの信仰は彼が回教に背くと共に消え失せしも、彼は蒙古人の一神一君主の思想を喚起し來り、君主は即地上に於ける神なりとの信仰に導かれぬ、此に於て王はフヰルと謀りザラトストラの宗教に倣て、自己新宗教の儀禮を制定し、宇宙を生育する神的表象として太陽を拜するを始め、君主は即此太陽の一部なりとして人民をして己を拜せしめ、又自らは毎朝太陽を拜し、中夜には之に祈禱し、午時には之を冥想して其信仰を養ひたり、彼の宗教は此の如く政略的分子を加へ、一切回教の慣行紀元を廢して新に紀元を定め、祭日を定め宮中を以て新宗教の範となしたり。

アケバルの宗教は理性と道德を大本とせる一神的自然宗教にして、僧侶組織を有せず、又必しも制規を嚴にせずと雖も、彼の敬虔にして又時には迷信に傾くの性質は單純なる理性宗教のみに安んずる能はずして、表象的の儀禮を營み、基督教の宣教師が基督とマリアの像を示せしより大に之を禮拜するに至れり、又王は太陽と共に遊星及火星をも神の表象となし、其折衷的性質は時と共に現はるるに至れり、是れ彼が遠く阿育に及ばざる所なり。

アケバルは其宗教を宣布するには必しも嚴厲の方法を用ふる事をなさず、其近親待従の外に多くの信者を得ざりき、然れども王は回教の陋習を改むるには力を用ひ、其宗教上の儀式には觸れざりしも、一夫にして多妻を有するを禁じ、男子は二十歳以上にして自己の意志を以てするにあらざれば割禮を行はしむべからずと規定せり、然れども王は益歩武を進めて時には回教徒を處刑し、又は其の舊慣に戻り、不淨獸并飲酒の禁を解き、又回教の紀元なるヒジラ年號を廢し、其曆法を改めて太陽曆となし、自己即位の春分を以て新紀元の第一年となせり、王は亞刺比亞語を衰へしむるの方針を執り、亞刺比亞の名稱を禁じ、其禮拜の詞を變更し、又回教徒の鬚髯を蓄ふるを忌みたり、王が回教にて神を拜する時にのみなす大地接吻の禮を自己の前に行はしめんとするに至りては、回教徒の不平は益増長し來れり。

王は此等の不平反對をして大に起らしむるには至らざりしも、其宗教は大に弘布せられず、王の死と共に消滅して其嗣王の代に回教は漸次回復し來れり、王の制定したる信仰は消滅したるも、其寛容の精神は永く存じ回教徒をして其苛酷嚴厲の傾向を減せしめしは疑ふべからず、若し他の政治上の事情の之を妨ぐるなかりせ

ば、終に一改革を成熟するに至りしならんに、惜むべし王は其新宗教に政略を混用し、其折衷的性質に宏大の精神を腐蝕し、加之嗣王の回教的傾向は彼が一時の事業をして水泡の如き觀を呈せしむるに至れり。

第六節 基督教の輸入と其事業

古代印度の基督教

基督教徒が始めて印度に入りしは、既に第五期の歴史に記せしが如く、早く紀元二世紀の末にあり、基督教徒は商業等の爲に西方マラバルの海岸に來り、其間自ら基督教の教會を建てしが、其後幾人かの傳教師此地方に宣教し、特にトマスの如きは有名なる傳説あり、後五世紀に及びて、スリアの子ストル派の教會此地方に入り來り、其が亞細亞の他の諸國をも教化せしが如く、印度人を教化するに勉め、南方にありて他の印度宗教と對立して一隅の勢力をなしたり、其間或は聖書を土語に翻譯したる者あり、幾分か印度の宗教に影響なかりしにあらざるも、基督教としての旗幟明ならず、其教義作法の如きも印度教佛教回教と混合して存立し、時には土人に窮迫せられて山林に隠れ、或は他教の中に影を潜め、僅に僻地に行はるる信仰とし

葡萄牙人の羅馬教子ストル派

て敢て顯著なる影響を及ぼしたる事なかりき。

十六世紀の始に至りて、恰も此地方と通商を開き此地方に來住したる葡萄牙人は、羅馬の基督教を輸入し、古來此地方にありし基督教と結合し、其聖人と傳へらるるトマスを表彰し、彼の名を以て宏壯なる寺院を興せり、然れども羅馬正教の熱情に富みたる葡萄牙人は異派の基督教を寛容する能はず、サベールの如き熱心なる傳教者も續々此地に入り來り、自己の勢力増長すると共に他教を壓抑せんと勉め、千五百六十年宗教刑罰を始め、子ストル派も亦力を極めて之に抵抗せしが、此世紀の末年に至りて此派は全く羅馬教に服従し、其器具聖書を焼き棄てぬ、其後羅馬教會の羈絆弛み來り、復再び其教權を回復したるも、此頃千六百六十一年後、恰も基督教徒なる和蘭人の此地に入り來るあり、葡萄牙の領域を征し、葡萄牙人の勢力衰ふると共に子ストル派は再び頭を擡げ來れり、葡萄牙人は依然として力を極めて之を抑壓するに勉め、子ストル派亦内部二派に分れて、純粹の子ストル派は終に滅亡し、スリア風の羅馬教とヤコビ派と相并び存したり。

ヒスイトの宣教

十七世紀の始よりは、又ヒスイト教徒の葡萄牙及佛國より印度の南部に入り來る

ヒスイト
派ミ羅馬
教

あり、彼等の印度に入るや、全く印度風の生活をなし下層人民の間に入りて工業を執り、或は組合を立てて殖民地を開き、農業を営み、或は追放人を保護し、或は學校を立てて土民を教育し、恰も今日の救世軍がなしつつあると同一の方法を以て一般を感化する事を勉めたり、彼等は下層人民を教化すると同時に、又王族に注目し、或は政治の手段を以て或は醫藥等の方法を以て之を化したり。

然れども葡萄牙并に佛國の政府は其法王との關係よりして、宗教上に自己の意志に従て事を行ひ、十八世紀の後半にはジスイトの教會を解散せしめ、此よりして通常の羅馬教を宣布したり、然れども葡萄牙の如きは羅馬教の教權を握り、外教徒に對しては依然峻嚴の手段を執り、十六世紀より現世紀の始迄宗教刑罰を行ひて土民を化せん事を勉めたり。

羅馬舊教の布教は其始より幾變遷を経たれども、又其輸入の本國なる葡萄牙及佛國の印度に於ける政權は永からずして衰滅に歸したれども、其感化の及ぶ所弘く其信者又少からずして、今は百六十萬の信者を有し、印度の宗教史并に社會上に及ぼせし影響少なからずとす。

ルーテル
派の新教

浸禮派

英國の基
督教

羅馬教輸入の後二百年にして、基督新教は丁抹の印度殖民地を介して入り來れり、千七百五十年ルーテル派の教師チーゲンバルグ等丁抹王の保護を受けて東南の海岸トランケバルに來り、聖書を土語タミール並にヒンドスタニーに翻譯し、徐々其教を布きぬ、其後丁抹王の保護絶えてよりは、英國の基督知識擴布會 Society for Promoting Christian Knowledge 専ら印度に於けるルーテル派の事業を支へ、又千七百五十年には教師シワルツなる人を派して之を助けしめたり、之に次ぎて千七百九十三年浸禮派の教師ケレーマルシ等の入々セランブルに教會を立てて熱心に布教し、十年にして三十一種の聖書翻譯を出だしたり、此後五年(一七九八)には倫敦傳道協會 London Missionary Society も布教を開きて其歩を進めたり、英國東印度會社 East India Company は始は基督教を助けしも後甚しく之を妨害するに至れり、然れども十九世紀の始其政權を英國政府に交付すると共に、其干涉を撤去し、千八百十四年英國國教の司教來りてカルコタに其教會を始めたり、此と同時に教會傳道會 Church Missionary Society と福音宣布會 Society for the Propagation of the Gospel とは英國國教の事業を助けて布教に従事し其結果特に南印度に擧がれり、後十五

年蘇國教會の教師ダフ等來りて特に英語と高等教育とに力を盡し、其成績著々と
して擧がれり、此より歐米の新教派入り來る者多く其信者今六十萬に上ほれり、其
が宗教史上の影響の如きは後節に之を叙せん。

第七節 印度教中の新運動

印度教徒
の改革と
其結果

腐敗したる印度教は洗滌の必要を喚起し、回教若くは基督教の方面より之を革新
せんとしたる者の外、今世紀には幾何か印度教の中に此革新を企圖する者を出だ
しぬ、然れども此等一二先覺の革新運動も其教祖が幾多の信者を集め得たる後に
は、直に偶像崇拜と福利祈禱の迷信とに陥りて復出路を得ず、彼等の革新は會々印
度教の範圍にては真正根本の改革の不可能なるを示すのみ、那羅延 Nārāyana の
崇拜は、ブラバ派の腐敗に憤りて立ちしサハジャーナンド Sahajānanda の始むる所
なり、彼は十八世紀の末中印度のルツコウに生れ、少にしてブラバ派大王等の淫行
を慨し、二十にして家を出で、獨身の生活をなし、徳を行ひ衆を愛して、アーマデーバ
ド府に來りて多くの弟子を得、忽にして多くの信服者を得ぬ、或は云ふ彼は催眠術

那羅延派

後の那羅
延派

正名派の
復興

を能くして其衆を歸せしなりと、其信者多きより婆羅門等の忌む所となり、一度其
迫害を受けしより彼の聲望は前日に倍し、彼は主那羅延 Svāmī Nārāyana と稱せら
るるに至りぬ、彼は此より其衆の團結を鞏固にする事を勉め、軍隊を組織して、ブラ
バ派の淫風を征討し、義務を果し生活を清淨にしてキリシナ即那羅延に事ふる事
を宣布しぬ、彼は改革者としては一切生物を害し之を神に供するを禁じ、飲酒を禁
じ、又形は異なるも神は何れの處にも同一なるを教へぬ、彼の派は那羅延と其妻ラ
ードハーを并せ拜し、毘溼拏派の習慣に従て之を拜す、其信者には出家 Sādhu と在
家 Grhastha の二種あり、其信者は西印度のバロタ地方に多し、此派今尙存すと雖も
多く迷信者の集合にして其殿堂の偶像を開扉するや、信者は之を拜すれば一年間
の災厄を免るべしとて争て之に詣つといふ。

サハジャーナンドと同じ頃、ガシダース Ghāsi Das なる者あり、正名派を復興
し婆羅門の悪風を矯めんとし、五十萬の信徒を得たり、然れども彼は又其間に種姓
の制を始めたり、此人は千八百五十年に死し、其子パールクダース Palak Das 之を
嗣ぎしが、其が婆羅門族の特權を犯せしより、終に殺戮せられて、此運動は消滅しぬ。

第八節 ラームマフンロイの改革

改革者ラームマフンロイ

近世印度に於ける宗教改革の最高偉最浄潔なる者は、十九世紀の始に當りて基督教の感化に成りぬ、是れ英國的教育が舊來印度教の腐徳を警告し、基督教の道徳が稍其人心を支配するに至りし結果にして、此感化を負て立ちし改革者は名をラームマフンロイ Ram Mahun Roy と稱し、千七百七十四年恒河下流の一村に、婆羅門貴族の子として生れぬ。

ロイの幼時

彼の父は蒙古朝廷に事へたりしかば、彼は夙に波斯語と亞刺比亞語を學習し、又彼の父は毘溼拏派の信者なりしを以て、毎朝其父と共に薄伽梵富蘭那を誦讀したり、然れども此寧馨兒は此等聖典の荒誕を喜ばず、眼を轉して吠陀を習ひ、其優波尼沙土の簡潔と吠檀多の偉大なる哲學思想は特に其注意を惹きぬ。

ロイの宗教研究

彼は十六歳の時偶像崇拜を非難する論文を綴りしより長上の忌む處となり、家を出でて婆羅門教を研究し、又西藏に入りて佛教を研鑽し、此より益進みてパーリ語に依りて佛教の三藏を見、亞刺比亞語に依りて哈蘭を讀み、希伯來語に依りて舊約

ロイの唯一神の信仰

全書を讀み終には新約研究の爲に希臘語を習ひ始めぬ、彼は此の如くにして一切の宗教に其粹を味はんと勉めたり。

後家に歸りて、父の豊富なる遺産を繼ぎ、又暫く收税吏となりしが、其間も常に宗教の研鑽を怠らず、而して彼が收税吏として公平の處置は多くの地主をして彼に歸服せしむる基となりぬ、彼は宗教研究の進むに従て益偶像崇拜の非を悟り、印度教の腐敗を洗滌して其天真原始の淨潔に復せんと、の心は愈長し、彼が印度古典の研究は、益吠陀の神は精神的の唯一神たるを信せしめぬ。

カルコタに於けるロイ

特に婆羅門の寡婦焚死の俗に就きて彼は痛激なる反對をなせしより、益婆羅門の忌む所となり、故村を去てカルコタに退きぬ、此府に入りて彼は上流の教育ある諸教徒に交り、宗教洗滌の志を同する者を會して、千八百十六年始めて精神團體 *tmia Sabha* を結合せり、然れども婆羅門の反抗は終に此會をも消滅せしめたり、只ロイが熱情は舊に依りて衰へず、書籍論文演説に其旨趣を弘布し、其後四年、平和と幸福の嚮導たる耶蘇の教訓なる一書を著はし、盛に其道徳の教を稱揚せり、彼が信仰は基を吠檀多の唯一主義に据えて、唯一主義基督教に傾きつつありしなり、彼は

眞理は何れの宗教にも存し眞神の啓示は何れの國何れの人にも現はるべしと信せしを以て、何れの聖典も眞理の神より出で、何れの宗教も其啓示を有せざるなしとして、自ら吠檀多の徒ども又基督教徒ども思惟したり、此を以て彼は何れの教徒にも交際し、又基督教徒の布教にも助力し、曾て其主禱の詞を世界最上最深の祈禱なりと云ひし事あり。

梵教會の
成立

千八百二十八年、新教の牧師アダム唯一主義を唱道して其運動を始むるや、ロイも之と合同せしが、後に印度の宗教を改革するに外人の助を借るの不可なるを知り、新に家宅を借り、之を毎土曜日祈禱集會に用ひぬ、此集會には先づ吠檀を誦し、優波尼沙土を讀み、説教をなし、終に讚美歌を歌ふを例としたり、此集會は漸次勢力を得、寄附金の多きに從ひ、大家屋を建築し之を會堂とし、千八百三十年一月二十三日始めて梵教會 *Brahma Samāj* 即唯一神信者の會合は開かれぬ、而して此會堂は唯一、永恆不可思議、不變の存在なる宇宙の造化維持者を拜し、信心道徳慈善を増進し、一切宗教信者間の結合を鞏固にするの用に供する旨を宣言せり、而して此會堂内には英語にて詩篇を歌ひ、ベンガリー語にて讚歌を誦するを常とし、堂内には何等の

梵教會の
信條

影像をも祀らず、何等の供物をも供えず、又堂内には決して他人の崇拜信仰を非難すべからずと定めぬ、又ロイは己が決して新宗教を立つるの意にあらざるを明にし、唯一神を拜する者は何人も此會合の拒む所にあらざるを表白しぬ、但堂内の一室は特に婆羅門の爲に吠檀を誦讀すべき處と定められぬ。

ロイの基
督教と婆
羅門教と
に對する
態度

彼は改革者として其信仰は殆ど基督教者なりき、最後裁判の日あるを信じ、基督教の奇跡を容れ、基督の眞理と眞正宗教の開祖にして神の子なると、基督は神より人の罪を赦すの委託を受けしを信じ、又婆羅門教舊來の信仰を棄てて種姓の別を非とし、輪廻の信仰を棄てたり、而も彼は終生婆羅門として其聖繩を放たず、又其父の宗教に對しては敢て反對の態度を取らざりき。

ロイの渡
英と其死

ロイは其改革運動の十分成功せざるに當り、寡婦焚死に就きて速に之を禁せん事を欲し、恰も英國國會が東印度會社に關する議案を討議するを機とし、三十一年英國に渡航しぬ、英國にて此改革者は大に歓迎を受け、又議會の議案をも其意の如く通過せしめしが、其後歐洲大陸を旅行せる間に病を得、三十三年九月二十七日終にフリストルに客死しぬ。

改革の主唱者は逝きぬと雖も、彼が運動は其繼承を得尙進て幾多の改革運動を惹起したり。

第九節 梵教會の成立發達

ロイの繼承者デベンドラナートとその七信條

ロイの死後其朋友は教會を繼續せしか、數年の後材幹ある繼嗣は其一人ドワルカナートターゴルの子デベンドラナートターゴル Devendranāth Tagore として出でぬ、此人亦夙に英國風の教育を受け深く宗教の現状を慨し、而も直にロイの教會には加はらず、三十九年に此の二十一歳の少年は自ら宗教討究の爲に眞理探知團體 Fattva-bodhini Sabha を組織し、後其機關雜誌を發行しぬ、後二年にして彼は梵教會に加入し、其團結組織を鞏固にするの改革運動に邁くべからざるを知り、即七條の信條を制定し、頭領教師を定め、祈禱禮拜の法を一定しぬ、即此教會は偶像を禁じ、神の愛と神の好む所を行て神を拜し、唯一なる造化維持破壊の神、解脱の主、不可割にして唯一無二の神を信し、聖なる生活をなし、罪を棄てて赦されん事を求むるを信條とせり、是れ千八百四十三年の事なりき。

根本梵教會

此教會組織は其翌年に完成し、カルコタ梵教會を轉して根本梵教會 *Adi Brāhma Samāj* となし、ラームチャンドラヅダヤーバギーシは其教師と定まりぬ、四年の後に其信者は七百餘人を數ふるに至りぬ。

吠陀に關する異論

此くして教會の少しく固成するに従て異論を生じ、尙詳細に吠陀を研究すべしとて、其研究進むに及びて、或者は其神話なるを主張し、或者は其誤謬多きを指摘して議論紛々たりしが、其總會は吠陀の必しも全く神聖ならず、其が吾人の性能直覺に出づる眞正の唯一神教に背かざる限り、之を信奉すべしと決しぬ、即梵教會は直覺、理性、教權、經驗、視察、信仰を基とする團體と決せられしなり、時に千八百五十年なりき、此れより教會はミドナブル、キリシナガル、ダツカの諸地方に支會を建てたり。

七信條と四根本主義

此頃デベンドラナートは新に梵教 *Brāhma Dharma* なる書を著はし、其七條の信條を修正し、四の根本主義を定め、印度の古典より一々之が典據を擧げて唯一神教の日課書となしぬ、其四條の根本主義は梵教宣揚 *Brāhma-dharma-vija* と稱す、曰く、
一、此宇宙の始に唯一の梵ありき、他には何もなかりき、其は世界を造りき。
二、其は常住、有智、無限、多幸、自存、無形、唯一無二、遍一切所治一切、包一切、一切知、一切能、

不動圓滿、無雙なり。

三、此神を拜するのみ現世來世に幸福を獲るの路なり。

四、其を愛し其が欲する所をなすは其を拜する所以なり。

梵と基督教とを合一したるの跡見るべきなり、彼が梵教はロイが改革の方向を進めて清淨の道徳を宣揚するに於て特に其力を盡したり、此時に當りて、單に宗教教理の改革に満足せずして大に社會的の改革に力を盡さんとするの傾向は此教會の中に發生し來り、之が先導として一壯年の會員ケンヂヤンタルセン Keshab Chaudar Sen は盛に此説を主張しぬ。

蓋し印度の社會は全く宗教の基礎に立ち、宗教の信仰と社會の習慣は相互に纏綿連絡して相離るべからず、其信仰を改革せんとする者は必其社會日常の生活より其習俗制度を破壊せざるべからず、此故に一度傳來の宗教に斧を下さんとする者は、忽にして四方の反情を惹き、無知習俗、迷信、僧侶、無數の敵は此人の改革を遏めずんば止まざらんとす、梵教會の信仰改革の進むに従て其社會的の事物に向て歩を進むべきは自然の勢ながら、又甚だ困難の事業なり、而してロイの事業を繼ぎ敢て教會をして此大胆の歩武を執らしめんとしたるセンは、蓋しロイの志を成したる者といふべし。

梵教會内の社會的運動

宗教改革の社會的運動の密接

社會改革の主動者セン

センが改革の實行

婚姻制度の改革

會をして此大胆の歩武を執らしめんとしたるセンは、蓋しロイの志を成したる者といふべし。
センが此教會に入りしは實に千八百五十八年にして、此二十歳の少年は一時無信落寞の狀にありしが、此教會の存立を知り喜て之に投せしなり、年少なる彼は、始は只デベンドラナートに従屬して教會の事業に従ひぬ、然れども壯年銳氣のセンは永く其先輩に屈服するの器にあらず、彼は梵教會が單に偶像崇拜を排撃するのみに満足せず、全く階級の別を打破すべきを主張し、梵教會の會堂 Mandira に出席する者は盡く婆羅門の聖繩を撤するの議を提出しぬ、デベンドラナートは自らは之を撤すべきも敢て之を他人に強ふべからずとて之に反對し、此に二人が意見分裂の端を開きぬ。

此よりセンは種々の改革案を提出し、祖先の祭祀を廢し、此と共に誕生葬式の方法を改めしめぬ、彼は又教會内に女子の教育を起し、先には女子の別室或は籬外にて禮拜をなせしを獎勵して教堂の集會に出席せしめんと勉めたり。

女子の改良問題は婚姻の問題に及び、古來印度人が最神聖にして犯すべからずと

なせる婚姻の制度を變革するの議は提出せられ、先づ小兒の結婚を廢止するに着手しぬ、改革黨は此習俗の一切弊害の源泉にして之を廢するにあらざれば一切の革新終に望むべからずと絶叫しぬ、此改革の聲は教會の歡迎する所となり、其一人は寡婦の再婚を實行せしに、其村人は彼を誅戮せんと脅すに至れり、然れども婚姻改革の事は漸次教會内に實行せられ、デベンドラナート自らすら其次女の結婚には全く舊式の煩雜虚形に走るを避けて、嚴肅にして而も靜肅質朴の式を營むに至れり(一八六一)之を最初の梵教式結婚とす。

センの分裂

此より四年にしてセンは敢て異種姓の結婚を營ましめ、デベンドラナートは甚しく之を喜ばざりき、此に於てセンは益梵教會の保守的傾向に平ならず、又一方にては如何に社會改革の困難にして其痼疾の醫し難きを見ては、益姑息偷安の到底志を成すに足らざるを感じ、又自己の天職のデベンドラナート等に異なるを悟り、舊習を革むるよりは之を根本より破壊せざるべからずと決心するに至れり。

印度梵教會

彼は斯く決心し、即斷然教會と分裂し、壯年の改革黨を率ひて別に團體を組織し、デベンドラナートの根本梵教會に對して印度梵教會 Bharatavarshiya Brahma-Samā

と稱し、此に於て全然婆羅門の舊習に反抗するの新教會は成立しぬ、此分裂は實に千八百六十五年二月なりき。

第十節 ケシヤブチャングルセン以後の梵教會

印度梵教會の大會

改革黨印度梵教會の第一大會は千八百六十六年十一月に開かれぬ、センは此大會に於て一切の梵教會を結合し、之が中央の統轄をなさんとの抱負を公にしたりしが、五十教會の中二十八は之に代表者を送りたり、此新教會の會堂は三年の後に成功しぬ。

センの信條

センは幼時毘溼拏派に長せしを以て、大に其觀念風趣を梵教に輸入し、信仰の觀念と感情的傾向に結合するに基督教を以てし、神を父とし、人類の共に同胞なるを其教の大本と定めたり、其信條を擧げんに、
一、神は宇宙の大原にして造化の主、天父、救濟者なり、
二、精神は不死なり、死後再地上に生るる事なく、來世に永續す、
三、眞實の聖書は二のみ、天然の書冊と人の心に植ゑ付けられし自然の直覺是なり、

造化主の智と力と愛は記して天然に存し、不死と道德の觀念は人の天性に基ける信なり、

四、神は人身に現はるる事なし、彼は何れの人にも住すと雖も、特にモーセ、基督、モハ
ンメド、ナーナク、チャイタヌヤ等の聖人に住す、

五、梵教は一切宗教の粹なり、一切の眞理を容れて時代國土の別を問はず、

六、一切人類は同胞なり、梵教は人類を一家族として其別をなさず、

七、人の義務に四あり、神に對しては信仰敬愛禮拜を行し、自己に對しては健康知識
盛徳を修し、他に對しては正直正義感謝を實行し、人類の福利を進め、動物に對し
ては親切なるべし、

八、罪人は何か其果を享くべし、人は神を拜し、情慾を抑へ、悔悟し、善に近づきて自ら
神聖にすべし、此くすれば神の慈悲に依りて救を得べし、

九、救済とは精神に腐敗不徳の根を絶つなり、此の如くして絶えざれば、神聖歡喜の
源泉なる神の中に善と福を得べし、神に伴ふは梵教徒の天なり、

センは此の如き主義に依りて神を禮拜し、精神的にして潔白なる儀式を制定し、毎

センの運
動と印度
改革協會

婚姻條例
の發布

梵教會の
漸進的傾
向

日曜に集會し、又其他毎週一日の會合をなせり、然れども此教會も後には漸次祭日
を營みて莊嚴の儀式を行ふに至れり、

センは此後屢印度を旅行して其主義を宣揚し、又英國に旅行して諸の社會改革の
運動に加はりぬ、センは千八百七十年英國より歸來して、新に印度改革協會 Indian
Reform Association を結合して、婦人改革、教育改革其他一般に社會的道德的改革の
運動を始め、翌年女子師範學校を開きぬ、

婚姻の改革は、一度唱道せられし後も其好結果なかりしを以て、セン等一派は盛に
其議を主張し、種々困難の後七十二年終に印度政府をして婚姻條例を制定せしめ、
此より法律に依りて結婚は必しも宗教的儀式を營むを要せず、男は十八歳、女は十
四歳以下に結婚するを得ずとし、又寡婦の再婚を許し、多妻を禁ずるに至れり、

センの教會は社會改革と布教とに於ては熱意の運動をなせしが、其信仰の觀念は
漸次狂熱的發揚を養ひ來り、其讚美歌を歌ふにも激越の情を以て市街を歌ひ廻る
事あり、其祭禮も感情的に浮薄の動搖を呈し來り、或は教會員にして行法を修する
者あり、教會は之に修行場を與ふるに至れり、此に於てセンは勉めて此風を撲滅せ

センの崇敬

んどせしが、其成功の甚速なりし事は甚しく信者の尊信を買ひ、彼等は又狂熱的にセンを崇敬するの傾きを生じぬ、彼は始は謙遜の徳に背かざらんと勉めしも、其慢心の長するに従ひ、自ら諸聖人と交通し神命を受けたるが如くに信じ、自己に反対するは即神に反対するに同じと宣言するに至りぬ、此より彼は宛然印度梵教會法王の觀を呈しぬ。

センの専横と普及梵教會

センが威力長するに及びて野心従て長じ、専横の舉動を生じ來り、終には自己の女を十六歳の國王に嫁し、其社會改革の素志に背くをも利益の犠牲に供したり、而も教會員は甚しく之を攻撃せざりき、然れどもセンの専横に平ならざる者は相會し、千八百七十八年カルコタに會しア・ナンダモハンボーズ Ananda Mohan Bose を議長として改革遂行の爲に純潔の教會を組織し、普及梵教會 Sādhārana Brāhma-Samāj と稱したり、其會堂は八十一年に成功せり。

センの諸策

センは此新運動に對して七十九年に新法を設け教會教師の新位階アドヤーバカ Adhyāpaka を作り四人を此に命じぬ、後に彼が事業を繼承せしモツームダールも其一人なりき、又此頃新しき儀式を營み、古の諸聖人を歴訪して之と語ると稱し、一

新包容

種の洞觀術に耽るに至れり、加之彼が同年十二月に發布したる宣言の如きは殆ど誇大譎語の觀あり、然れども彼が才幹と雄辯は、尙多くの信者を心服せしめて其法王の位置を保ちたり。

センの死

千八百八十一年センは滔々たる二時間の雄辯を振て、其所謂新包容主義 New Dispensation を發表し、一切の宗教は皆梵教の中に包容すべきを論し、後文書を以て此主義を宣布し、自ら此新包容教會の司徒と稱せり、只彼が所謂新包容主義の高調雄大なるは彼の凡人ならざるを示すに足る者ありき、後間もなく八十四年一月此偉人は死し、其親友三百人に圍まれ、神の慈悲のみ力あり Brahma-kṛpā hi kevalam の聲に送られて、其身は火葬せられぬ。

モツームダール

センが死後其事業を繼承し、新包容の主義を宣揚するは、センが教師の一人ブラタ・ブチヤンダルモツームダール Bratāp Chandar Mozomdar なり、教會の中に彼に服せざる者なきにあらずと雖も、彼の才識辯舌は多數の人を歸服せしむるに足る者あり、彼は又センよりは純潔の方針に依りて其教會を導けり。

過四千年經
の結集

印度教の
迷信

印度教の
勢力

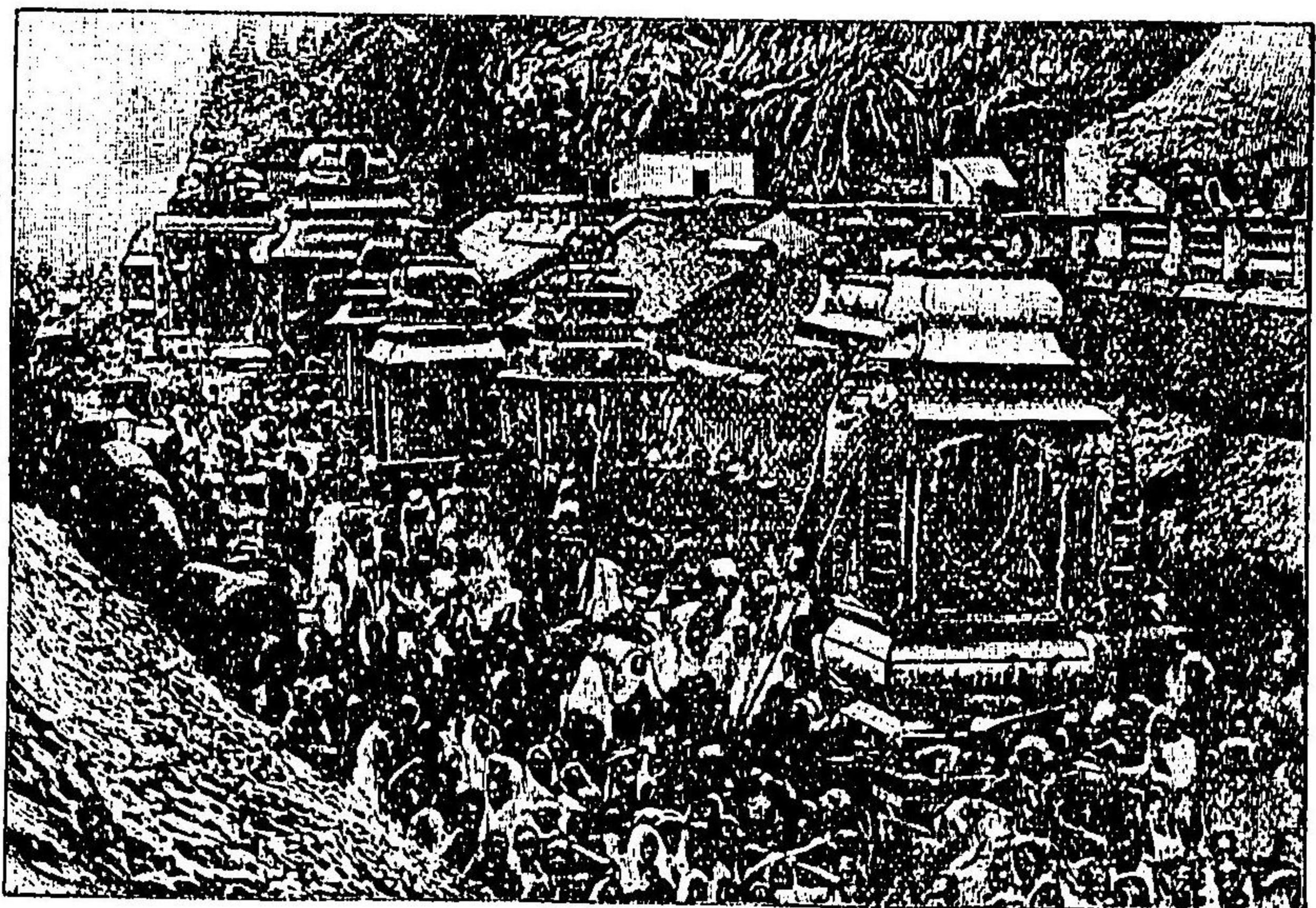
第十一節 印度宗教の現状

叙し來て沿々四千年印度の宗教は限なき變化を吾人の前に呈しぬ、純朴の崇拜あり、僧侶的祭祀あり、哲學と俗信と相隣り、腐敗は洗條に次ぎて來り、而して今は腐敗せる印度教の醜骸と、之が洗條革新の氣運の處々に蠢動するを殘しぬ。

四千年の間に印度の宗教は屢腐敗の病態に陥りしと共に、又幾多の改革を起しぬ、然れども種々なる勢力の協同は腐敗の勢をして増長せしめ、現時にありては婆羅門の專横は固より留存せずと雖も、其頑冥迷信の痼疾は印度國民の根蒂に蟠りて容易に除くべくもならず、二千年前と同様に慘烈なる苦行をなす者あり、虚儀形式の外に何等の信仰なく、彼等の宗教は道徳を維持増進するの具にわらずして、不徳なる習俗の養源なり、印度教の分派存する者數十の多きに達すと雖も、宗教の能事を盡せる者あるなし。

印度教は到底腐敗の宗教なり、壞爛破滅は早晚其頭上に來るべきの運命なり、然れども彼教徒の數は億に上り、其信念は假令虚形ながらに尙彼等の心底より抜き去る能はず、彼等の日常生活は全く其宗教の習俗に依り、彼等の儀式祭日は非常に盛

印度族の宗
教



第七章 四教輸入後の印度教改革時代 印度宗教現状

印度教現時の祭禮

大なる者あり、幾萬の民衆は此祭禮儀式の爲に助けり、英國の統治權を以てすらしも之に干渉し得ず、政治上に柔順なる印度教徒は宗教の爲には干戈を動かすを辭せず、其殿堂の宏壯にして其聖地が人の信仰を支配するの厚き、幾多の參拜巡禮者は如何なる困難をも厭はず、蟻の如く此等の地に詣づ、印度教の生活力は尙此の如き者あり、彼教徒が習俗的迷信的信念の滋養は容易に盡くべしとも見えざるなり。

印度教は此の如く、而して一方印度の山林地方に住する靈族の狀態を見れば、幽鬼を崇拜し、庶物を崇拜し、宗教上の暗黒

回教の現



現時(サ) 婆羅門教(シ) 行者(ヤ) (一)

は彼等の間に蟠まれり、彼等の宗教は固より他を化するの力あるなしと雖も、而も其印度下流に於ける影響は古と異なるなく、又印度教の洗滌を妨ぐる一勢力たるを失はず。

ドスタニ語と共に、中流に蔓延し、特にベンゴル及パンジャブ地方に多し、回教の熱情は彼等の間に存せりと雖も、熱情は固陋と相隣り、印度の宗教を濁亂するの勢力と稱せざるべからず、而して回教の變形たるシク教はパンジャブ地方の大勢力なりと雖も、同地方郷士間の信念を支配し、而も彼等を固陋ならしむるのみにして、其餘命を郷黨の間に保つのみ。
其他耆那教、波斯教、佛教の如き、各一部分に割據するも、彼等の中に新鮮の活氣ある

其他諸教の現狀

羅馬教及新教の現狀

梵教會の現狀

者なし、尼波羅の佛教、ボンベイ地方の波斯教の如きは、迷信の團結のみ、只錫崙教徒の運動に成り、カルコタに本部を置ける大菩提會、Maha Bodhi Society は、佛教を其本土に回復するに盡力し、稍學者間の同情を惹くも、其結果未だ少しも擧らず。基督教にありても、羅馬教は南方の海岸地方に多く散布し、農商の間に幾分の感化力を有す、新教にありては、歐洲的特に英國的文明教育の行はるる所には幾分の信者を有し、及社會的改良に於ては、冥々の勢力なきにあらずと雖も、此派は大に印度人の同情を買ふに至らず、昭々の勢力終に何れの時を期すべきやを知らず。
而して彼の梵教に至りては、其始の好望に似ず、今は只從來の教會を維持せるのみ、然れども彼教徒が印度の知識道德の上に力を盡すと勢力を及ぼすの大なるは、吾人の最も注目すべき處なり、其眞理探求、Tattva-bodhini は根本教會の機關として、印度鏡、The Indian Mirror は進歩派の機關として、又有神教年報、Theistic Annual 及有神教四季評論、Theistic Quarterly Review は同じく進歩派なるモットー、ムタールの機關として、各印度の思想界を動かし、一方にて普及教會は、ベルゴル輿論、Bengal Public Opinion と眞理月光、Tattva-kanmudi を發刊して、其急進的氣焰を噴き、印度特報、

Indian Messenger は之が別働隊として、輿論を鼓舞せんとせり。
 一方梵教の運動につれて、有神教の信仰を鼓吹する者にアーリヤ教會 Arya Samaj
 あり、宗教は吾人の理性と聖教の指示に依りて正見を得るにありとし、吠陀のみを
 聖教の證典として、一切の婆羅門的印度教的信仰を排斥せり、此教會亦社會的運動
 に力を盡し、吠陀の弘布と布教師の派遣を始とし、特に貧民教育に力を致し、又婚姻
 の改革を唱道せり、彼等の勢力、亦婆羅門教を刺激するに於て甚力あり、千八百八十
 三年其教祖ドヤ・ナンダサラスワチー Dyananda Sarasvati の死後尙其活動を續
 く印度の宗教は今戰國の狀態にあり。

試に英領印度現時の人口に就きて、其宗教別を見るに、左の如き者あり、

印度教及梵教徒	一五四、九八八、六六七、 ^八
回教徒	四九、二七五、〇九二、
佛教徒	二七、三二三、
基督教徒	一、三六七、八八六、
幽鬼崇拜の徒	五、六七九、九七八、

シク教徒	一、四〇三、五七五、
耆那教徒	四九五、〇〇一、
波斯教徒	七六、八一七、
猶太教徒	一四、二八五、
其他の教徒并に無宗教の徒	二〇三、八八、
總計	二二三、五四一、〇一二、

是れ實に五年前の最近調査が示せし結果なりとす。
 要之混沌たる印度の宗教は大なる光明を望みつつも、妖雲に蔽はれて其冥暗を驅
 除すべき前途の望甚遠し、嗚呼誰か此妖雲を拂て二億の精靈を光明に浴せしむる
 者ぞ。

印度宗教史 終

梵語字母表

	ओ ऐ ए ऋ ॠ ङ उ ई इ आ अ	現 テ ア ナ ー ガ リ の
梵 語 字 母 表	उ ऋ ए	肥 の 梵 字
	॥ ३	阿 育 王 刻 文 の 字
	ॐ ॐ ॐ ॐ ॐ ॐ	文 シ ン ガ リ の 字
奧 藹 藹	𑀓 𑀔 伊 伊 阿 阿	肥 の 漢 字
(短 長 短)	(長 短 長 短 長 短)	
	o ai e r̂ r û u î i â a	本 書 所 用 の 羅 馬 字
ア オ ア リ リ ウ ウ イ イ ア ア		日 本 音 の 近 似 せ る 音

10/1/35

ः • ऋ ह स ष ब्र व ल र य म
द न ष ण व ट र य म
रु ल ष ष ष ष ष ष
• ए अ य ष ष ष ष ष ष

訶娑沙奢嚩羅囉也麼

h m l h s sh c v l r y m
ハム ダ
は若
ラ ハ サ シ シ ヲ プ ラ ヤ マ 四

明治三十年十一月六日 印刷
同三十年十一月十日 發行

印度宗教史
〔定價金壹圓〕

著作 者 姉崎正治

東京市本郷區駒込東片町百廿四番地

發行 者 兼 印刷 者 金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表 者 原亮三郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

賣 捌 所 各府縣下特約販賣店

印 刷 所 三協合資會社

東京市京橋區弓町二十四番地

